

川柳塔

昭和四十八年四月二十五日 印刷
昭和五十八年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷 六七二号



日川協加盟

No. 672

五月号

小西無鬼句集

『草鞋酒』刊行記念句会

— 本社五月句会 —

日時 昭和58年5月7日（土）午後6時
会場 なにわ会館

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
（地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車東南）
電話 06・772・1441番

兼題 はなし

【内助】

若柳 潮花

【少年】

酒井 ひか平

【晩酌】

遠山 可住

【席題】

橋高 薫風

【会費】 各題三句・締切7時

二千円（句集呈）

川柳塔社



OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 オースケ

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オースケージェフ

和と誠実

受験子の結果を上手にさぐりあい

籍入れる話きいてる波の音

摘草に万葉の歌口ずさみ

菖蒲湯の菖蒲枕に老いの顔

旅人に鴉の声の騒がしし

西尾 葉

昭和五十七年度の川柳塔の合本が出来てきたので、何気なく繰りかえしていると、十一月号に名誉会長生々庵氏の挨拶が目についた。

一ト握りあゝ人生は和に如かず

という恩師路郎の句を最後に掲げて、十七年間の長きに亘って、川柳塔発展の為に尽誠して下さった精神は「和」の一字の合言葉であった、というご挨拶であった。

先般、あるコラムを読んでいると、社訓、社是のことが書いてあって、或る生命保険会社が調査した結果が発表されていた。

先ず、製造業、流通業を合わせて六千四百余りも寄せられた中で、全体のベスト五是

(一)は和(一五・二%) (二)は誠実(一二・九%)
(三)は努力(一〇・六%) (四)は信用(四・六%)

(五)は誠意(三・八%)となつてゐる。

こうした結果を見ると、社是・社訓は簡単明瞭で誰にも解り易いのがよいようで、第一位に文字の「和」が挙げられているのは、日本企業らしく意義深いものを感じられる。即ち企業社会という組織の中で、チームワークが最も大切ということのほか「平和」の意と「大和魂(根性)」の意も込められていると考えられるからであらう。

なお、上位三つを合わせると、「和を旨とし」て、「誠実」に「努力」すれば、会社は発展するということになるのも面白い。

それで初代理事長の和の精神を旨として、二代目理事長は「誠実」を強調して、塔社の発展、柳界の前進を期したいと思うのである。何卒ご支援ご協力をお願いしてやまない次第である。

川柳塔五月号

座右の句

聞いて欲しいこと一つある落椿

(千代)

私の句

梅一輪ご縁頂き候て

野坂 なみ

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

和と誠実

もぐら馬鹿

川柳塔 (同人吟)

自選集

■川柳太平記(60)《川柳の群像》今井卯木

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

工藤甲吉自選百句

香川酔々自選百句

西尾 栞 (1)

橘高 薫風 (2)

西尾 栞選 (4)

東野 大八 (32)

黒川 紫香選 (36)

濱野 奇童 (49)

羽原 静歩 (57)

(52)

(50)

(57)

(52)

もぐら馬鹿

橘高 薫風

鎮魂の松杉桜桜よし

古墳には一番ふさわしい夕日

私の家の前に豊中市文化財の大塚古墳がある。明治の頃までは桜塚三十六塚と言われた通り幾多の古墳があつたが、重なる開発により今は残存する数個の墳丘が桜の群落のある閑静な住宅地に点在する。大塚古墳は、直径約50米高さ10米ほどの円墳で、幅13米深さ1.5米の周濠を備える。百本ばかりの松があつて朝朝山鳩が来て鳴いてくれることは随想「中桜塚」(岩井三窓著「川柳読本」所収)に書いた。私は朝夕、時には深夜にも墳丘に上つて夕日や月にしばしば心を休めた。

その古墳から粘土槨、割竹形木棺が出土、棺内外から衝角付冑、襟付短甲をはじめ、鏡、鉄刀、鉄剣、刀子、盾、槍、弓(杖製品)や碧玉勾玉、碧玉管玉、ガラス玉、白玉などが大量に発見された。短甲は三領、鉄刀類は計十九点、玉類に至つては、調査以前の出土分を含めると百三十四個、埴輪となつと、一段目テラスに直径20厘前後の円筒形埴輪が10厘間隔で並べられていた。

発掘のきっかけは、昨年(1978)の台風時の豪雨に

愛染帖

■随想 ひつじの雑唱 (1)

大相撲春場所を観る (大矢十郎・高杉鬼遊)

「髭」

一路集「星」

「島」

初歩教室

柳界展望

本社四月句会(川柳全集『西尾栞作品集』出版を祝う会)

各地柳壇(佳句地10選／田中笑風選)

雅号ぶっちゃけばなし／若宮武雄 77

編集後記

薫風・酔々・鬼遊・史好… (83)

橘高薫風選… (54)

竹内紫鏑… (58)

齊藤三十四選… (60)

西山幸選… (62)

山内静水選… (63)

本田恵二朗… (64)

… (66)

… (67)

… (72)

座右の句

やがては闇に沈むにしても月の屋根 (千代)

私の句

月へ近づきたくて雑草屋根で咲き

寺沢 みど里

ヒスイの勾玉が流出したことによる。学者に

見せると勾玉は本物だった。以前にも小学生

が見付けて届け出たこともあったので、棺が

崩れはじめている証拠が歴然としていた。す

みやかに保存すべきだと、去る一月十日から

発掘調査が始められた。調査の主力は、日本

史(考古学というのか)を専攻する二十名足

らずの大学生だが、朝から夕刻まで凍てる土

を少しずつ掘るのである。誠に細やかな作業

である。噴霧器で水をかけると地質の違いが

色に出てくるので慎重に掘り続ける。棺が出

て来る。内部に施された朱が鮮やかに浮いて

くる。埋蔵品には、絵具筆を水にしめらせて

最も細心に土を溶かして全貌を浮き立たせる。

凍土にへばりつき、這わんばかりの姿での単

調な作業は、寒中、並みの者には出来ぬこと

に思われた。

大塚古墳は、約千五百年前のもので二つの

棺があったこと、一つは鎌倉時代に盗掘に逢

ったこと(盗掘の大きな穴が極めて残忍で愚

鈍な跡をさらす)、この古墳が、畿内の西方最

前線を固めた軍隊の將軍級人物の墓であるこ

とが分り、国史跡級のものであると考古学者

から折り紙がつけられた。

調査はまだ続けられている。私は、もぐら

馬鹿を思い、川柳馬鹿を思った。実は、もぐ

ら気違い、川柳気違いと言いたいのだが、気

違いという語句が近來使えなくなったのであ

る。こういう阿呆がいけないことには、どんな

世界も進歩前進はあり得ないのである。



西尾 栗 選

兵庫 遠山 可住

手づくりを母から受ける寒の水

歳月はみななつかしくしてくれる

黒梓の父に真つすぐ見つめられ

年寄りがおりなはるにと恥をかき

春一つ重ね如来へ掌を合わす

芸術の端くれに居るベレー帽

退職金を預けあしたの本を購う

寝屋川市 稲葉 冬葉

ばあちゃんになりたくないが嫁が来る

焼芋が春の女に水をさす

ドクターストップピールの旨い夜

想像の中にあなたを盗みます

桃割れを結った昔を聞かせてる

修身を学んだ頃の駄する

八尾市 大路 美幸

絶対に興奮しない人形の目

朝刊に戦(いくさ)が多いある予感

きれいごと男の鼻が乾いてる

やはりそうですかPTAに市長来る

熱意もう疲れてサフランに水をやる

倅せが溢れ師の影踏み過ぎる

米子市 八木 千代

善人のままで旅立つ雪だるま

あの世ともなくてこの世の落椿

ははの樹を捜しに戻るかたつむり

一合をとぐ掌に春が昨日今日

もぐら叩き純な生れの女だな

お伽話が好きでたまらぬ春の屋根

八尾市 高杉 鬼遊

八人の子にもない鯉のぼり
武者人形とかく男は威張るなり
エンタープライズ港おんなに戦あり
文学や宗右衛門町に雨が降る
手摺みのめし業平にあらずとも
戦友が二人サウナに生き残り

岸和田市 高橋操子

人形でないわと幼な妻が言う
北キツネの恋の季節へ積る雪
日本のよさしきたりにある評価
七十の意欲作品展に燃え
まだ生きる意欲へ夢を一つ足し
人里の厚意へ急ぐ母キツネ

和歌山市 西山幸

煩惱へ聖書は何も語らない
とつときの小嘶ひとつ持っている
千羽めの鶴折る指が疼きだす
桃も桜も散ってしまった待ち呆け
自動ドアすこし機転がききすぎる
その日から臍抜けになった日記帖

大阪市 小出智子

花散りぬ人恋しさもひとしきり
過密都市はかほか弁当売れている
伊予柑の香りで満たすひとりの部屋
サッシ窓つまらぬことは聞かぬがよい
風はみどりお人好しにはならないぞ

青春は遠くなりけりリルケの詩

松原市 谷垣史好

徳用燐寸思えばいつも温つてた

死後三日郵便受けに罪はなし

ズック靴とは不倶戴天のスニーカー

弱い者同士に似合う縄のれん

月光よいつか一人になる茶碗

カマトトめ胸に本など抱えおり

桜井市 岩本雀踊子

良心のかけらがあつた涙かも

裏の家の朱が鮮やかな花石榴

怒らせた猿に先祖の顔があり

音のない部屋の怖さを知ってるか

リングの皮長くむいた闘病記

凡人で終った父に恩がある

松江市 柳楽鶴丸

コピー食品にだまされぬ舌を持ち

女房は嫌い妻には感謝しています

個性を着る妻視線をはね返し

ヒナ壇でとばけている菊の花

鳴り砂に魅せられて書くト音記号

過保護娘生活経験不足病

岡山県 嘉数兆代賀

生きていく為の不孝は許される

なぐさめの風なら要らぬひとり旅

途中下車して真心の風にあい

探しあぐねた鍵は心の中にある
誤解まだ解けずゆつくり雲流る
廃線の痛みを抱いて走る貨車

島根県 堀江芳子

夫の瞳に記憶をひらく春を活け
新たな旅路とおもう朝のお茶
正朗さん正朗さんと酌ぐ息子
お茶にしましょうかと折れて救われる
こんなとき年を数える負けいくさ
聞き馴れた音にも走る夫の感

喜屋川市 江口度

三月三日きつちり桃の花咲かす
梅日より南枕で聞く蛙
連子窓今も聞える機の音
花時計の前できれいに別れよう
教祖の呪詛へ遺伝子が騒ぎだす
生徒の影を踏んで先生なぐられる

大阪市 中川滋雀

過去を追う愛の点減くり返し
身に覚えあるから叱言しまいこみ
少年の笑顔にボール投げ返り
ブッシュホン軽いタツチの会話です
沈丁花匂う堀まで来て別れ
狙われているかも知れぬ鍵をかけ

古い靴捨てて来た春の宵
富田林市 岩田美代

和解出来そう土筆首を出す
ひとを恋うことしきり人老いて
真実の手紙まるいポストがみつからぬ
人死んで姦し三角にぎりめし
人を疑うているながい長い夜

奈良市 森田カズエ

夫婦箸知るや知らぬか別れの詩
非常ベルの再確認もして会議
一丁の鑿に仁王の口が裂け
決断を急かせる捻子は妻が巻く
ハイソ—ナンデス兼高さんと旅したい
睡蓮は言うわたし睡ってなどいない

八尾市 高橋夕花

帯低くひくくして姑となり
核家族母はおんなをとり戻す
爪びきの弦が朧の夜にする
祈りながら小さな罪をまた重ね
苛らだつて仲間を見送る立ちおくれ
ややあつてすらりと逃げた受け答え

大阪市 津守柳伸

ほほえみは此所にもあつた路のとう
菜の花と仕事が好きでまだ嫁かず
美人ではないがゴシップ製造器
ままごとの夫婦にはなし尽きませぬ
春一番鳥肌立ててニューモード
怖いものないのがこわい独り者

新宮市

川上 溪水

試験だけ出来て此の子は良い子です

悪友という付き合いを大事がり

マイカーで来て職安の列にいる

髭剃って出かける訳でない無職

日本の味で中華のはやる店

一番に来て末席に座る癖

米子市

小西 雄々

ホールインワン欲張らずマイベース

余生なおゲートボールで食進む

愛人の葬儀を人垣から覗く

約束を守れば傷つく人もあり

教材は海老グラタンはまだ不得手

一度だけマジックミラーで見た秘密

和歌山市

若宮 武雄

老妻に風邪をうつした慌てよう

春雨に高層ビルも伸びている

不景気の暇をゆっくり花の下

気づかいの嘘後味を噛みしめる

盲導犬の役を霊長つとまらぬ

移り住んで十有余年庭の苔

和歌山市

福本 英子

儂さを幾つ見送る六地藏

時折りは悔いしないようになまけてる

暖冬に慣れた零下の温度計

ボタン一つ掛け間違える春一番

お手本へ忠実すぎた日の個性
責任は無いと次男の嫁の鼻

西宮市

林 はつ 絵

真白なしきし一枚ある強味

莫迦になれと味方の風が袖をひく

指人形のひとりを底い抱きつづけ

海が風ぎ思うぞんぶん昼寝する

事後承諾そのうちそれもなくなっていく

島おとめガラスの靴のゆめを見る

富田林市

板尾 岳人

紙つぶて雑木林で父に逢う

目玉焼男冥利へ嫉妬する

ネックレス母の乳房と恋人と

耳飾り孤独な風に逢う五月

月光へ無駄な男とトタン屋根

奈良県

香川 酔々

癌などにかかりませんと大根する

水道の代わりに若狭の水が来る

巡礼の鈴から春の絵ができる

アミノ酸やはり豆腐とコップ酒

ストローで吸うとき見せる片えくぼ

藤井寺市

児島 与呂志

戦友会にて(三句)

四十年いとやすく振り返るまい

班長と言われて笑うて叱る人

この懐古胸に残っていてならぬ

頑固者みたいに思われている律儀
結局は結論の無い日が暮れる

大阪市 川口弘生

おばあちゃんが亡父譲りを証言し
待った甲斐あったと言える縁うれし
踏み台の父がつづける無言劇
チヨボチヨボの出世幼稚園からの友
人柄を褒められ寄付を強いられる

米子市 林瑞枝

親の恩子の恩屋根も光り合う
胸に棲むひとりへ放つ朝の弓
山姥の朝は祈りの水を汲む
泣くまいと決めた椿の花の向き
ユニホーム着せるとロボット欲が出来

大阪市 西森花村

選挙ピラ座敷に上げずに捨てられる
磨き甲斐あるのは鍋の尻ですね

回顧

銃取れば元氣が出そうお年より
こんな女こんな男になった国
空襲が無ければ春の雨だった

伊丹市 樫谷寿馬

祭壇に置かれる写真だから笑う
大正のうたを大正琴で聞く
書き置きがおかずの在り処でそれでよし
婦人科にロツカーのキー捨ててある

おでん屋の隅うらぶれた紋次郎

倉敷市 小野克枝

伴せは弁当箱に音があり

赦すことばかりを合図する片目
欠点が無くて困ったお人です
思い出の橋は渡らぬ方がよい
わたくしは昔優しい女でした

吹田市 藤村メ女

灯をひとつ守りつづけた母の愛
美しく光る涙のよき出会い
平家がに歴史の海を這い続け

冬の雨つまらぬ事で娘ともめる
口軽い人に言うとき入試パス

倉敷市 野田素身郎

正論ではあるがとやんわり押さえられ
口座振替キャッシュカードは妻が持ち
つぎつぎに値段を見ては諦める
糸口を変に手繰って縛れさせ
草萌えるリハビリの足軽くなる

大阪市 天正千梢

「どうって事ないけど」と許してはいない
嫉妬とは言わさぬ動悸おさまらず
もうこれ以上自分をだまさない
ミンクのポケットに鬼の面入れて
二人三脚今日飛び越えた水たまり

柳井市 弘津柳慶

かばかりの土産に孫ははしやいで
叩かれてそれでも強気で押し通し

言訳の知恵を妻から授けられ
結局はうやむやの内に多数決

梅の香へ残留孤児の目が寂し

宝塚市 傍島静馬

春寒料峭ヤングに縁のない言葉

ジーパンの脚炬燵ムードのあらばこそ

宵寝朝寝コーポ族化の老夫婦

銭形平次の老妻とナイター鉢合せ

戦友会員最後に俺だけ生き残り

倉吉市 奥谷弘朗

おとぼけを笑い合ってる老夫婦

スタートは同じ裸の引揚者

あれからの小さな善意続く文

当分はじつと我慢の子で居よう

日めくりの格言を見て朝を出る

岡山市 時末一灯

ニッポンが息づいている裏日本

どん底の答えを石にきいてみる

悪人の右手ポケットに深にいる

コマーシャルの間にドラマ見せてくれ

日めくりを一枚無事な夫婦箸

平田市 久家代仕男

税折衝すませ気軽な野良の鉢

農に居て嫁が野菜を買う時世

裕福の自慢ばなしを聞く炬燵

出不精を妻がなにかと誘いかけ

落のとう帰省する子に摘み残し

下関市 国弘半休門

醍醐味もスリルもあつて釣りが好き

注意した方も吞んでる風邪薬

ブライドを言うから恋は空まわり

レントゲン古傷だろうか黒い影

人類の平和にはと派とたか派と

竹原市 小島蘭幸

夫唱婦随の傘は一本あればよい

嫁いだ先の天気予報を今日も見る

義兄弟とことん酔うてする握手

合格へ父は家さえ売らんとす

グループで来る十四五歳はもう大人

大阪市 江城修史

風五月記憶の中の労働歌

愛情ははるけきものよちぎれ雲

世話好きの度が過ぎ馬鹿になり下り

生きる掌をしかと合せて弥陀拝む

四面楚歌影より外にない味方

松原市 玉置重人

骨入れる墓地日当りのよい所

マンションの昼はローンを背負い留守

働ける倅せさりながらラッシュ

引越した娘へ回数券がすぐ瘦せる

数え唄だんだん先が見えてくる

呉市 林野甦光

幔幕のふくらみ加減茶の香り

チャリティショー気取らぬ女ばかりいて

城跡の花に埋もれて浮かれけり

スタントマン一步無駄足踏んでおく

賽を振る男が平行線にいる

京都市 都倉求芽

工事場の囲いの外の春の草

春を呼ぶ雨へ駄弁となる家族

散ってなお土へ還れぬ床の花

餅を焼くのに家族で囲めないレンジ

看護婦の私服にイメーシ躲される

堺市 高橋千万子

シラをきるとどこまでつづくレモンティー

晩婚の見事な出会い桜咲く

眠かっただけでドラマのない夜汽車

歯が抜けて柔和な顔になる勝気

老けこまぬ亡夫の顔のうらやまし

堺市 藤井一二三

三月三日春を奏でる琴を聞く

兄嫁が綺麗で縁談またつづれ

勲章が好きでいくさの火種掘る

妻や子に無視された日の咳払い

選挙演説汚職はどんな顔でする

八尾市 宮西弥生

女の世界の上に立って犯される

ここだけの話となって眼が光る

逢いたくもあり逢いたくもなし永雨降る

マンネリのこわさ墮性の言葉出る

ひとだますきびしさはない春の海

大阪市 村上田鶴子

桃の花おんなはかわいいものとする

手品師と仲良くなった愚者

風の夜は人の情けをあてにする

和解をきらう男盛りの土踏ます

へそくりを本気で妻がためている

神戸市 中村ゆきを

生命線あざやかに走る知恵おくれ

鯉のぼり休んでいこうれんげ草

闇に咲く花の匂いに誘われて

つまずいて軸心経にかけかえる

ゲートボールみんな仏の顔になり

神戸市 仲 どんたく

細ぼそにとほしき給油の老い凌ぐ

適マーク葵の紋にはかなわな

御堂筋あの頃二人へ短かすぎ

薬づけの胃の貸借対照表

風見鶏大きくなったらタカになる

倉敷市 稲田豊作

亡妻の箴箴へ樟脳二十年

本心を話すと僕が小さくなる

初七日やさあ遺族らが火蓋切る
虚勢張る肩が次第に凝ってくる
双肌を脱ぐ友情が駆けつける

倉敷市 藤井春日

燵銀の重みを見せて父無言
物思ふ心はかくし切れぬもの
ママ少しお洒落なさいと娘言う
人形師の命輝く肉裏離
宿命悲し真すぐ歩む道がない

大阪市 河井庸佑

こんな謎解けぬ自分をはがゆがり
左遷の地うまい地酒が待っており
三次会とうとう本音聞いてくる
更迭の話噂は噂呼び
幹事慰労二次会三次会

藤井寺市 吉岡美房

妻の喪があげれば桜散っていた
旅立ちを思いつづけて日が暮れる
旅人の心ひとりになりたくて
時を消すためのコーヒー飲んで
妖精の帽子になったねぎ坊主

美祢市 安平次弘道

わがままに育って愛に飢えている
花種まいてきれいな夢を見る
サラ金が夫婦の隙をついてくる
共犯者にされる相槌とは知らず

「サクラサイタ」金の力と子は知らず

竹原市 森井菁居

涙もろい気質は母の血をもらい
棒グラフ背負う男の向こう意気
少年剣士の気合いはお面だけで良い
あきらめると坂が途端にきつくなる
ひよっこりと消えるさだめの水の泡

奈良県 村上春巳

大正の生れ置き薬性に合い
旅のピラ白髪ぬいてるぬかれてる
トンネルへ入ると家が近くなる
通勤もベテランちゃんと腰を掛け
おいこらでなによなにさも夫婦仲

奈良市 宮口笛生

薬師寺の鐘に欠伸の出るも春
春始動二日目ごとの雨となり
どの家も言うことがあり言わぬだけ
都合よく行ってる方と無事の夜
胃薬ものんでる酒ものんでいる

京都市 松川杜的

直線が真すぐ引けて職がなし
蒲団ぐらいいはあげてます余生です
一年前の日記も啓蟄の事を書き
臍繰りがつくれぬ妻でつつがなし
鉛筆を削ればブンと来る木の香

京都市 山本規不風

仲のよい女に同じ古い傷

指切りの果せぬままの渡り鳥

記者団のまん中にある嬉し泣き

生命線では判らぬ死期に皆安堵

血圧計買うたら計る事忘れ

宇部市 平田実男

ていのよい小使い中間管理職

ドラマの嘘兵士の髪が皆長い

遺産分け法の力がある不幸

雑草が一番先に息吹く春

お世辞だと知りつつ重い腰を上げ

大田市 藤田軒太楼

さりげなく言われた言葉にある暗示

寄り合いの顔ぶれ変な予感する

ドック入り余生の夢は捨てていず

手術跡なでて余生の幸を追う

気前よい夫で客の絶間なく

八尾市 飯田悦郎

共稼ぎ冬を歩いて今日があり

口笛が不倫の耳に冴えてくる

原点に絞れば彩のない女

わが歩調題名のないドラマなり

恋の火を消して門出のハネムーン

東大阪市 斉藤三十四

蒸発の父の写真は笑ってる

天神さんの梅は合格たのまれる

算数に弱い女で男好き

退職の餞け惜しい人と褒め

鮎の香を忘れぬ今年の宿予約

守口市 羽原静歩

ひたぶるに木曽路は恋し道祖神

リングサイドどうでもこうでも勝たせる気

鯉のぼり一膳飯屋の二階なり

カゴメカゴメ春の笑いの土を踏む

西国のバスにもカラオケ鳴り響き

鳥取市 両川洋々

恩師の訃告げる受話器も哭いていた

風見鶏の政治へ望む夢がない

毒舌で長寿死神手こずらせ

登校拒否聞けば先生の方らしい

聖職の神話が音もなく崩れ

玉野市 小谷仙山

口止めを二度されたから内通す

其の内に苦手が飯の種になり

立って居るだけで流れに嫌われる

露のとうお前も春が好きなのか

激流をのぞいて橋が恐くなり

堺市 大道美乙女

ミルク色恋のふたりを包む夜

満員車肌の温もり盗まれる

幾山河越えて契りも共白髪

筋書には書いてなかった糸切齒

冒險を期待す温泉宿の下駄

岡山県 白岩文衛

白髪のいつまで人を恋う歌か
潮騒の宿はるばると書く旅信

以下同文同文という友情さ

還暦のまだ見続ける夢と夢

わが胸も餅もふくらむ友といて

岡山市 川端柳子

決断の朝へ化粧の伸びのよさ

それだけに心配いのしし向う見す

すばらしい沈黙海は風いでくる

階段に負けるなここぞ奥の院

名のある手ひねった花器の焼け具合

岡山市 (備前窯で) 恒松叮紅

身体だけ大人で学生証をもつ

湯の宿でひなびた民話炬辺咄

少年非行傾いてきた父の塔

還暦へ一つ秘密を置いておく

いわし雲忠霊塔が風化する

松江市 小林孤呂二

水仙へこころが向いていく熟年

不景気へ構える朝の歯をみがく

確かりと吊り革にいのち托す朝

籠の鳥と2DKに住みなれる

おろおろしてる先生多い記事

松江市 舟木与根一

背泳ぎも教えてくれた父の海

嫁の目を盗む呼吸が孫と合い

一芸に秀いでています指のたこ

不眠症も春の夜明けはよく眠り

食卓で季節音痴なる文化

松江市 梅本登美也

たくらみの踵が折れた銀の靴

カクテルのグラスに咲いた未練花

フルムーンあらわな肌をふつと見た

定年はないが仕事のない大工

手内職米櫃のぞく癖があり

今治市 越智一水

子が親を親が子を刺す世の乱れ

着ぶくれてお前も俺もうとくなり

水ぬるみ妻よろこびの歌唄う

雲の動き見ながら田螺動き出し

花吹雪女が許すひざ枕

岡山市 松本忠三

四季楽し雪便りあり花便り

事務机課長以上に鍵があり

役不足仮病使ったなと思ひ

耳寄りな話やきもきさせたまま

大詰めへ雑魚身支度を整える

鳥取県 鈴木村諷子

呆けてきた女房を叱る気になれず

人間のもろさはかなさ春の夜に

文盲の母がポツリと真実を
生き残った者でやつてゆくより他になし
便箋に涙の跡も書いてくる

鳥取県 川崎 秋女

あり余る豊かさにいて孤独の死
二で十を割つて余りの出た話
この波紋ここで食い止め男です
四秀のないキャベツが居住権うばう
生きざまを今日のページに塗りつぶす

鳥取市 小林 由多香

血液の違い親子の絆断つ
反対の署名怒りが筆にのる
ジंकスが心の隅で袖を引く
分相応社宅に似合う雛を買う
愛情の絆七くせみんな好き

鳥取県 森田 布堂

推理もの読んで十代ぐれはじめ
湯豆腐になごりの雪が窓に舞い
師の恩は忘れて犬に笑われる
孤児のいるかぎりいくさはまだ続き
つむじ風受けてとまどう風見鶏

鳥取県 金川 満春

百迄も生きたら日本へ相済まぬ
ゲートボール俳画川柳ワンカツブ
約束は以心伝心老いの愛
非行化は学歴社会の吹き溜り

不沈空母大声で泣く北の島

鳥取県 林 露杖

山菜の由来肴に山の宿

白酒に酔った男の細い首

嘘庇う嘘を真顔で聴くも義理

ほとぼりをさます合間に繰る聖書

見下して叱言聞いている十二歳

鳥取市 森田 熊生

さわやかに酔つて昔の恋にふれ

酔少し回つてからのぐちがある

ご自由にどうぞかえつてほんとかれ

趣味が実益になって個性が消えていく

妻僕を信じて子守唄うたう

出雲市 原 独仙

モーターも予約済みかや春うらら

四季巡る国に生れた身を感じ

貸家有り隣りは鋳力屋製材所

禁煙のわれ値上げとは小気味よし

保険屋の粘りへ頑固な父対す

出雲市 園山 多賀子

白い風女が支える防波堤

暗れ姿ビデオが綴る祝いうた

病名は告げぬ無口な白い壁

小賢しい女が歩くけもの道

カタカナが読めず外来語辞典購う

出雲市 板垣 夢醉

ポーナス期もう止り木でさえずられ
褒められて善人いたく照れている

還暦のポイント下り線となる

離婚せぬもう再婚の出来ぬ齡

胸はずむ日の口紅はよく伸びる

出雲市

石倉 美佐子

心からの悪女になれぬ彼岸花

温かく落葉は若い芽を包む

句読点ひとりの女が打ちに来る

運悪く現場の風に巻き込まれ

母二人浄土の道は連れとなる

出雲市

吉岡 きみえ

うらみつらみ消えて弥陀の手に遊ぶ

年金に届いて安堵の顔でねる

不倫にはあらず逢い度い人想う

善人はクモの糸で救われる

本堂に背筋が寒い地獄図絵

岸和田市

福浦 勝晴

幸せな方だと他人がいうてくれ

向い風おのれを信じて踏むベダル

興奮の材料になる罪な記事

海昏れて砂丘に初夏の匂いする

角栄を褒めると笑うから貶す

岸和田市

植山 武助

似合わないかも知れないがVサイン

どうしても明日は負けたい雨男

建売りに囲まれて来た元地主

さて今夜はどの本にする不眠症

コウノトリにお願いがある一人ツ子

岸和田市

清野 こう

旅館火事旅立つ朝に聞く不安

走らずに行きやと見送るランドセル

恍惚の夫守りして生きる人

新築へ捨てるに惜しい古時計

還暦へたしなみだけの化粧する

岸和田市

古野 ひで

桜草可憐に咲いて小さい春

セールスマン身の上話少し混ぜ

許可おりて嬉しい湯舟の快復期

吹く風に春を見つけた柳の芽

慾のない老医で注射なぞしない

岸和田市

原 さよ子

腕白な孫ひっそりとして不安

合格の電話涙で受け止める

この次は孫の出番のお遊戯会

梅林で甘酒両の手で包み

久し振り時を忘れて立ち話

岸和田市

島崎 富志子

言いたいこと言える若さがうらやまし

長生きをしろと身体を切りとられ

足音が我が家で止まり娘が帰る

職安が見はなし年金にひろわれる

ほとほと歳を感じる針のみぞ

岸和田市

福島 せつ子

忘れたい過去を背負って老いの坂

新聞のチラシが誘う主婦の足

転任の予想があっけなく当る

転任の準備心に燃えるもの

寡婦ひとり気儘の二字の中に住み

岸和田市

吉水 照江

星影のワルツ老人会の喉

同居して姑はらはら氣を使い

民宿の訛は心を温める

親に似て通学朝のコンタクト

ボンボリの灯が浮き城の日が沈む

貝塚市

行天 千代

うつすらとすぐに消え行く雪化粧

お水取り早く済めばと待ちかねる

春を待つ一と雨ごとのぬくもりよ

散る為に桜は風を待っている

子に見せてよそのお庭の鯉のぼり

岸和田市

狭間 希久志

時間ですパート後も見ずに去り

ローンまだ定年で去る保証人

聞いている笑顔だんだん固くなり

遮断機が降りて仔犬抱き上げる

定年へとばけた振りで送る日々

和歌山市

垂井 千寿子

北風へおたふくの面つけて立つ

お隣りの芝生の青さなど見ない

腹立てて鏡の中の貧しさよ

紙人形作る夜女の影うつる

被爆忌や生命線を確かめる

和歌山市

浦野 和子

母の忌や永雨も慈雨となる高野

生きて行く知恵をお多福から貰う

少々の危機は肥しにする闘志

誰にでも書ける一つの物語

他人から見れば当然来たピンチ

和歌山市

内芝 登志代

馥郁と咲いて運命の梅干しに

血縁より手塩にかけた絆知る

一日のいくさを語る眼のくぼみ

新しい命へ賭ける親のエゴ

大地への夢見つづける水中花

和歌山市

松原 寿子

許された彩を結んで愛を編む

思慕一滴ふり切れぬまま花に佇ち

愛の壺へきずなを活けて女かな

渴くころへ余韻がしみる日の別れ

シグナルへ掟があつて瞳がぬれる

和歌山市

坂口 公子

けんらんと春菜の畑が燃えています

前髪の奥からのぞいている打算

堰切つてしゃべれど哀し冬の雲
縄のれんみんな威勢のいい男
ほとばしる水出たとこの勝負です

海南市

牛尾緑良

新しい眼鏡で明日に逢いにゆく
祈るたび母の十指が瘦せてくる
童心にはもう帰れない青い空
勉強の明りへ母が安堵する
飲めぬ酒だから悩みが深くなる

和歌山県

天満三千代

早朝の雀の声を聞く平和
ボケットに我慢の拳かくして
川一つへだてて習慣違つてた
生き方と世代の違い揉めさせる
手加減の保母が幼児の矢にあたる

和歌山市

堀端三男

彼岸来て日記が続いている不思議
黒潮が洗えば人情まで温い
長居した客は夜空を褒めて去ぬ
竹割った気性日銭が身につかず
冴えわたるオリオン通夜の帰り道

和歌山市

細川稚代

燈明のぬくもりほしい不況風
自己主張遠くで雪崩の音がする
おおきにと素直に言えた電話口
あんな日もあった二人の紅椿

新しい日記狂わぬ字がならび

米子市

石垣花子

愛を割く時は冷い金の顔
式場の鏡は悲しい顔知らず
貧乏神器用な男につきまとい
進退をこんな男に握られる
手に職をつけに旅立つ非行歴

米子市

増田竹馬

帚星二度観る幸を温める
不特定多数のデート寿会
友情の手で知恵の輪が解かれ
ジグザグに蝶は春風に酔うて舞う
情熱の残り火煽って詩を創る

米子市

桑原伊都

屋根瓦ビルの谷間で意地を持ち
団らんの灯へ逃げて行く北の風
冬日和あとの寒さを忘れさせ
島椿もえて本土を恋しがり
波紋広げた石水底で黙ってる

米子市

雑賀美世

教会の屋根は居寝よし小鳩来る
コーヒーを愛す明治のベレー帽
条件をゆるめて老いの職を決め
囲まれたビルの日かげに蟻の列
一言を信じて決めたわかれ道

米子市

菅井とも子

素直さを買われ迷いの無い挙式
再会へ通訳です不幸せ

拡がった波紋に怯え貝となる

ブラックコーヒー自問自答の曲り角

ハネムーンの隣無口のフルムーン

米子市

野坂 なみ

新居にて(二句)

生かされて足跡一つ子と刻む

これからはのんびりやれと亡夫の声

わびすけを移して浄土花ざかり

亡母の忌や乙女椿は今日へ燃え

乗換えの駅ここからの一人旅

米子市

政岡 日枝子

別々の思いを抱いてフルムーン

死火山の肌でたくらみくすぶって

逃げ出して来たとは言わぬUターン

困るたび妻が手を貸す夫婦坂

寡婦だから困る射程にいる男

米子市

田中 亜弥

竹割った気性女で惜しまれる

ゆっくりと眠れ深夜のおもちゃたち

御腹から笑うが好きで寄席へ行く

母になった娘の額ふいてやり

空高く隣の鯉がよく泳ぎ

米子市

寺沢 みど里

雨だれの波紋ひそかな主義を持ち

それぞれの趣味へ一途な掘ごたつ

風邪七日ふり切るように髪を梳く

寄り添って一つの話題の屋根の下

野次馬の瞳で三面の記事を追い

島根県

西村 早苗

噂されるそんな気がする傘に入る

尻でドア押して重たい市場籠

雑草も春の大地を信じ切る

ねたみとも知れる語調がうしろから

やけ酒が覚めると昨日に戻る悔い

島根県

堀江 正朗

手に触れるものみな春の温みもち

音多い中から一つ拾いあげ

耳鳴りがストップかけた喉仏

そんな気がしただけ雨の音ばかり

またしても一人よがりの胸をはる

島根県

小砂 白汀

風がおる素足で大地踏まんかな

肩を抱くぐらいの余熱は持ちこたえ

朝霧に夏が流れるほととぎす

保険屋へ真綿のような妻を出し

たいくつな一日だった無事だった

島根県

榊原 秀子

風邪ごこち妻の手になる卵酒

水を得た魚のようによく喋り

A型の典型通りだと思ふ

白梅がほのかに匂う星あかり
糸屑のひとつ眼につくカーベツト

島根県

錦 織 文 子

倅せに流す涙もためてある
忘却と言うむなしい言葉抱きつづけ
血圧の床へ嫁あたたかい顔で寄り
人間が人間になりたい日の合掌
夫の旅独りの夜に想うもの

島根県

大 森 孝 華

直球を投げたボールが曲り角
なくさめの言葉さがして傷をなで
ほほ笑みにマナーも添えて初対面
善人は心のかげりちらと見せ
春を活け孤独たのしむ花ばさみ

島根県

梅 み どり

さびしさは年毎濃ゆく尾びれひく
がっしりと世代の歩幅で家守る
雨ざらし野仏様の丸い鼻
耳鳴りへ夜更けの孤独つよくする
水ぬるむおたまじやくしとわらべ唄

島根県

木 村 は じ め

覗かれたくらしはありのままでよし
歳月の重さ素直に老夫婦
同権をはみ出さず妻ついてくる
両の手で握手している久しぶり
又汚職金権政治ある限り

唐津市 仁 部 四 郎

アングルが合えば私も美男美女
錯覚を衝いて返り血浴びせられ
何もかも手許にあつて我が三畳
町工場JISマークが命綱
上役の末席業をのみはじめ

唐津市

浜 本 久 仁 於

からたち酒のこぼるる白秋忌
どんこ舟白秋の町見て回り
慰めはどこにでもある嘘を言い
記念碑を隅に移してビルが建ち
泣き虫になったむかしの強い母

唐津市

久 保 正 敏

足下に奈落があつた政治劇
一夫多妻倅せだろうかオットセイ
角栄の名札を敬遠する議場
踊り娘に惚れて脳波が狂う医者
取り巻きが挫折をしかと見届ける

大阪市

西 出 楓 楽

父と子が入ると風呂が長くなる
ストレスが言わせる言葉だつてある
流暢な言葉の裏のふたごころ
発熱が色気ある目にくれる
相槌を打たぬをせめて批判とす

豊中市

安 藤 寿 美 子

街角の迷子やれやれハッピーエンド

桃活けて孫へ電話をかけてみる
鰻重の上をたのんでドキドキし

三面記事識者の談話とはしょとく
雨音が朝寝をしろと言うてくれ

大阪市 黒田真砂

小石けって傷心の日の洗髪

大原女の笠より春の日がこぼる

明日は又明日の風吹く仕舞風呂

傷心に紫色の陽が沈む

他意ないと解って居てもとげの数

大阪市 那須鎮彦

人生は受身に強い人にする

偉人伝苦勞をなめた人ばかり

やすらぎが欲しいと思うたばこの輪

信じてるきずなが太い待ち時間

仕事一筋を笑わぬ陽が昇る

大阪市 横地雅風

年金で上手に住める過疎の町

ライバルの売り場でサービス真似て来る

十五階マンションやつと静かな夜

祝い鯛消化不良と栄養士

確定申告追徴金のあほらしさ

大阪市 杉本智慧子

春の淡雪名残り深げに降りしきる

佗び助の花が好きならお茶も好き

卒論の是非を預けてスキー行

老人になった日の為青写真
物怖じをしない若さに自信あり

大阪市 神夏磯道子

チューリップ素直な風をもつてくる

信じやすく騙され易い仏棲む

身の上話わたしと同じ安堵感

むらさがが眩しいと思う日の疲れ

あきらめる自分が恐くなってくる

大阪市 本間満津子

意気地なく無難な色を撰っている

相槌へひとりぐらしはおしゃべりで

外国は近く隣が遠くなり

春の幸皿一と盛りにごもくずし

花よ風よ杖よ有難う受賞の日

大阪市 藤田頂留子

案ずるより信じてやろうとつきはなす

本当の鳴き声知りたい九官鳥

五月空予は満腹の鯉のぼり

駅前のメガホン公約をたたき台

春風のタクトで唄う葱と蝶

大阪市 北勝美

少しずつ伸びゆく陽差しへ梅の花

一つとびみんな飛び立つ鴨の群

徒長枝つばみ一つも見当らず

放牧の童先頭だけを追い

一線を引いて同居の核家族

大阪府 鍛原千里

うすつべらな情けをつなぐ紙テープ
二三日プライド捨てたい砂糖つば
女のうそ重ねて爪はのびていく
いたわりをつい忘れてた春の月
三角の紙で女は罪を折る

大阪府 岡田ふみ

レストランへ次男は母を連れたがり
お化粧をしても派手目を着ても年
好きな事して来て家で按摩さす
春一番黒潮が来る鯉来る
ガリバーになった気がする幼稚園

大阪府 大野武太

会場の私語に一喝したくなる
二人でも何とおんなのかしましく
定年があればとある日ふと思う
戦いの古銃うずく寒い春
天皇サマ孤児たちの声きこえますか

大阪府 鈴木節子

沈丁花の香り私にはきつすぎる
地下道で出口ばかりを考える
桜の花を待っているのはランドセル
昨日の気ままアイロンきつくきつく当て
不器用な女で友だち多くもち

東大阪府 竹中綾珠

付き合いの金馬鹿にならぬ三四月

陽だまりの恋しい冬の散歩道

肩書がつまらぬ議論正当化

傷口を又えぐり出す計報来る

自閉性やつぱり愛情の鍵が開け

東大阪府 崎山美子

闘病の心のささえとなる雀

こち良い目覚めに雀の朝の唄

脱サラのための免許を考える

免許皆伝の腕も時代に見放され

民謡がこいしい世代の仲間入り

東大阪府 奥山弥山人

冬眠をさせと蝶々飛びまわり

せめてもと桃の花添え雛流し

甘党も笹酒を飲む大安寺

六方に先代偲ぶ初舞台

大阪府 宮尾あいき

私の減食知ってるようなそばの量

夜があげて春雨らしい音になり

おひな様しもった後の桃の花

夏みかん山積みにして新妻朝寝

たまに和服着ると奥さん風邪だっか

寝屋川市 柴田英壬子

ろうそくの炎希いの度に揺れ

なまぐさい糸では織れぬ綾錦

薄墨の梅のめしべに生命入れ

春の海罪の兆しはまだ見えぬ
動く歩道では歩きません律義

桜井市 河合茂雄

罪積んだ石にいつかはけつまづく

糸切れた風には帰る家がない

三下り半男が書くに限らない

故郷の夢も忘れた吹き溜り

これ以上回せば転ぶ父の独楽

大東市 土岐トク子

合格を知らせる孫のはずむ声

ひな祭り遠い昔がよみがえり

吸いこまれそうな哀しみ演歌節

さざんかの宿が身にしむ独り旅

愛すればこそその別れも人生の

香川県 岡田拳法

倫理なき過熱報道アジとヒス

反政府反米反核誰のため

恫喝や踊る阿呆に見る阿呆

ポーランド社会主義には明日がない

世界と戦い復興遂げしわれら

諫早市 原田明春

それぞれの願いへ神様とまどわせ

真すぐに育てば盆栽価にならず

さらわれて嫁った気がする末娘

鈍才の官吏で真実だけは持ち

丹前に靴下はいて宿の下駄

意地張った夫婦へ今日は氷雨降る
倍生きて亡父を恋うる冬の夜よ

和泉市 西岡洛醉

退職金あればあったで人が寄り

平凡な積木でも良し崩すまい

精一ばい歩幅きつちり善を追う

四面楚歌母さんだけが味方する

計算機孫の頑具と変りはて

村中が女の城へ味方する

年金を銀行までが当てにする

一合の酒で親父の流行歌

ぜいたくを言うなと夫が飲んでいる

お色直しからほぐれた父と母

錠剤の色とりどりに順があり

のし袋ポケツに今日も目出度けれ

底辺の生活救さぬ事ばかり

夢に見た故国で冷えた風に逢い

新築へローン忘れたシャンデリア

文盲の母が残したシツケ糸

かりそめの安らぎでよし易の灯へ

うますぎる歌へカラオケ座が白け

パロディのような句に逢うかなしい日

倉吉市 渡辺独歩

赤川菊野

高知県

兵庫県

大津市

學歷の風車が煽る吹きだまり

ピアノ買うキーからローンの音が出る

曲水の宴から学ぶ回し飲み

うつ病の頭もたげてくる五月

倉吉市 渡辺 菩句

困ってる腹見せぬのも芸のうち

突然に不沈空母に乗せられる

あれこれの死とたわむれて日向ぼ

健忘のおれがおれ笑ってる

それぞれの友情という電流

倉吉市 野中 御前

若者の主張に効かぬおどし銃

子育ても終りケートで若返り

鬘斗袋いくら包もう髭を剃る

負けて勝つ女房の鼻に髭がある

おかつぱにどの花つけてもよく似合い

兵庫県 辻 文平

破廉恥の色耳朵は知っている

ポケットに隠した嘘を笑われる

膝打って顔がほころぶ今日の首尾

砂文字を書く指先の軽い罪

張り過ぎた肘のあたりにある疲れ

兵庫県 藤 後実男

雪明り二つになった影法師

雪吊や豪華とみたり松の枝

言い勝ってみても所詮酒の席

身の上を話すお酒でつい本音

デパートの退け時男が待っている

西宮市 野呂 鶴汀

余生から引いて淋しき誕生日

それ以上言うなと話題変えてきた

勉強もせずに奉納絵馬祈禱

雑踏で父の隠れた顔を見る

筆跡は人を愛した美しさ

西宮市 妹尾 春江

新しい出会いと別れの今日を生き

こだわりを朝の包丁が戒める

フィルムが短かくなつて悔いばかり

地下街という大阪の町の顔

孫なりの夢をはぐくむ童話集

西宮市 杉浦 婦美子

駄洒落からまわりの風が丸くなり

嫁がせて無口な夫と見てる星

カラオケの妻に夜なべの唄がない

引揚げの脳裏に残る流れ星

雪山よ髭のあいつにケルン積む

仙台市 川村 映輝

我慢し合っているからよい夫婦

煽てられ又会長を引きうける
銀行振込み月給日でも妻無言

無精髭生やしてひまを持て余し
八十歳の姿勢或る日ほめられる

神戸市 山口 美穂

寢床から病母の指図で台所
順番に風邪家中を席卷す

果し得ぬ夢子に賭けてまた破れ
ワイングラスの夢は今宵かぎりかも
風邪に臥し恋しき人の夢をみる

七尾市 松 高 秀 峰

晩成と言われ昇任試験受け

もう一本栓抜きましようマダム来る

長生きをしたが部品がみな痛み

一生は明暗流転の繰返し

起こされて起こして早出の共稼ぎ

羽曳野市 榎 本 吐 来

出張の父昼酒を飲んでいる

胸算用此処らで止めにする読経

算盤の出来る御仁が居るお寺

文学部出て葬儀社のナレーター

世話好きで自戒の一步出てしまひ

富田林市 中 村 優

まめつした齒車夫婦の音で鳴り

それぞれの愚痴淡白なめし茶碗

喜怒哀楽古い日記の中に住む

見料で易者に心覗かれる

チャーミングなポイントが鏡に一つある

大阪市 欄 蘭

入院の老妻へ嫁の配慮提げ

焼香順どうでもよいのがこねる通夜

春一番そんな嵐を待ちこがれ

お静かにお聞きとレシーバー持って来る

病院の食事になれて退院し

川西市 氏 林 洋 敏

厄年が気になりだしてクラス会

サラ金の悩みを酒の席で聞き

子育てに偏差値がある恐しさ

三歳の劇で皆んなが主役です

テレビ欄詳しく聞いて三歳児

枚方市 栗 林 光 夫

老いぬれば忘るることの多かりき

戦友を歌い出したら止らない

名局の棋譜人生が描かれる

顰蹙の字体のようなしかめ面

紅梅が盲導犬の眼に映る

八尾市 山 下 み つ る

世帯主欠かせぬ義理へ家を出る

喉元に骨一本が残る宴

宮仕え終えて朝刊よむこわさ

地下鉄も新淀川は橋で越す

民謡のお蔭過疎地に人が寄る

守口市 野呂右近

おそがけの風邪で逃がした花見頃

外は雨独り浪曲テープ聞く

貰うより良いと見舞いの金包む

飲む話才女も少し顔崩す

銀髪が輝く素晴らしい余生

松原市 北野久子

甥の入院（五句）

ピーポーへ聴えぬ耳のもどかしさ

死なないでたとえ再起不能とも

手探りの治療へ奇跡待つばかり

欲しい物堪えて姉に貢がねば

心して暮そう一寸先は闇

豊中市 田中正坊

おみくじは小吉病い癒るべし

神仏は信ぜず奇跡祈るのみ

安らかな寝顔に付添い退屈し

かたかった会社の椅子よグッドバイ

知らなんだイライラ電波という緯名

高槻市 田崎素秋

末席の椅子で大きな夢を見る

老眼鏡嫌な世相が見え過ぎる

サクサク電報半ば夢のよう

当て先を秘かに明かす吸取り紙

青空がひとりぼっちに広過ぎる

尼崎市 奥山美智子

花だより母の匂いを持つてくる

春風の優しさ自信をとりもどす

自惚れはめったにしないカタツムリ

言い出せぬ思いを溜めたまま別れ

無邪気さと触れあいたくて旅に出る

稲原市 岩井本蔭棒

サービスはそれ程でない適マーク

ばかばかりテレビを消せば怒られる

保守革新どちらも国を憂う民

六つの子六月六日を待ちこがれ

億のつく拳式庶民を馬鹿にして

岡山市 井上柳五郎

くに訛り故郷を捨てても棄てきれず

席蹴った箸が話題のまま残り

傷つけて傷つく言葉がブーメラン

長老がつんば座敷にいて威張り

浅春に計報がつづくながい冬

岡山市 岩道博友

故郷に来て古傷を置いて去ぬ

自尊心持つて書いたが字を違え

訂正印捺しても人生帰らない

神様へ誓いの言葉がつまりかけ

口添えのお蔭で転ばぬ椅子に着き

兵庫県 中田白李

煙草吸うだけが楽しみかも知れぬ
九度目もタルマは軽く起き上がる
やがて夏ボックリ寺へも参つとく
マイホーム次次第に狭くなる
七人の敵も近くに見当らぬ

吹田市 西川 景子

春ですわね間違い電話多くなり
熱い指切りに風花溶けて消え
もどり寒隣も粕汁匂うてる
何でもない人なのになぜ湧く妬心
春のマリ恋愛ごっこに弾み出す

大阪市 中 西 兼治郎

アルバムに流転の人生見てる老い
お見合いに女の方にある余裕
うますぎた話やっぱり詐欺に会い
抜ける様な空とは青い青い色
和裁だけ苦手のままで嫁に行き

浜田市 中 川 幸一

シャッターを切るとやれやれ元の顔
持ち上げた相談役に用がない
膝坊主出した娘の裏千家
ボクサーがマットに伸びる身の世すぎ
派閥ありボスも居るとか幼稚園

橋本市 森 脇 善太

塾通い隣のミヨちゃん来なくなり

いつもとは違う視線のすみれ草
あっぱれな親の気配を盗んでる
ふれあいは今も蕾の香りする
団欒の音に私が消えている

松江市 竹 内 寿美子

味噌汁の香りを知らぬ朝の兵
布幅の優しさに母が住んで居る
勝率を知らぬ子馬は雪の中
コーヒーの朝に馴染めぬ天邪鬼

倉敷市 小 幡 里 風

もの忘れ自分を叱る日のみじめ
適齢期みんな熱い目投げてくれ
マスクした顔が私と遠くなる
初サラー母へ好みの柄を撰る

兵庫県 河 原 みのる

防大生観光めいて硫黄島
センセイの第一条件護身術
田舎道また土なくなったアスファルト
ひ孫三人烏賊漁の浜に似て干し場

羽咋市 三 宅 ろ 亭

路のとう見つけてからは里は春
山桜その在り方を主張する
金婚を迎える夫婦のかばい合い
男らしさ女らしさでもめており

河内長野市 井 上 喜 醉

同じこと喋って歳を娘が笑い
退職金値切る行革怖ろしい
同情は再起の妨げじつと見る
度胸ない自分へ厳しい自己批判

枚方市 稲葉星斗

梅びらき甘酒茶屋で客を待つ
紅白の梅それぞれにある遅速
梅便り三寒四温に出ししぶり
申告をすませ梅香に杖をひく

町田市 竹内紫鏑

バリウムの香り一家の柱から
絵本にもありためらわぬ外来語
顔写真操縦ミスの時は載り
演説の英語涙の中国語

加賀市 細呂木魯木

思ひ出は愚痴ばかりなり吾れ六十路
三流で過した人生それもよし
見解の相違芸術が逮捕され
パチンコの時間はあつて凡夫なり

島根県 松本文子

誰も皆優しい小箱持つている
宇宙食みたいな薬医者がかくれ
人生の軌道修正旅艱
言葉ひとつ捨てて心を軽くする

姫路市 大原葉香

又女言うまい安産それでよし
心頭を滅却火傷してしまひ
見舞う方も見舞われる方も気をつかい
拡声器の声は女だから腹立たず

羽曳野市 佐野白水

建国祭うちだけ国旗出してあり
春一番心齋橋筋通り抜け
値を聞いて元に戻しておく洋蘭
番付けの順に力士は祈禱受け

唐津市 浜本義美

汐風に背中をむけて家並び
開発の村にトラブル未だ続き
不況風工場の灯り消えたまま
校庭が記念記念の樹で狭し

唐津市 田口虹汀

前向きの春の姿を捉えたい
若草の薔が欲しい病み上り
燈明に眼射られて春に臥す
病む身には刺激が強い菜種梅雨

唐津市 木塚素石

ようやと三人の子供飛び立たず
トゲのある言葉も時に出す妻に
先生も人間であるご酔狂
提灯に極楽トンボよく集い

交野市 山本テルミ

加茂川の水によくあうゆり鷗

退院日に心はずませて髭をそる

家計簿の予算でファミリーストラン

たこやきのふくらみ刺す妻楊子

大阪市 橋元美恵

髭を剃る鏡女は写らない

隙間風死が遠のいた沈丁花

去って行くヒールの音は凍てている

冬いちご今日も私は満たされる

大阪市 山根いつを

擦り切れるまで洗ってもまだ明治

枯野原母の姿が消えた星

跡取りの嫁ともつれる千枚田

女難には無難の相をうけ継いで

岸和田市 芳地狸村

神棚の古さを誇る登り窯

三代の誇りを見せる内裏離

手のひらの温もり知った初心な恋

偽りの言葉の重荷知る娘

岡山市 行吉照路

灯を消して雑魚から順にいびきかき

貝殻を拾う鍵っ子の友として

少し春妻のにきびを見つけたり

医師の面菩薩に似せてはすぎない

和泉市 岡井やすお

エリートが独走幕のあく悲劇

防衛策支持四割が気にかかる

暖冬で要らぬ灯油は値が下がる

バーゲンで買ったシャツからへそが出た

島根県 山根峰雪

退職し老人クラブのバッジつけ

対抗者なくて町長すぐ決まり

縁談が次々と来る婿の口

風邪おそれ喜寿の頭を長く刈る

浜田市 佐々木裕

ふるさとに潜んで近い地平線

合格に今日は仏も神もあり

頼杖について主流を逸れる策

メーデー歌途切れ途切れて私語が行く

岡山県 直原七面山

七五三もう知り初めし恋心

許す気になって一氣に干すお酒

冷めかけた愛だと唇だけは知り

埋れ火を燃やしてドラマを織る女

奈良県 宮川古都路

試験すみ女心のアドバルン

寒に立つ仁王の腰にからつ風

遠山へ目玉にうつる赤とんぼ

琴線の心がふれる絆もつ

自選集

工藤甲吉

おだやかな夜をカリカリするでない
孤児帰る敗走地獄鮮かに

山内静水

人妻の手記は不倫も悪びれず
したいこととして悔いのない野垂死
新しい札は苦勞をまだ知らず
骨壺をのぞいて亡妻に叱られる
久々の酒は二合をもつて足る

大矢十郎

毎日が「文の日」趣味に明け暮れる
約束だけで駄目男と女
俺だって人には知られとうない電話
酒を飲みながら話せることでない
連れて歩いて足が短いだけの妻

藤井明朗

仁術に一路申告を洩らし
テレビニュース私見は喋らぬ方がよい
受話器もう置きな電話は公器だよ
三期前の顔で勝ちたい選挙ピラ
中曽根さん奥歯の物を取りますか

野村太茂津

名残り雪ひととき春を遠くする
帯解いてひとり住いの灯に坐る
都市ジャングル悪の芽が春へ向く
別れ来て心をさます名残り雪
酔うた振りして急所をついて見よ

水粉千翁

なにかせなあかんと思うつくしんぼ
よく走る筆にも春が来たらしい
子のお古着る手もあって若返り

そのときはと言訳として飾り

お前もかと言わないで夫婦です

これでもかとはわたくしへ鞭を入れ

見せしめるとはわたくしをさらけ出し

分け合えるとは満ち足らぬものばかり

金井文秋

いつでも読めると本屋は売れる棚へ詰め

儲け口ないかと無駄なことを聞く

足早が何度も連れを振り返る

すね嚙む子のあるうちが華でした

足痛む妻にも夢のフルムーン

市場没食子

酒百態長寿日本の別姿

離婚歴ある方が当世かも知れん

ボスの座を去る老猿に日が迫る

免許とりたてもうつけてない孫娘

道標にする駅筋のきんつば屋

河村日満

浜田久米雄兄の死亡に

ときは春路郎春巢と酌む酒か

八十へひよっとしたらの欲も古稀

大の字に寝転ぶ父の隙だらけ

大往生に夫婦の夢が一致する

踏絵踏む夢も見ないですむ平和

月原宵明

雨靴を女系家族の色で干し

抵抗の少ない白で身を守る

鏡かけめくれば女の世界あく

合掌の眉春を呼ぶ観世音

母の敷くレールはみんな上り坂

大坂形水

阿呆なのを相手に荒い儲けする

バーゲンのお客サイズを構わない

案の定スーパ―サラ金をも始め

協力をさせられ揚句泣かされる

金棒を持たぬと鬼も弱いなり

本田恵二朗

塾年の味にがからずあまからず

内緒から内緒へ洩れてゆく内緒

時効まで逃げるに日本狭すぎた

呆けたかな算盤玉にあなどられ

長いから巻けると思ったのが誤算

黒川紫香

泣き言を言い人形の瞳に負ける

小心で小判鯨にはなりきれず

氣持よく放屁が出来る屋根の上
父親の酌で成人祝われる
旅先で出来た友から来る便り

正 本 水 客

さりげなく真心の手を差しのべる

距離少しおいて暢気な夢を持つ

引き際が大事と玉手箱開ける

白地に赤日の丸はもう古い

仁王さん背中を押してみたくなる

仁王さんの

玉子酒女はかるい風邪をひき

喝采のない花道に灯がともる

手の届くところには置かぬ肥後守

だんだんに妻に越されてゆく歩幅

棲もった妓とすれちがう巽橋

橘 高 薫 風

揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ

落雲雀亡母の居どこは地か天か

白牡丹レーダーよりも雨気を知り

紫は仁義礼智信を統べ

男を磨く女を磨くやや違い

★第15回東洋樹川柳賞

番傘川柳社 森中恵美子氏

日 時 昭和58年5月8日(日) 10時30分開場
会 場 神戸市立福祉センター5階・婦人会館
神戸市中央区橘通3丁目4-1
(湊川神社西門前)

兼 会 費 一、〇〇〇円(記念品贈呈)
題 (各題2句)

(当日発表)

冒 険 河村 日満選
弱 い 長谷川紫光選
家 族 高杉 鬼遊選
造 花 田中 好啓選
幕 面 時実 新子選
傾 く 奥田 白虎選
樹 小松原爽介選

特別課題 (1句)

漬 物 小笠原双城選

◆席題なし 欠席投句拝辞 各題締切12時

講 演 「女と川柳」 森中恵美子

表 彰 知事賞、市長賞ほか多数

懇 親 宴 三、〇〇〇円

主催時の川柳社

川柳太平記 (60)

川柳の群像

今井卯木

東野 大八

今井卯木（本名幸吉）明治六年（一八七三）十一月五日群馬県一宮在の生れ。

「今井某の子。家は女郎屋なりしも横浜に出で、原合名会社の番頭となる。卯木は其の長子なりしも、繼母に養われる。父は勤め先の原の養子を世話したるため勢力あり。このため仏蘭西里昂に派出せられ盛んに豪遊す。支店長となる予約なりしを経営縮小のため引戻されしに、自己の下にありしもの上役となり、卯木不平に堪えず、偶々吾社（久良伎社）に入社し、吾人（久良伎）の命により、江戸砂子を川柳と結合して著述すべし」と命じた。（川柳祭）昭和21年11月号阪井久良伎）もし卯木がグレなかつたら名著「川柳江戸砂子」も生れなかつたし、「番傘」発刊もずっと遅

れただろうとある。

関西川柳社は久良伎の呼びかけで、その設立同人は卯木を筆頭に花岡百樹、渡辺虹衣、西田当百など総勢26人。この連中は久良伎と剣花坊系の大阪での寄合い世帯である。

「番傘」が創刊されたのは大正二年一月だが、四六判横綴で三十二頁。同人の意気はまことに盛んであったが、寄合い世帯の悲しさで同人の離合集散が甚だしく、結局、西田当百が盟主格となり、新聞関係でめしを食っている若い岸本水府がその編集に当った。

さて卯木だが、彼は久良伎一辺倒で骨の髄まで古川柳にしびれ通して、樽初篇から二十四篇までの初代川柳時代のものなら悉く暗記し、この句は多留何篇とたちどころに指摘す

るほどの通きようぶりだったという。久良伎はこの点をもって俳諧師菊岡沾涼著の「江戸砂子」の川柳化執筆を呼びかけたのである。

この「江戸砂子」は初版が享保十七年（一七三二）にはじまり、明和七年（一七七〇）間の江戸の名所旧蹟・神社仏閣・年中行事の三大項に別れているもので、それに往時の古川柳をつけたもの。卯木がそれにとりかかったのが明治四十二年で三年間を費した。

卯木が関西川柳社創設にタッチしたものの「番傘」発刊時にはそのリストから名を消しているのは「川柳江戸砂子」吉原篇に全力投球したことによる。「川柳江戸砂子」が陽の目をみたのは明治四十五年一月で限定五百部発行元は岐阜の「川柳青柳」で田中蛙骨が発行人。

卯木はこの「川柳江戸砂子」から吉原が抜けているので、蛙骨と図り同誌の特別付録として「川柳吉原考」を発刊することを決め、蛙骨とともに東京市庁を訪れ、時の市長はじめ関係者に協力を依頼、数多の資料の貸与をうけ、執筆にかかったが、四十八頁を活字にしたものの蛙骨の病臥等により中止した。もし実現していたなら、西原柳雨の「川柳吉原志」と双壁を成していただろう。もっとも、

この卯木の一件から、柳雨が手がけたとの説もある。柳雨の吉原志は昭和元年春陽堂から出たのだが……。しかし柳雨が吉原志を執筆中に佐藤紫紋が「江戸時代の川柳と吉原」を大正十四年八月に岡村書店から出している。

こうしたわけで、卯木は吉原から離れ「やなぎ榎研究」に連載した「誹風柳多留に就て」を小冊に纏めたあと増補して「誹風柳多留拾遺」を大正十三年八月蛙骨と岐川の肝入り「やなぎ榎研究」発行元の柳書刊行会から出している。

「誹風柳多留」の跋に卯木はこう記す。

「風霜二十年ここに素懷を遂げる迄には本書の校訂については他の追従を許さぬまで研究した心算であったが、図らずも飯島花月翁の垂教によって川柳大全所載の句で、柳多留拾遺に掲げていない句四十余章があるのをはじめて知って収録することができたことは大幸という他はない」

要するに卯木は、砂子も拾遺も相当の情熱を傾倒していたことは明らかで、卯木の二大快著と柳界で賛称されるに足る労作ということができよう。このほか彼は昭和二年八月に「校訂柳梅」を柳書出版会から出している。初代川柳点多留二十四篇までで、花岡百樹が

校訂に当たっている。

前述の「川柳祭」における久良伎述の「新川柳人伝」の卯木の稿のつづきを掲げよう。

「仏蘭西人の会社を大阪に開く広告を見た卯木はフランス語を解するを利し、大阪に赴くも会社成立せず、卯木辛苦をなめること八年、妻子は悪行苦行す。この間、卯木は「川柳江戸砂子」編成に従う。余命じて卯木や花岡百樹、渡辺虹衣、下山岐陽子等をして関西川柳社を興さしむ。偶々美濃の田中蛙骨「川柳青柳」を刊行、老生病中蛙骨を訪うを得ず卯木をこれに代らしむ、卯木蛙骨の知を得て「川柳江戸砂子」を刊行す」

少々ダブったところがあるが、久良伎の卯木に対する面倒見のよさはつぎの記述に続く。

「父の勘当とけて横浜に帰る。たまたまその際、フランス滞在中の借金督促二百円ばかり公役を通じて来たる。卯木、父に告ぐるを得ず余に借金を乞う。余も親戚より借りてこれを与えしも、堂々男子四十以上にもなりて継母を怖れて戦々兢兢、これを嘆き川柳中止の策として、その父を責めたるハガキ数十通を出す。父たまたまこれを見て卯木を責めて借金を知り、叔父某をして返金し来たる。卯木余の苦心を知らずしてこれを怨む。

卯木酒癖悪しく白木屋団十郎追懷展と川柳の会に悲をまぎらかせし酔を借り、散々の迷惑をかけたなり。余（久良伎）を苦しめしもの剣花坊、角恋坊、卯木の三人なり。「川柳江戸砂子」の著述の功は没すべからず。作句は平凡……」

——ずぶ濡れになれば傘屋を通り抜け

——株式で儲けて詫言をする気なり

——鶯が死んで娘も死にたがり

——鉛筆で書く受取りは多寡が知れ

卯木は伝統川柳一辺倒で、古川柳を宝典とし、新川柳を極度に嫌悪し、特に剣花坊や角恋坊の句は「見ても虫すが走る」と蛇蝎の如く嫌い抜いたという。その反動として、久良伎に肉身のように傾倒したが、酒が入ると酒癖の悪さの地が出て「久良伎なぞ早いところたばつてしまえ」と面と向ってという始末に、久良伎も大分手を焼いたらしい。

久良伎派の一方の旗頭として四国松山や、岐阜あたりの柳誌の選者などをして晩年を過したが、人間関係では孤独だった。昭和三年二月三日横浜西戸部町の自宅で没。享年五五

★次回は井上信子

誹風柳多留廿六篇研究 (十丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野 真孝・本多正範・石田成佳
大屋 六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

170 釣かねハ無銘面ンには銘があり

鈴木 謡曲「道成寺」に出て来る釣鐘は、ど
んす製であるので、一般の鐘のように「誰々
鑄」という銘は彫つてない。しかし面には一
般に「誰々作」という銘が彫つてある、との
意。

大屋 賛 能面に作者の名が彫つてあるので
しようか。小生、なんとなく墨書してあるの
だろうと考えていたのです。

多田 賛。

岡田 同。

171 山もわる位勢(マツ)の客をふり通し

鈴木 本句は、三浦屋高尾大夫と、ふり通さ
れた伊達綱宗公の故事を詠んだもの。「山も
割る」は、綱宗、亀千代に命じた神田川工事
でお茶の水に面した駿河台の一部を切り崩し
たことをいう。

石田晋 賛。「位」の部分、それではどのよ
うな字があたるのか示して欲しかった。

南 賛。

神田川掘出人をふり通し

三二・三

八木 賛。「位勢」の問題。この程度の当て
字は江戸時代にはサラ。このままで馴れてし

まえばよいのではなからうか。

多田 賛。

岡田 同。

172 琴の身かまえて袴を纏たゝみ

鈴木 此れはこのままの句。昔(大正の初
中期頃)私の母が袴をたたんでいる姿を思い
出す。全く川柳作者は心にくい所をついてい
る。

南 賛。

腹をもむ座頭に琴のすかた有 宝二三礼五

小野 賛。特に袴の紐を合わせるときなど、
片手でたぐつて片手を伸ばし、琴を弾く身構

えそつくりですわ。

本多^二贊。同工異曲の句に、

琴を弾く姿でたたむ長はかま 一四七・24

というのもある。

多田^二贊。類句よくお見付けになりました。

岡田^二同。

173 長刀の流義を残す白拍子

鈴木^二『謡曲と川柳』には、本句の解説として、「静流という薙刀の流義は、静御前の発明したものである」としてあり、何れにしても静御前は薙刀の名手であったようだ。また同時に舞いの名手でもあった。そこで、「流義を残す」とは、静流を残したという洒落なのか、又は、堀河夜討の時の静御前の奮闘ぶりなのか、いろいろ考えられるが、何れにしても長刀や舞いに名手であった悲劇の白拍子静御前を詠ったもの。

荒事も所作も静ハした女

武に猛く舞に静な女武者

多田^二贊。

夜討の無人口取りやめかけ出る

の時、長刀を振ったことであろ。口取りは

喜三太。

岡田^二同。

174 十五日甲の座で見る大あばた

鈴木^二十五日というと殆ど各月に意義がある。然し、十五日に見るとなると一般には六月十五日の山王祭か九月の神田祭と考えていい。また八月十五日の月見でもいいのではないかと思う。

句意はこの通りで、人三化七位の大あばたの姫も持参金があるので、山王祭や神田祭の時は一番いい正座に座って見る。

南^二本句の場合、金屏風は大あばた嫁の持参のもの、で嫁が甲の座にすわるのである。柳句での金屏風は神田・山王の両祭りで従って祭礼の句と思います。

秋風をよける持参の金ひやうふ

大屋^二贊。

祭りに立てるを化ケ持参する

多田^二贊。

岡田^二同。

175 過分という札豆腐屋はつに請ケ

鈴木^二伊達綱宗の恋敵は素寒貧の浪人島田重

三郎である。彼島田は殺し屋浮世渡平に頼んで綱宗殺害計画を立てる。然しながらこの計画は失敗して渡平は逆に殺される。この際、綱宗は近くの豆腐屋に難をのがれて、そのお礼としてはいている高価な伽羅の下駄を豆腐屋に送った故事。

うき世をのがれとうふやのせわに成

大名のはだしになるも浮世也

南^二贊。「過分」は感謝の意をあらわす語で大名から「過分」と礼をいわれ、初めて聞く聞きなれぬ札言葉に、豆腐屋がうろたえただろうということか。

屋形へも参れ此下駄とらするぞ

本多^二「過分」は南氏説通りであるが、もう一歩進めて、高価な伽羅の下駄を礼にもらった意にもかけてあると思う。

過分〜と豆腐やを御かへり

八木^二贊。ただし「故事」というより「俗説」。

多田^二贊。

岡田^二同。



黒川紫香選

尼崎市 角野かず子

少年が動くとき犬の目も動く
太陽が昇るわきみをしておれぬ

名古屋市長 越村枯梢

出発はまだか星から声かかる
陸橋ができて不便な道になり
整然としすぎた部屋でうちとけず
病み上り背なを佗びしく見せる庭
夕暮れの校庭に子がひとりいる
引き出しに夫の匂いの残る部屋

西条市 片上明水

反骨に生きて小さな碑が一つ
一山を越えると故郷に雪しきり
誤字あて字言いたい事はみんな言う
小さくとも城を固める貝柱
空財布に貧乏性を笑われる

尼崎市 春城年代

見送りにきた海丸い丸い月
仰向けになって財布を振ってみる
末席に座り導火線握る
仕合せになれる話で掌を合やす
白鳥が飛び立ちまちの灯が増える

西宮市 紀市郁栄

風邪癒えず夫はひとりの風呂をたく
夫の掌のなかで存分やんちゃする
女医さんに解ってもらえた主婦の愚痴
なりゆきの嘘にだんだん責められる
あの頃の破いた日記悔いている

八尾市 高杉千歩

告別式に叔父が他人の顔でいる
新しい椅子に心ためされる
ライバルに右側あけてやるゆとり

白旗をかかけ余念のない夫婦
ひとり旅五月の風がそそのかす

雑音に惑わぬ妻の座りだこ
湯につかり小学唱歌ひとつずつ
引き返す気はない花野を通路笠

尼崎市

西村 かすみ

夕顔の好きな女のほつれ髪
恋多き女は赤い花を買う

背伸びして息子に和服着せてやり
ライトバン団地へ春を売りに来る
かな便りその行間に母がいる

尼崎市

伊藤 春子

めいめいの部屋にこもった隙間風
子の病状気になる帰途の寒い月
不本意なワイロで坂をころげ落ち
冗談冗談軽くいなして本音かも
計の知らせ一人の部屋を寒くする

熊本市

有働 芳仙

足音があるから安心して眠り
家計簿の裏から抜ける金があり
あの声はお酒を出してはならぬ客
花言葉持たない花を摘んでいる
老齡年金そここ骨が鳴りまする

京都市

松川 芳子

にらめっこして猫の目に負けている
ほんのりと小さな嘘にでている
お互いに出好き同士でよく出逢い

嫁びいきしてる夫の愚痴を聞く
むごい過去背負って孤児の親さがし

高槻市

竹内 花代子

覗くほど鏡へふえる顔のしみ
信楽でいっち小さな狸買う

モーニングコーヒーで愛がさざやかれ
いい意味のライバル三人仲が良し
マスコミが作る美人で嫁きおくれ

尼崎市

田中 晴子

一抹の不安に重い髪を梳く
しがらみをひとつの坂でひとつ捨て
民謡がきこえる部屋で土産選る
味方と思う妻が寝返りうつ不覚
さよならになりそな予感で逢いにゆく

鳥根県

松本 はるみ

何日迄も母は夕日に祈るだけ
赦すなど羅刹の如き顔をして
義理という不穏の中に猿でいる
ポケットに手を入れただけの威圧感
舗装路が切れて女は身がまえる

東子市

小山 悠泉

広島島の意地原爆を許すまい
秘密などない父ちゃんの太い声
親娘ほど違い夫婦の仲が良い
メダカもう動き初めた春の川

熊本県

大川幸子

尼崎市 丹下玉子

理屈では割り切れるのがおそろしい
粹な人一步をさりげなく譲る

妻よりも祖母になりきる日で暮れる
はめられて明日の料理張りを持つ

寢屋川市

平松かすみ

藤井寺市 赤木和子

レントゲンはじろうている暇がない
あんばいを二等分している夫婦

ふるさとの夢は昔のままでした

占いの出逢い信じて軽い靴

西宮市

奥田みつ子

伊丹市 樫谷郁子

声聞いただけで安らぐ電話あり

逢うてきた夜はひとりで茶を点てる

土笛に弥生時代の風の音

一日の九割まではつらいけど

西宮市

藤村宏子

尼崎市 関口幸子

陽あたりのいい坂道は母とゆく

手ざわりも匂いも春のよもぎ摘む

結び目がゆるむと悔いが顔を出す

おしゃべりの分だけついた皮下脂肪

松原市

本多洋子

今治市 矢野佳雲

優しい人の住み処と思う桃が咲く

小さな願い小さく折るひなの宴

他人事だから軽いなぐさめなど言える

小さい窓に気づいてくれる人を恋う

鍵穴の向うに咲いたロマン花

てのひらに小さな折鶴のせて吹く

土手鍋の牡蠣に海の香りする

来客を扱い馴れた宿の女

藤井寺市

赤木和子

完敗の涙グラスに浮いている

男なら頭をまるめるところだが

暴言を見目麗しき女が吐く

病人の枕許に置く冬苺

伊丹市

樫谷郁子

大仏の前でも人間くさくなる

富士山のふところだって鬼は住み

御土産の額で差別をつけられる

筆も良し紙も良いのに腕がしばむ

尼崎市

関口幸子

女医と聞きさほどでもないのを見せに行き

鍵っ子の日記に書かれている風波

種蒔いたあとで説明書きを読む

労働者一膳飯屋がデイナーの場

今治市

矢野佳雲

すぐカツとなるカマキリの腕っ節

この恋もこれで終った電話口

糊つけた人さし指をもて余し

口利いて人形しまったなと思ひ

富山市 舟渡杏花
こんな手もあつたか嘘が活きて来る

河岸かえた河童こころが安住地
ひもじい日の記憶で孫をたしなめる

長生きの誤算補聴器買い替える

宝塚市 丸山よし津

多くない余白綺麗に絵を描こう

団欒のそばの孤独の老いの皺

声の無い笑顔にいつも守られる

中尾まゆみちゃんへ

リボン揺れ汚れていない瞳のさわやかさ

大阪市 萩谷まさ

霜やけの耳かゆき夜やるせなく

飲む程に本音が出ます寒い夜

風邪ですと医者より先に自己診断

知らぬ間に嫁のペースに嵌まらされ

兵庫県 奥野テル

ちと若く着飾って行くクラス会

皿洗う指から春の音を受け

二の足を踏む無心への重い足

赤い羽根つけて善人ばかりいる

鳥取県 林荒介

駅むすぶ闇の鉄路に灯を献ぐ

赤い靴残しておいた故郷の駅
待ち呆け私の汽車は又来ない

人影の蟋蟀汽車を見送れり

熊本市 宇野昭代

なみなみと注げばよろめく紙コップ

それなりの言い分を持ち非行の子

宝くじ買おうか私立だけ受かり

テレビにも倦きて一人の夜が長い

名古屋市中 藤井高子

黒髪へ贈る私のレクイエム

おもちゃ箱一つ老後へ残しとく

手術台に伏せて閻魔のジョーク聞く

眼鏡よくみがき武装は解かず置く

和歌山市 中尾まゆみ

中学卒業(二句)

三年間みつめなおして抱く想い

紙人形折りあげママの顔にする

単純なパバの味方をしておこう

セールスマン言葉のマジック知っている

松原市 佐藤藤子

気負ったときすでに勝負はついていた

元旦の生れほんとかと念おされ

手術室ナースの笑顔に支えられ

髪形を変えて心が定まらず

大阪市 板東倫子

ロボットと労組が職場奪い合う
校庭にも一度欲しい金次郎

サラ金は助けたあとで苦しめる
言論も自由も街に溢れ過ぎ

寝屋川市 高田てまり

不況風パートの歳も若くなる
針穴に女の視野が見えてくる
叩き売り野次馬の数よんでいる
団体は団体の顔で歩いてる

大洲市 米澤 暁明

土筆土筆ついに一バス遅らせる
降りるたび土産が増えるバス旅行
上手とも思えぬマイク離さない
プラットの猫の昼寝も無人駅

枚方市 二宮 山久

先生も立読みしてる古本屋
コマーシャルほどではないが効くみたい
決断へ妻の意見も聞いてみる
ふる里の母が達者な電話ベル

鳥取市 野沢 大漁

肩たたき何も言えない駄馬だった
肩書に溺れて重い荷を背負う
喝采の軍歌が心を攻めてくる
指令スト勝ったを知らず旗たたむ

鳥取市 武田 帆雀

産休が終りスマートに勤め出し
見たような顔だと向うもこちら向く

手捌の早いレジの方へ行く
税理士の手直しコンマはつきりし

尼崎市 矢萩 貞子

キャンプして星を眺めた仲間たち
瀬戸の海島影うすく灯がともる
早春の午後は明るい子等の声
玄関に突然噂の人が立ち

鳥取県 中原 諷人

輪ゴム一本夫の稼ぎへ髪束ね
声確か担架の老母は医者ぎらい
亡父のそばへ叔父に預けた白い菊
ひとさし指を向けて輪ゴムも戦する

尼崎市 佐藤 美代子

衛星で月に桜を咲かせようか
島と島鳴門の橋で釣られてる
子の正義の芽を摘み取る親のなれ
フィルターにガンを吸わせて煙草のむ

鳥取県 森山 盛桜

さよならの余韻瞼にひっかかり
ささやかな武装は髭をつけてみる
ビル街の隅で人情拾って来

大阪府 津山 刀水

高三の願いが絵馬に重すぎる
水にうつる雲を見つめている慕情
店じまいそれでも損をせぬチラシ

弘前市 田中叶

妻の尻まるで言うこと聞いていず

タクシーで帰る女のアルバイト

踏切の先漢方の店があり

吹田市 井上照子

苦労などないよな顔して熱帯魚

合格を知らせる声が叫んでる

レストラン舌のまわらぬ料理食べ

岡山市 土居耕花

葬いの膳の値踏みをして他人

縄飛びに母も加えて夕焼ける

老妻に時々足を触れて寝る

八尾市 宮崎シマ子

花一ぱいの五月に孫が誕生し

芽が吹いてあああの種かと思ひ出し

春の雨樋がつまっているらしく

鳥取県 羽津川公乃

コーヒーもワインも通で三十路過ぎ

手品師の鳩に飛び立つ空がない

野次馬を嗤って野次馬の中に立ち

高知県 山崎広風

鯉のぼり過疎の歯止めにしたい村

先生が習い始めた護身術

絶体絶命社長が夜逃げする

熊本市 紅葉山巨足

正論吐く人であんまり働かず

窮屈で人を睨んでみたくなる
夢を持つ人間だから意地もあり

大阪市 服部頼一

通夜場で一人張り切る次期課長

猫の髭抜いても鼠捕ってくる

髭を剃り落として孫に親しまれ

尼崎市 吉永伊三郎

耳鳴りの奥へと軍靴通り過ぎ

ひとり寝の男の汗は絵にならぬ

坂道を登ると後ろに妻がいた

竹原市 古田比呂子

どの指もみんな私に忠実で

三十をさせる真赤を着たがって

ゆりかごの唄しか歌えぬ母であり

熊本市 高野宵草

宝石の小粒の方に目が流れ

残業の窓へネオンが瞬いた

弱点を突かれ本気で腹がたち

富田林市 藤田泰子

燃えた日もあった土鈴の一人言

どんぐりの実も混じってる吹き溜り

犬にさえ血統書がつき纏う

西宮市 津山冬子

靴はいてそれから気付く四月馬鹿

一円もスーパードラマにあつかわれ

何遍も夜中の時計聞いて朝

過去みんな流して今朝の鏡ふく
野次馬の帰りに仰ぐ寒い月
息づかいつたわる今朝の紅椿

米子市

沢田千春

太閤記視て家康は視ぬテレビ
働いてない手にタイヤよく光り
はるばると来て北の島視野に入る

羽曳野市

麻野幽玄

友訪えば久しぶりだと酒が出る
先生が好きで宿題苦にならず
北風に負けて自転車下りて押す

高知市

北川竹萌

ゆっくりもしたいが雨も降ってくる
台詞など無くて舞台の通り抜け
ネクタイも妻の好みの柄にされ

千葉県

中村有人

肥満体はいれば買うと言うサイズ
落書の筆に一瞬舌を巻き
少年の背丈を越える親の夢

長崎県

岩崎和子

両隣主人の顔をまだ知らぬ
よく似合う掛軸ですと部屋をほめ
三分分の日記を書くとう無理がある

尼崎市

山田保蔵

明日という句会へ句帖未だ白紙

芦屋市

上田佳秋

窓際へ来てから身体調子良し
娘等に笑われてもよい浪花節

大和高田市

岸本豊平次

大抵の苦勞はしたと太い指
邸宅の跡に建て売り三戸建ち
管理職作業服にも折目つき

寢屋川市

岸野あやめ

他人目には結構人と見えた亡母
世のこわさまだ知らぬ娘で気が強い
孫達のきょうだい喧嘩東京弁

尼崎市

中辻千子

久し振り観劇の余韻今朝までも
夜遊びが帰りそびれて朝の月
羨まし思いのままに翔ぶ風花

泉南市

坂根流水

寒空に牡丹も芽ぶく春の音
裸木の梢も驚く春一番
僅かなる美醜にこだわりほろにがし

米子市

足立由美子

多忙でも暇でも愚痴が出てしま
不況風気持だけでも吹きとばし
娘を思う老母から温い荷が届き

大阪市

清水康恵

三月の雪にふるえた沈丁花
雨だれの音に女は春を待つ
北国の民話が好きで汽車に乗る

岡山県 吉末 謹太郎
本心がそう簡単に言えますか
帯きつく締めて弱気を見せぬ母
警官もボルノ映画を観る非番

兵庫県 脇田 米朝

慾得が絡んで友が一人減り
べんちゃらの下手な大工で腕が冴え
前向き姿勢へ明日も陽がのぼる

大阪市 大塚 節子

取り立ててすることもなし春日永
久し振りはずむ話に袖ひく子
無人駅花だよりあり灯一つ

島根県 大浦 ふみ

なにげない会話の中にあるグイヤ
生きてきた歴史がのぞいている白髪
戦争の傷跡孤児のある限り

高知県 小沢 幸泉

日の丸がむなくゆれる祝祭日
天ぶらの油に生活の音を聞く
甘い夜寝言で子供がじやまをする

熊本県 北川 一進

床柱長老が来て宴になり
一枚のハガキ寮にもなれました
さわりだけ唸り幹事のとる音頭

竹原市 石原 淑子

こだわりを捨て切れないのシクラメン

アイアンを買い替えてみる夫の自負
主婦の幸お風呂の沸きて春を知る

大阪市 小野 風童

かつこよく鬼が一ぱい僕に住む
不景気が骨身にこたえ安く売る
軒下にてるてる坊主出して寝る

大阪市 稲本 凡子

孫入院

病室のテレビで除夜の鐘を聞く
幸せは自分の家で過す日々
一人暮しに馴れねばならぬ盆栽よ

今治市 葛本 昌道

雑音に背を小突かれている電話
カラオケのレパートリーはある音痴
関が原の頃からあった風見鶏

鳴門市 八木 芳水

欲のない方へ神様寄ってくる
義理でする拍手の音が小さ過ぎ
水引の割には中味つまんない

島根県 藤原 秀穂

一票を梃ぎとるための低姿勢
電話にも頭を下げるお人好し
紙コップ戸棚の奥で眠りこけ

富田林市 植松 慶子

般若面つけて貞女に或る謀反
すみれ草踏みそうになった畦の道

峠越しみかんの花の香に出逢う

西宮市

朝山千世子

さくら前線余生に虹をかけに来る

しゃべりの娘年ごろとなる無口

役退いて気楽に作句佳吟生む

竹原市

佐藤令子

淋しさが一輪挿しに活けてある

子の謀反ないしよないしよと片付ける

勝手口で鍵っ子靴を脱ぎ捨てる

青森県

波ただお

小鳥にでもなつて飛びたい青い空

異動期へサラリーマンの胸の中

青空に元氣を出せと励まされ

八尾市

葛幸子

カラオケでストレス解消したつもり

パチンコの玉洗つてゐる裏通り

裏道をよつて歩いた半生記

吹田市

栗谷春子

くらがりて書いた字朝に動き出し

土筆まで売られる春の寒さかな

雪降つて今日の献立早変わり

島根県

東原福子

早春の光を縫つて街歩く

恋猫が春だ春だとふれまわる

風雪に培う牡丹日毎伸び

守口市

岸野キミ

紀元節一度は口に出る明治

葉の花の一輪差しにある笑顔

不景気の風に乗るたこ糸が切れ

島根県

岩佐富子

春の朝春をきざんでる台所

娘の帰省それらしい友を道連れに

思い出におさげの頃の手まり唄

寝屋川市

堀江光子

雪洞をつけ片言の主人役

ウインドーのマネキン優雅な日向ぼこ

末裔を誇り老人島去らず

島根県

福岡芳枝

追い越して歩く男にある台詞

国会中継炬燵からやじ飛ばす

元氣そうと気休め貰う病持ち

守口市

結城君子

川柳があつて我が家に老いはない

啓蟄やそこはかとなくかゆくなり

期待した場面拍手のない悲劇

泉佐野市

大工静子

紫は好き恋愛知らず明治人

亡き人が呉れた毛布に話しかけ

話の合間舌で飴玉ころがして

西宮市

草川墮駄

わが性を子にかいま見て寒氣する

うたかたの恋も輪廻か冬木立

獄門の首はとぼけて朝の露

境港市 細木 歳 栄

お茶会にかこつけ実は衣裳展

軸を替えうっとり春の床に座す

知らぬ母夢の中なら逢えるかも

大阪市 堀 口 欣 一

紙屑のような千円札を出し

ネクタイをゆるめ放しでいるデスク

都ホテルシーズンオフの衣裳展

岡山市 原 田 凡 太郎

寝たきりへ今年も窓の梅が咲き

冬眠の噴水孫も淋しがり

なんぼでも入る堪忍袋縫う

八尾市 椎 尾 公 子

それぞれの趣味に生きてる老夫婦

ハイキング腰弁夫婦天高し

秋の蚊が生き残っていた納屋の中

水戸市 上 鈴 木 春 枝

ひたすらに誉め仲人の役終える

母となる妻の日毎に遅しく

好きな事言うて助言をしたつもり

大阪市 日 阪 秋 子

婚礼に疲れた昨日の祝鯛

満才で言うて引け目感じて

簪とはしっとり馴染まぬアスファルト

島根県 藤 原 鈴 江

秒針に追わるる余生をしかと踏む

亡母想う夜のしじまを風が打つ

さよならをさりと聞ける間を持たす

唐津市 浜 本 ち よ

見なれたる景色見直す雪の朝

時ならぬ冷えに柿の芽思いやる

テトラポットお前の主張何処へ置く

藤井寺市 前 山 と み え

澄む子の眼親の安堵が映ってる

ちぎれては相寄る雲の織るドラマ

すしの空桶が今日の雨量溜め

寝屋川市 立 床 晴 風

美しい話術が毒気抜きに来る

勇気ある如く風船風に舞う

釣銭にウロコのおまけ付けた札

八戸市 島 田 昭 治

禁煙の不思議お金が溜らない

返事にも活きのいいのと悪いのと

口惜しさよ唯の数字で叱られる

益田市 里 木 た か し

ジョギングに取組む父が真面目過ぎ

2DKで丹精こめて子を育て

貯金おろして帰った夫のドアの音

愛知県 国 分 甲 子 郎

またくずす積木に絆で耐える愛

これでもかTVラジオの悪ふざけ

泉佐野市

真崎浪速子

呼び捨ててもよし友情の故郷の駅
遠い椅子ねらう運鈍根の日々

和歌山県

寺田裕美

繕ってばかりの母の太い指
挨拶をしている蟻へしやがみこみ

諫早市

江副二牛

寄せ書のいい人ばかり趣味の会
母校の名デカデカと出る甲子園

米子市

大田みさと

新郎もひっぱり出され隠し芸
小石だって大きな波紋つくります

和歌山県

山田久子

一日中動きまわってしまい風呂
亥の年で道草せずに歩きます

吹田市

横山青果

ふるさとのある嬉しさも花便り
お隣へ貸すライターは持っている

大阪市

松本ただし

変り身の速さはさすが風見鶏
ロボットが判決下すかもしれぬ

大阪市

平井露芳

お茶だけは沸かして妻の帰り待つ
台所にゴキブリが出た春一番

吹田市

西岡豊

栄進の道を教える赤い酒

許す気になっているのに逃げ回る

兵庫県

森脇和子

旅の湯で同郷と知る里訛り
孫去んでさみしさ残る三輪車

唐津市

前田廣幸

欠席が肴にされる集会所
親と子の手がわが家の聴診器

大阪市

塩田新一郎

指切りの小指に残る遠い人
明日抜くと歯医者悪魔の顔で言う

大阪市

今西静子

したいこと気ままに出来る幸を知る
良縁を断わる気まま持てあまし

岸和田市

藪野けい子

吉日の二人へ贈る言葉選る
目覚し時計五分進めてママは寝る

今治市

渡辺南奉

消しゴムで消せない傷は酒で消す
利用されても姑はうれしそう

大阪市

朝倉利義

金出してコーヒー飲むなら酒にする
寝過ぎてバックミラーで髭を剃る

島根県

田中ヒデ子

寡婦として意地を張り抜く厚化粧
外孫へ家計簿狙う桃節句

河内長野市

糸谷春草

救急車困らせているよっぱらい
早春の風が冷たい除幕式

山口県 高崎雀声

子育ても終りテニスを始めます
女すぐ脱げば女優になれる様

新潟県 高野不二

にせ札じゃないのにはき出す販売機
合格通知から我が家の春となり

弘前市 真喜内 實

活花の蘭愛しても根がないの
りんご作る人柄りんごで見られてる

鳥取県 灘尾民子

卒業を待たず娘に嫁ばなし
朝早い客に素顔を盗まれる

岡山県 池田半仙

晩酌を一本超過気を晴らす
りハーサルされた話題の散髪屋

大阪市 山田松太朗

少年の罪万引というスリル
裏口があるから悪事思いつき

鳥取県 福田あや子

入院日そのまま退院待つ暦
虚勢張る髭は童顔持て余し

大阪市 藤森小雅子

脳味噌を洗いにトルコ風呂へ行く
朧月波浮の港を口ずさむ

大阪市 山本 炬 齊
戻り寒老いの仕事もはかどらず
春や春踊りで京の幕はあく

尾鷲市 渡辺 伊津志

逆らってこそ親と子ぞ独楽廻る
疑えば鬼の姿が見えてくる

高知県 山下 登舟

眼鏡手に眼鏡をさがす程のぼけ
春の夜を孤児に同情して泣きぬ

大阪市 山脇 正之

厳めしい明治の髭は怖かった
今日もまた背筋の寒い記事ばかり

大阪市 北山 悟郎

廃業し免許証だけ淋しそう
忠魂碑北風まとも受けて居る

大和郡山市 岡田 すみれ

大寒の冷たい中にも春陽ざし
精魂を清酒造りの男意気

藤井寺市 前山 美恵子

住み慣れた町並見せて安堵する
嫁姑で川柳励むもまた楽し

鳥取市 湯邨 色 舞

軍歌まだ続きバチンコ今日も負け
背信の痛みよボトルだけが知る

竹原市 岩本 笑子

幸薄き子よとは他人の言うセリフ

さわやかな笑顔の中にある孤独

八尾市 松下蕉露

簡条書残して妻は旅に出る
器量には関係はなし春兆す

姫路市 人見翠記

この寒さ鴉お前も朝寝する
白鷺城よこぎる鷺を見つけたり

島根県 北川民子

入学だ机だカバンだトレパンだ
早春のギターに昼寝さそわれる

大阪市 権安達一郎

髭生やし官吏威張って居た昔
古稀近くなりても朝は髭を剃る

島根県 岩田三和

若葉食う青虫春を食いきれず
農村の風にびったりはるみ節

守口市 長谷川司

旅先で里のなまりで息が合う
味のある笑顔の仲居酌ぎ上手

兵庫県 円増貞子

老いの身のどうにかなるさの日を送る
酔うほどにころりと変る人間像

兵庫県 仲井素水

あの時の決断鈍りチャンス逃げ
自家製の佃煮祖母の味も詰め

和歌山県 北浜二郎

風呂嫌い何のかんのと理くつ付け

榊原清少納言という宿屋

東大阪市 三宅旭

鯉のぼりおらが天下と言いたそう
窓開けて理想の天地見える春

岡山県 藤瀬比沙子

シクラメン病夫に春を買いました
春うらら二人の船出かもめ舞う

米子市 宮本佳女男

誇らしく明治生れと言える齡
生き甲斐に余生の花を咲かせたい

橿原市 西本保夫

気が付けば視線の中にボクが居る
底力まだまだ出せるもう定年

東大阪市 坂本喜洸

煽てられ嫁はその気で家まろし
あご髭をいじり見上げる膝の孫

守口市 結城敏夫

団地型七段雛はプラモデル
川柳をやる人の皆面白し

藤井寺市 楠昭子

もめている寺へやっぱり骨納む
良く動くロボットに賞を考える

竹原市 佐藤仁昭
(小五)

参観日きんちよう感と母の服
大あくび休けい時間まじかです

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

濱野奇童

殴られた日から教師を自覚する

慳谷寿馬

中学生の校内暴力が、毎日のように新聞に
にきわわす。殴り返すことが出来ないのは教
師の宿命である。けれどもこの句は、それま
で生徒を甘やかしてきた無気力な教師をする
どく穿っている。

屑籠の待つてゐる詩など書いて見る

林瑞枝

中七に隠された作者の心情が面白い句にし
た。おとほけの味である。

古い男の古い話に熱くなる

小島蘭幸

必死に生きた男のドラマ。その生き様を物
静かに語る男。聞く者の心をうたずにはいな
いだらう。古い男の重みがこの句を民話に仕上
げている。

乗る時は覗いて呉れぬ定期券

河合茂雄

私もかつて、車内検札で空の定期入れをと
がめられたことがある。改札ではつきり確か
めてくれていたら、その場で定期券を忘れて
いたことに気付いていたろうにと、改札をう
らんだことである。車内検札、降車駅を当て
にした改札のいい加減さを穿って面白い。

建て前の会話へ北風吹きぬける

坂部紀久子

本音の無い会話程空々しいものはない。そ
んな心情を北風が吹きぬけるとはよく使われ
る手法ではあるが味がある。

唸るものみんな唸らせ日曜日

小幡里風

中七が、勤めをもつ主婦の慌たらしい日曜
日を面白くまとめてくれた。

月蝕を娘と物干で見る無言

都倉求芽

「長女結婚」の前書きのある句であるが、
娘を嫁がす父娘の心情が心を打つ。この場合
月蝕がまた生きて働いている。静かな句であ
る。

灯を消して夫婦子のことなど話す

白岩文衛

またひとり人の計を聞く椿掃く
どちらの句も、停年退職という宮仕えから

解放された文衛さんの実感であらう。前句に
は老夫婦の幸福感が溢れ、後者は、椿が悲し
いまでに佗しさをかりたてる。静かな美しい
句だ。

ライバルが来て赤札を買いそこね

高橋千万子

悲しきは女の性……。

紅椿思いを言えぬまま落ちる

山口美穂

紅椿に託した女心であらうか。椿の花の落
ちきわは実にあつさりしている。弓削の川柳
公園に長谷川紫光の「落ちてなお燃える椿の
朱をめでの」の句碑があるが対称的である。

やわらかい話に変えて席を立つ

森田熊生

難しい話、堅苦しい話の中では、なかなか
中座にくいものである。そこでやわらかい
話に話題を変えて中座するのである。割輕な
人柄が浮彫りにされる。

うんうんと逆らうことを止めただけ

林露杖

孫孫孫 夫も犬も嫉妬する

神夏磯道子

暗いニュースばかりすし陽脚のび

吉岡きみえ

合槌の中で自分を見失い

森脇善太

も味わいたい句だ。

句百選

吉 甲 藤 工

我が家にも武者一人あり五月かな
街五月女はすなり鮎となる

炎天をテクテクと自嘲する

生きざまの一つ地を這う草もあり

賽銭は箱をくぐって元金

日本に天皇だけの阿克セント

みな天を突いて麦の穂たくましや

一列にこちらを恨むメザシの目

逆立ちで逆さまの世に合わせるか

うらはらにばかり世間は甘くなし

その頃の妻は十九で光ってた

しわがれた乳房も俺のせいにする

明治百年女の膝に陽が当たり

青柿がポトリ水子を想わせた

男のロマン正々と堂々と

伊邪那岐と伊邪那美の部屋灯が消える

妻逝けば地球も落ちてゆく思い

一筋の煙が人の姿なり

極楽へさつと行くのも羨まれ

思い出をたどれば遙か乳房まで

人間のおしまい箸で拾われる

一周忌愛別離苦のしたたかに

誰よりも喜ぶ人は地下にいる

みちのくの風さわやかに青りんご

火の神をねぶたのゆれるときに見る

南国へ出稼ぎの列雁の列

のんのんと降りしがらみの雪となる

住む人はみんな貧しく雪の屋根

とにかくに大寒小寒爛をつけ

風雪は津軽三味でも荒れ狂い

風雪の日は骨壺の温からん

蝶々の聖なるもつれ風の中

搾るだけ搾れと牛は目をつむり

亡びゆくものの淋しさお馬の目

東海に島あり天地人汚れ

人民の目に役人は暇過ぎる

百姓を昭和幕府も苦しめる

一畳のあるじとなつて高軒

みな忘れさせて枕は有難し

ステテコで我れ天皇を羨まず

十二月八日もいつか風化する

にんまりと賄賂ご嘉納あらせられ

貧しかりせばコマコマとチマチマと

十二月叱られている仏性

赤ちゃんでなく寝たきりが居るオムツ

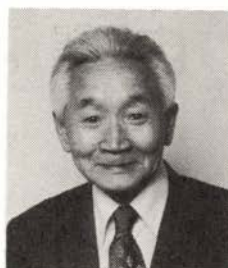
きょうもまた柩を背にして生きる

アメリカに握られている如意の棒

ワクチンが無い日本の平和病

日の丸のどこにも罪は見当たらず

ひっそりと塗師の陰に木地師いる



働いてくれた手足と湯につかり
浪曲で敬老の日をごまかされ
よたよたになって台風喜ばれ
「安兵衛」という名の居酒屋へ入り
労働者正一合の店で飲み
真っ先に賢い人は馬鹿となる
溜息のように瞬く灯もまじり
どうしてどうして番台の審美眼
涅槃会で男やもめと寡婦並び
年寄はどこが古いと負けていず
何足の靴で一生終わるらん
色即是空色即是空落椿
どの顔も金が欲しいと言わぬだけ
老い二人老い一人から羨まれ
知恵袋だてには齢をとつていず
それほどのことでもないに四面楚歌
サラ金で借りて銀行から盗み
悪の華萼は五弁で黄金色
地球よりも軽いのが多過ぎる
大砲にバタ―追いつき追い越され
五十年食いしばっては齒も弱り
悩むだけ悩めば先が見え始め
あるものといえは命が一つだけ
日本にふえる長寿という地獄
シャボン玉大、中、小も同じ彩

ホップ、ステップ、ジャンプ地獄へ着地する
鳶が鷹生めば鷹また鳶を生み
人間も角がとれるとヤマを越し
ちんまりと柩に入り易く老い
釈尊の死んだ姿で昼寝する
杜甫に非ず李白に非ず酔いつぶれ
松茸は贈取賄になる値段
老蝶の終焉赤い花に寝る
人間の弱さ自分を可愛がり
ドラマにはならぬ一生だってある
カンカンガクガクいつか定量など忘れ
核兵器づくり阿呆が競い合い
さてきょうも生きて二本の足で立つ
いのちまで見せて白魚透きとおり
ウエディングドレスを競う水芭蕉
猫に鈴つける役目を酔って買い
原発は貧しい村へやってくる
抱き合って拌まれている歓喜天
アンケートにもはつきりとへソ曲がり
元旦の心四恩をかみしめる
栄枯盛衰雑巾がそこにある
坐り込みついでに座禅などいかが
センソウハンタイ英霊も唱和する
花よりも鳥よりも人人を愛で
みちのくのさいはてここで石拾う

句百選

香川 醉々

天平の星が輝く石舞台

流しびな飾り女の影ゆらぐ

濡れ衣を身に着せられてからの鬼

牛乳で育った猫も爪をとき

貝に耳あてて天使の唄を聞く

お六櫛木曾に生まれた髪飾る

文楽のかしらは恋に酔い痴れる

ストレスが溜まり人形歩きだす

陸橋の夏よろよとかぶと虫

かくれんぼ鬼のひたいが蚊に食われ

てんとむし止まり仏の耳飾る

花火師の指紋が天に散ってゆく

郷愁の舌綿菓子の色に触れ

札束の前で小さくなる野心

ふり向けば振り向いたので片手上げ

手袋を右からはずす左利き

開発に河童の皿の水が減り

モナリザがけだるく笑う昼下がり

木枯しに背中押されて凡詩人

山葵田の流れに民話澄んでいる

み仏に女貧しき灯を贈る

偽りと知っても打たねばならぬ石

絵本からキリンの首がこぼれそう

風の吹く街でよろけるいい夫婦

背に家紋おうてでで虫息が切れ

遠花火見るふるさとの外圃

白波に消える仔亀の幸祈る

糸車ロマンの綾を織りつづけ

いつの日か砂に埋まる流人仏

干草の匂いで深くなる眠り

催馬楽を唄うは少し酔った鬼

風船が割れると青い空がある

勲章をつけると急に背が伸びる

晩秋の路かまきりの鎌拾う

旅に生き旅に死にたる瞽女日記

八つ当たりできぬ仏の貌に会う

群集になると暗示がすぐかかる

さよならがバントマイムになる港

げんげ咲く飛鳥・天平そして現代

信愛が生まれる踏絵なら踏もう

王様は笑う女王様は留守

酒好きの鬼が揃うている花野

地動説だから脱線するのだな

人と人結ぶ絆が露地にある

一枚の踏絵が靴の底にある

烏瓜真つ赤に熟れて長寿村

酒倉にもたれ便りを読む杜氏

潮時で笑い袋を開けてみる

絶壁にかけの命が揺れている

切り絵から抜けて自在になる少女



揚羽舞う無韻の中の歓喜天
 折り鶴の一片が折る風の彩
 記念樹を残し故郷は遠きかな
 極限で思い出すのが子守唄
 遠囃子奈落の底で聞くうちわ
 逆風に勝てぬ日記の白つづく
 舌出したまま獅子舞は汗を拭く
 雪沓に残る女のあたたかみ
 天平の闇の深さよ万灯会
 巢籠りの鶴は静かに石になる
 百度石母の素足を風が斬る
 清流に真直に立つ独楽の芯
 綾とりの指の温みを信じよう
 若き日の遺書が流れる川がある
 ふわふわの椅子で反省などしない
 チャップリンに憧れている馬の足
 友情の記念にあげたかぶと虫
 煮こごりを母と分かちて食べた日よ
 俺の意志貫く俺の血が流れ
 頂点で神の姿を見失い
 満開の花に誘われ修羅出土
 風媒花風に生まれて風に死す
 過保護からやつと逃れて来たキャンプ
 白髪となったローンの長い異
 能面のまわりは深い霧である

正体は道化師だったデスマスク
 はなやかな過去がこぼれる砂の塔
 風を見た男に詩神会いに来る
 おめでたの極におかめの面がある
 指切りのメモは生涯大切に
 雨の日の花屋の花は控え目で
 切り札はないが辞書なら持っている
 地獄絵でもがくは絵師の魂か
 音もなくぼたん雪積む六地藏
 父の真似得意で父にかなわない
 鬼瓦女系家族を守り抜き
 二人三脚明るい夢を信じ切り
 野仏も中年頬がまるくなり
 少年の日の顔映す井戸がある
 鍵っ子が一人残った縄電車
 父が唄う確かに安来節である
 海峡に白き波立つ輪廻かな
 第六感呼鈴押さぬことにする
 巣箱から春の楽譜が流れだす
 軽やかなリズムで揃う葱坊主
 実印を押すとき息を整える
 月へ飛ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ
 傷跡を包む香水なら振ろう
 折り鶴の我慢翔ぶ日を待っている
 針箱に母の残したわらべ唄

愛染帖

橘高薫風選

悼浜田久米雄さん

酒がないくにへ君まで逝きいそぎ
心おたやかに九十の計報きく

今治市

矢野佳雲

生簀でも安心してる波の音
中流の自負で坐っている末座

青森市

工藤甲吉

呼び出して行く税務署は鬼方島
金に人餌に雀が寄ってくる

米子市

林荒介

陽炎のおんかあかびや蟻の歌
杭を打つ棒よ今日も落ちないで

大阪市

小出智子

ものごころついた頃から風の音
試験だな朝の鏡がくもっている

八尾市

高橋夕花

きびしくもゆるやかなるも母の海
なし遂げて椿の如く散り逝きし

伊丹市

榎谷寿馬

花屋にはなるまい花の飾り過ぎ
エスカルゴ芋刺しにしてフランスよ

和歌山市

浦野和子

三人寄れば源氏の雨夜の品定め
憤懣の極ヶタケタと喰い出す

岡山県

白岩文衛

子に残す何物もなしわが月日
なに力むしかしと本に向いて

西条市

片上明水

漁師町今日は山から風が吹き
住職の話を父は信じきる

米子市

雑賀美世

制服を干せば校歌が聞こえそう
残されて今夜もすがる般若経

大阪市

神夏磯道子

腹芸のつらさおなかが空いている
失礼な包みと思うた新聞紙

和歌山市

若宮武雄

流し離解き放たれる顔をして
警官の非行へ手錠うろたえる

西宮市

奥田みつ子

ガラス吹く男の頬にあるロマン
半分を半分にして仲が良し

松原市

佐藤藤子

水煙と競って杉は天を突く
桃の香がほんのり母の灯がまるい

鳥取県

鈴木村颯子

こだま返す山の向うの亡母を呼び
戸を開けてまず女房をたしこめる

和歌山市

中尾まゆみ

夢トンネルの向うはデイズニールンドかな
抜けている先生どうもありがとつ

東大阪市

市場没食子

氏素性腕も跡目の男ぶり
エゴ臭が老後の備えにも滲み

和泉市

岡井やすお

ええかつこし過ぎ支持率下ぐ総理
肉親は見付からずとも故国良し

米子市

小西雄々

鍵穴を男が覗く負けいくさ
約束をしてもシヤボン玉割れる

尾鷲市

渡辺伊津志

蟬螂の枯れ急きたてる風が吹き

鳥取市

河村日満

名古屋市

藤井高子

米子市

林瑞枝

岡山県

土居耕花

笠岡市

木山遠二

高知県

松岡三吉

吹田市

横山青果

土の音立てて午莠が引き抜かれ

岡山県

池田半仙

鶯の囀る藪がピアノ塾

吹田市

井上照子

お隣の雨戸があいたという安堵

寝屋川市

柴田英千子

小さい花ちさい笑顔で和ませる

貝塚市

行天千代

歩きたい道あり友と歩きたし

島根県

榎原秀子

インタビュア髭の殿下にそっくりで

河内長野市

井上喜酔

待つ人も無いが我が部屋花が有る

朱子市

八木千代

花束ももう届かない誕生日

和歌山市

西山幸

先生も恋は素人きこちない

河内長野市

井上喜酔

罪いくつ連れて明る月が出る

兵庫県

遠山可住

制服を男は強い味方にし

鳥取県

福田あや子

老木の芽吹かぬ枝にわれを見る

唐津市

浜本ちよ

一番がいやで二番につけている

京都市

松川杜的

落ちそうな橋を渡れば老いの坂

岡山県

原田凡太郎

温かい手の看護婦を好きになり

八戸市

島田昭治

啓蟄へ鯉には春が未だ来ない

富田林市

岩田美代

大学出未米はつきり受話器置く

鳥取市

武田帆雀

足音は春の音だよ猫柳

唐津市

岩崎實

想うこと多し桜の三分咲き

和歌山市

松原寿子

さむらいの子孫でスパッと斬りたがる

島根県

小破白汀

子離れの手毬無心についている

吹田市

西川景子

花吹雪の中で裁きを待つ女

兵庫県

辻文平

鯉口を少し切つての話しあい

尼崎市

田中晴子

目減りする命何時迄生きられる

東大阪市

竹中綾珠

禱ること多くて雪が解け初める

弘前市

真喜内實

こわれものとすとハートへ但し書

藤井寺市

赤木和子

竹の子も頼まれて来る花の寺

吹田市

栗谷春子

あのかたが来ると花達そよぎあう

岡山県

岩道博友

クリスタルグラスで燃える赤ワイン

高槻市

田崎素秋

現代病人の小声に不安持つ

熊本市

紅葉山巨足

植木市花と似合わぬ声に会い

唐津市

田口虹汀

ハーフの娘に父が名付けた日本の名

高槻市

田崎素秋

国などは思ふ暇ない平和ぼけ

兵庫県

脇田米朝

トラブルの中で瑪瑙がよく光り

島根県

堀江正朗

神様の声聞きたくて空を見る

豊中市

田中正坊

偏差値がコンピュターの帯に乗り

大阪市

萩谷まさ

酒のせいにされては酒がかわいそう

島根県

堀江芳子

付添いの居眠り病人おかんむり

西宮市

草刈隼駄

合掌はしても変らぬ無神論

宝塚市

吉田笑女

幼な児のごとになんと夫が呼ぶ

唐津市

木塚素石

夜中に時計みる死ぬる時見るや

島根県

松本文子

もう一夏一冬越せば子が戻る

出雲市

原独仙

シソーで絆をつなく祖母の愛

唐津市

仁部四郎

逃げ道を探す倒れた目の位置で

水戸市

上鈴木春枝

噂もう坂を転がる雪ダルマ

出雲市

原独仙

二杯目で彼の言葉の訳を知り

富田林市

植松 慶子

女が褒める瞳の中のアイロニー

岸和田市

原 さよ子

好きな人できてベン字を習い出す

大阪市

松尾 柳石子

終日の雨へ体操ころもみる

米子市

田中 亜弥

風の音明日の嵐を呼ぶ声か

尼崎市

伊藤 春子

大騒ぎぬけて木もれの月という

米子市

宮尾 あいき

おいてけぼりにされても空家で桃は咲く

倉吉市

奥谷 弘朗

おとぼけを笑い合ってる老夫婦

仙台市

川村 映輝

平和運動平和を乱す拡声器

大阪市

川口 弘生

食うだけはあつて元気な雀の子

米子市

菅井 とも子

白壁に柳が映えて古都の春

高知市

北川 竹萌

切り捨ててならぬ端数が今日もでき

兵庫県

仲井 素水

それぞれの悩みありそな羅漢像

豊中市

満仲 きく子

湖はもう春濃い色淡い色

風屋川市

平松 かすみ

多忙から解放されて風邪もらつ

高知市

赤川 菊野

夢で逢う亡夫がだんだん若くなり

高知市

小沢 幸泉

君と飲む句会をめくるカレンダー

笠岡市

高木 桃里

くにに父母あり嫁の気が強し

八尾市

松下 蕉露

宴会をおひらきにする歌上手

京都市

都倉 求芽

緋もつせん早春の陽を寄せ集め

米子市

野坂 なみ

柳誌読むベンチ鈍行出たそう

大阪市

津山 刀水

親類にまだ爪弾きされつづけ

平田市

久家 代仕男

そこまでは気付かなかつた子無し妻

浜田市

佐々木 裕

子供の日子供に電話して終る

吹田市

西岡 豊

臍曲がりひとりのために白けてる

大阪市

北 勝美

大和路は鐘が聞える桃晶

西宮市

松本 一郎

自在鉤旅の思い出飛驒の里

尼崎市

春城 年代

あんな夢見た胸さわき言うまいぞ

堺市

高橋 千万子

恩給と抱き合ふ命大事がり

和泉市

西岡 洛醉

振り上げた拳男の誤算かも

和歌山市

福本 英子

膝の子に髪なぶらせて満ちている

大阪市

稲本 凡子

俸せを撫むこの掌が薄過ぎる

大阪市

稲本 凡子

ママゴトで家の裏を覗かれる

藤井寺市

昭子

露路の奥忘れた様な梅が咲く

堀江 光子

社長まで捨て駒のようまた代り

岡山市

井上 柳五郎

父に似た子供の寝顔見て安堵

藤井寺市

前山 美恵子

きりきりまい私に似てゐる奴

大阪市

清水 康恵

ほんとうの愛よ補聴器外しなさい

羽咋市

三宅 亨

ほどばしる水出たとこの勝負です

大阪府

坂口 公子

投句先 560

★ 豊中市中校塚三丁目13-15

橋高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「弱 気」 選者 橋高薫風

締切 5月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 大阪放送局「老後をたのしく」係

5月29日(日) ラジオ第一放送

午前10時から

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

羽原 静歩

都市砂漠子の絵も水の欲しい花

市川 鱗魚

幼稚園の先生に聞くと愛情に不足した反抗的な子は、よく黒い色を使うそうである。そうでなくても、都市砂漠の中に生きている現代っ子の描かれた絵に、うるおいの欠けていることも事実である。作者は「水の欲しい花」と表現されているが、何も花に限ったことではない。その行動の一つ一つに何か都市砂漠めいたものを感じるのは私だけのひが目であらうか。

愚痴ひとつこぼさぬ妻に裁かれる

紀市 郁栄

「愚痴」と「裁かれる」のコントラストは見事である。この句の中に表現された「愚痴ひとつこぼさぬ」は妻の夫に対する誠実実をズバリ表現しているものと思う。その誠実実によって裁かれている御主人は幸せな方だと思ふ。

受験前日不安を流す髪洗う

佐藤 藤子

高校か短大か大学受験か、ともかく受験前日ともなれば何か不安めいたものがあるのは男にも女にも共通であらう。俳句的に言えば「受験前日不安を流す」と季節なりの感じはするが「髪洗う」の表現がこの句の特色を輝やかしいものになっている。髪を洗う心の中はむしろ、すがすがしいゆとりと明日に対する自信の程もしのばれると思う。

その時に辞世が作れるまで創る

高野 宵草

これは又素晴らしい川柳の心境である。芭蕉と同じように毎日の句が辞世の句と悟り切っておられる姿は全く尊いものである。こうした表現は一朝一夕に出来るものではない。やはり作者の毎日の努力の賜物であると思う。どちらかが満足しているシーソーよ

佐藤 令子

大変興味深い句であると思う。色々な想像が出来る。このシーソーに乗っているのは幼稚園の園児であらうか。又、家庭生活の面から考えると、親と子のシーソーか又は夫と妻の乗っているシーソーとも考えられる。色々な想像が生れる訳だが、上五の「どちらかが」の表現によって作者はアンバランスな、ありのままのシーソーに満足感を見つけたのであらう。人生の縮図をシーソーに乗せた作者の表現を讀みたい。

一世一代の買物妻めとる

野沢 大漁

結婚は確かに男にとっても又女にとっても厳粛な人生の道すがらである。その結婚生活が明るくなるのも暗くなるのも、結局お互いの二人三脚のやり方次第である。このような結婚観を持たれた作者が、結婚を川柳的に、ユーモアたっぷりに「一世一代の買物」と表現したことが、この句の男らしいバックボーンとも言える。この句を鑑賞していて、ふと薫風先生の次の句が浮かんできた。

進む時計遅れる時計夫婦かな
年金証明 一年きざみに生きのびる

高杉 千歩

夫婦って何だろうと辞書を引く

有働 芳仙

チーズケーキ一口こころが丸くなる

平松かすみ

妻よ出て見ないか街は春の風

矢野 佳雲

猿真似のうまい男の回り椅子

越村 桔梢

露天風呂タオルでつかむ春の月

東原 福子

お箸ならもつとおいしいフルコース

藤田 泰子

ロボットが次々職を取りあげる

高崎 雀声

九死に一生それから神を信じます

北川 一進

幸せの絶頂絵馬に書き残し

八塚三三島

■ 随想

ひつじの雑唱⁽¹⁾

竹内紫鏑

折句の会

私の川柳歴はちょうど三十年になる。初まりはこんなことだったと思う。

場所は日立。工場付属の病院内で、長期療養の患者二十人ほどが参加して句会らしきものを始めた。といっても集会は不可能なので薬包紙に各自が句を書いて箱に入れ、軽症の者が幹事をとめて一枚に清書、回覧、互選、再回覧する——という手順であった。

ラジオしかない当時の娯楽番組で人気のあったのは、NHKの「とんち教室」の折込み都々逸。七五七五音のかしらに、指定の四字を入れるという、いまの「脱線問答」みたいな番組で、美人を登場させる必要はなかったが、聴取者はそういう内容に飢えていた。折込みの題には、手近な人の姓をあてたり、優雅な季題を使ったが、句意そのものは全く題

につながらず、その意外性がウケた。石黒敬七たちのトボケ調が病苦をまぎらす、という効能もあったし、横山泰三の新聞漫画や時事川柳に療友たちが目を向ける時代であった。折込み都々逸や「脱線問答」が人を笑わせるのは、機智の片鱗や、いわばせいまい土俵の中で苦しまぎれに作った語句のおかしさにある。言いかえれば、「条件に縛られながら考える楽しみ」といえる即席の余興である。条件といっても句の課題とは違う形だが、この方が、自由に何でも詠めという場合より参加者が多かった。

文科と理科の違いも表われ、情緒的なものより理詰めのクイズ——例えばクロスワードや詰将棋を好む人も多かった。つまり、数学という境界条件のような制約が与えられ、答が一つとか、紙面をとらない程度にしばらくの推理（読み）を好む習慣が技術者にはありみな文章を書くのは嫌いであった。私（研究者）も、機械の設計者も、健康な社員もその点似たようなものであった。（私がやや筆まめな方になったのは、後で述べるつもりだが数千の句を作るとともに発表語彙——随筆にも使える語句——が溜まってからのことである。）

後日、職場の俳句大会の世話をしたときも参加者が狭い土俵を好むことを知った。「冬季雑詠を」と書いて募集した際、「題を示した方が作りやすい人は、雪を詠んで下さい」と併記したところ、雪の句ばかり圧倒的に多くなって、約三百句中五八%を占めた。

社内報の中の川柳

病院内の文芸会では、都々逸に盛られた風刺精神が引継がれて川柳会が出来たが、一年後に私は退院。工場に戻ってからは社内報に川柳を紹介しだした。しかし仲間はいふえず、一方、俳句会は強力であった。殺風景な町なので音楽、囲碁将棋、スポーツが盛んで、文化会の組織もまともでありやすい工場地帯であった。工場という所は安全に非常に力を入れる。標語や安全川柳は身近によく見られた。

一万人の職場の新聞で、年の初めに「いろはがた」を載せ、折句も募集した。十二支の動物の中では、ひつじだけが五七五に折込める。あれは昭和四十二年のひつじ年であったか、社内報に載った句のいくつかを、今も憶えている。

昼休み詰めるところで時間切れ
ひざの上ついに上ったぞ自家用車
ひと苦勞ついに買ったぞ自家用車

こういう時には多数の句が寄せられるのであるが、それも条件を与えられれば作るという心理なのだろう。折句に限らず、組織の中の人間に作句を勧めると、いわく「協力はします。この題は自分には向かないが、おつき合いです」と、一応そんな言訳をつけて、幹事の弁護を期待しつつ投稿や発表をする傾向がある。「急にたのまれたので」という言訳はしょっちゅうである。

それはともかく、応募する気になれば、折句の一部を思いついたあと、連想ゲームの調

子で、日ごろ風刺したく思っている情景がクローズアップするのだらう。そして、真顔になつて仕上げの言葉を探すことになる。

社会常識がある程度たまった大人が句を作れば、そうなるのは自然であり、応募後もひそかな期待をもち、ふたをあけたときが楽しみにもなる。入選すれば——それから川柳（狂句でない）に熱中する可能性が出る。

「ひつじ」という折句も、十二年おきくらいなら、その各時代の新しい風物を句材にできて、人を楽しませることにならう。「いろはかるた」の作者も、それぞれ川柳心が根ざしていて、発表のタイミングを狙っているに相違ない。このところは大事にしたい。

さて、川柳の味が分かり、古川柳に目を通した人となれば、あとは「縛りを解かれても考える趣味」に移っていく。こうして、しばらくの間は定型を守るが、すばらしい着想があつたあと、今度は十七音という「縛り」が煩わしくなることがある。上句が七音や八音なら内容を言いつくせるのに無理に縮めたり、五八五調では句の調子が悪いと強調されて、どうしてよいか判らなくなつたりする。俳句なら、そんな時の相談相手は多い。また句想しだいでは短歌のテーマにもなるが、短歌屋と議論すると、散文の文法に近いものを要求されたりする。職場文芸会ではそんな経験をしたが、関東を転々とする間、私はやはり一人のままであつた。でも句を思いつくことは頭の柔軟性を保つことだと信じて横書きの手帖に書きつづけた。

電車通勤は句を作らせる。吊皮の下で手帖に書き溜めては投句。柳誌掲載句を別のノートに写す。そのノートは二十年で四十頁ふさがつた。こんなに紙を消費しない趣味も珍しい。

サラリーマンと潤滑油

今年は亥年である。経済摩擦のせい、世相はきびしい。それを反映してか「サラリーマンいろはかるた」にも暗さが漂っている。しかし応募者は非常に多かったそうである。

いのししに赤字頼んでいぬは去り
四十四文字を頭にして、一人が全部作るなら、途中から折句めいたきつい束縛を受けることになる。また大勢が一旬ずつ寄せるなら自由度はふえ、秀句も出るわけだ。今年は①の部に、新登場のワープロを詠んだ佳作が集つたそうである。

折込みの遊戯句なんか、とおっしゃる読者もいるかも知れないが、私は面白と思うのは、「かるた」にせよ、安全標語、格言の類にせよ、毎月の量が書店の有料冊子の厚さにもならなくて大勢が関心をもたれている点である。それは新聞記事の見出し作りにも共通した「見つけ」の技術であらう。

しかし、会社の社長の訓示でも、会議のメモの解読でも、比喩や短くて切れる言葉を使おうとする。社員や学生のレベルでも、味方同士のなじみをよくするため、あだ名が愛誦され、敵味方を笑わせるものもある。つまり、説得力の向上や、ストレス解消に短語は

効果がある。だから、川柳の発想は社会の潤滑剤のような働きがある。

しかし、小説と一行の句とでは、書物の文字の数に大差があつて一〇〇〇対一ぐらゐの開き。それは、燃料油と潤滑油の国民使用量の違いみたいなものである。

小説を読む人は、ガソリンを使いながらドライブを楽しむようなもので、潤滑剤を押し売りされても困るだらうし、試作の潤滑剤に関心はあまり持たない。作句者がおもしろがる句も、読者は必ずしもそうでなく、いわば読者は名句だけ憶えていて話に使うのである。でもそれがマンネリであることは嫌うから、そこでマスコミが一にきりの視聴覚作品を取上げて提供してくる動機があると私は思うのだが——それは私がまだサラリーマンだからかも知れない。

社内報に川柳を五十句載せた時も、解説を三行ずつせよ書き加えてほしい、と言われたものである。川柳作家はもつと文章へと発展し、川柳をPRすべきだと思つた。

さて、申し遅れたが私は一匹ナントカというものではなく、ただのひつじ年生れ。一人歩きではすいぶん無駄もした。そのひつじ年は大正に一度しかないが、同年の加藤周一氏をはじめ「羊の歌」と題する回想文を書く人がふしぎと多いので、私もときどきそんな気になる。随筆を書くなら、文中の息継ぎまでの長さが手頃で、リズムのあるものを書きたい。それが句になじんだ者の夢である。(続く)

大相撲春場所を観る

若乃花横綱一代

大矢 十郎

初日（三月十三日）大阪に春を呼ぶ大相撲三月場所が開幕された。二カ月前の初場所と比べて、三横綱が揃つての登場という華やかさはなかった。北の湖の休場は膝の故障へ大事をとつての事であるが、私達相撲ファンを納得させないのが若乃花の引退であつた。初場所六日目、朝潮につき倒されて二勝三敗となつた。然し、この負けっぷりはタイミングとは言え、余りにも哀れなものであつた。この夜、師匠二子山に杉並区の部屋に呼びつけられ、引退を強要された。この強要も、星だけのもではなかった。もう少し相撲を取らせて下さいと強く訴える若乃花へ、二子山の答えは「引退しろ」の連続であつたという。一昨年十二月、若乃花は二子山親方の愛娘幸子さんと協議離婚して以来、極道息子と口走つて憎悪のかたまりと化していった。それ

も無理からぬ事、若乃花にも非行と問題が山積みされていた。家庭には深夜に戻り、一年二カ月の間で夜の営みはたつた二回程？その間、愛人の元へ通い続け半同棲生活を送つた。そのため巡業中に倒れた若乃花を、幸子さんは一カ月余りの長期入院にもかかわらず、一度も見舞に行かなかつたという。これが協議離婚の原因となつたわけであるが、その他に最も始末に負えなかつたものは、バクチにうつつを抜かした事である。二千万円を超えるマージャンの負け、競輪競馬へ札束を投入、そして何千万という借金。流石に後援会長の元法務大臣稲葉氏も、若乃花の精神年齢は十四歳だとのしつた。かつてマッকারサーが日本人の精神年齢は十二歳だと言つて嘲笑したように、相撲に負け、バクチに負けた横綱若乃花は引退という名の解任であつた。

千代一人浪速の春は淋しくて 十郎

二子山親方にしても、若乃花への年寄株の入手、現役名のままでの不名誉な問題が残されている。五月場所が終れば若乃花の引退相撲が催されるであらう。露払い北の湖、大刀持ち千代の富士を従えての手数入りは、万感

「三割抜けた！」

「七割没や！」

同じことでしょうか？

（寿馬）

羽原静歩氏（守口市）から

句集出版記念として

金一封

ご寄贈いただきました

川柳塔社

胸に複雑なものがあろう。北の湖と共に「花のニッパチ」と騒がれた横綱若乃花の引退。それは、やっぱり弱いからだ。如何なるスキャンダルもトラブルも、見事、打消してくれるのが白星なのだ。それが取れない力士には

廃業あるのみ。若乃花よ、貴男はまだまだ取れたのだ。心技体の精神力さえ充実していたなら、師弟愛・夫婦愛があつたなら、どんなにか立派な後継者になる事が出来ただろう。

若乃花退く日大鰐町に雨

十郎

二十代の横綱の引退、それはかつて軽量武蔵山と、小兵栃ノ海の二人だけである。若乃花のように充実した体軀の持主は初めてである。優勝四回、美男横綱若乃花の花道は淋しい。

男の世界

高杉 鬼遊

大矢十郎さんの好意で大相撲三月場所の第三日目を観戦する機会を得た。テレビではよく観るが生の本場所が初めてのことである。私と違って子は大の相撲好きで幼稚園に入る以前からの狂いであつた。本場所が始まると興奮するのかきまって発熱したものだ。字もまだ読めないのに、文字の形で関取の名を知っていた。その頃、家にはテレビがなく、わざわざ電車で鶴橋や京橋の馴染みの喫茶店へ出向き、弓取式のすむまで長時間観

せてもらった。大阪場所のある時は、一度は家内が連れて本場所へ出掛けた。そんなことを想いながら府立体育会館に着いた。普段は殺風景な建物であるが、余りの華やかな雰囲気驚いた。テレビに映らないが、正面入口を挟んで両側に十六軒の相撲茶屋が並ぶ。行き通う人波、茶屋の男衆、仲居達のやりとり、私は錦絵の世界にいる思いで興奮していた。

午後二時過ぎだったので取組は三段目の終りの方だった。棧敷で見る勝負は、観客の熱気も伝わり一種格別な雰囲気である。テレビと違ってビデオがないので、一番一番を見るのに精神の緊張を覚える。

中入後、幕内力士の土俵入りがあり、何々部屋と言つても親方の元の四股名がわからない相撲音痴だが、この辺になると力士の顔は知っている。つづいて横綱の土俵入である。

北の湖関が休場のため、千代の富士関だけだったが、なかなかの見せ場である。一瞬場内の空気が熱気の状態で静止する。手の動き、足の動きに観客の息がつまる。積み重ねられた伝統の重みか、錦絵が動く圧巻である。樽太鼓を聴きながら、知らない世界を知った熱いものを胸に家路を通る。

関取の勲章というひたい傷

鬼遊

うめだ番傘創立35年

「川柳歳事記」発刊

記念川柳大会

日時 昭和58年6月12日(日)10時開場
会場 大阪科学技術センター8階ホール

祝辞

歳事記読後感 神谷娛舎亭・亀山恭太
(大阪市西区報本町うつば公園内)

宿題

「続く」 磯野いさむ・藤原みてい
「操」 志水浩一郎選
「暗示」 田頭 良子選
「シーン」 中田たつお選
「たいくつ」 森 東馬選

「流れ」 庄司登美子選
「ユーモア」 久保田寿界選
「指」 鈴木丙午郎選
「この町」 田向 秀史選

「恩」 室田 千尋選
「掴む」 西尾 栞選
「船出」 古下 俊作選

特別宿題

「船出」 奥田 白虎選
(特別宿題は5月15日までに事前投句)

会費

四千円(川柳歳事記・記念品呈)
主催 うめだ番傘川柳会

髭

齊藤 三十四 選

丹念に髭剃っているデトらし
髭剃って無職の男に春遠い
長男の髭突然に生えたよう
待ち合せ髭目印の初対面
甲子園みやげの砂と無精髭
本気で見合する気髭を剃り
憶病な男が生やす泥鰌髭
チヨボ髭の友だけ母に覚えられ
退院の許可出て落す無精髭
女房が髭を生やした共稼ぎ
髭のない猫は鼠から逃げる
男性の唯一の化粧は髭だろう
髭のある顔はほへんではならぬ
青髭の男と呼ばれて恐がられ
髭のある顔が可愛い高見山
髭面がやつと風邪から抜けて起き
定年が午前十時の髭をそる
近づいて見れば確かに生やしとり
髭剃ると少し精薄めいて来る
毛の薄い男が髭を立てたがる
哀愁の髭いつまでもチャップリン
怒ってる妻の口元髭がある

たする
きみえ
四郎
満津子
一止
不二
ひで
文平
素水
はじめ
武水
墮駄
可住
七面山
倫子
ちよ
新一郎
伊津志
耕花
幸一
優
公一

髭剃ってみても女にもてぬ顔
清潔を論じる奴が無精髭
三分粥髭も気になる程に癒え
止り木に天下論じて無精髭
菜つ葉服だから髭でも生やそうか
校長の髭恐かった日の記憶
水温み鯨の髭が始動する
虎髭の部隊長を懐しみ
職安へ髭の立派なのも混り
髭だけが昔のままの恩師です
行列の華麗お供の髭奴
あご髭が虫歯に負けて青い顔
七癖の一つに髭を撫でる癖
一念発起耐える男のごつい髭
ロングランバイオリン弾きの髭の味

凡太郎
頼一
静子
洛醉
雅風
カズエ
宵明
弘朗
雄々
三男
松太郎
冬子
浪速子
胡類子
寿美
喜醉
右近
重人
博友
規不風
裕
里風
人
貫禄のつもり
地
天
元勲の髭はいのちを賭けている
髭面の寝顔に男のまこと見る
髭の部
髭の寝顔に男のまこと見る
髭の部
髭の寝顔に男のまこと見る
髭の部

星

軸
頤髭の白き善人自認する

西山 幸 選

あの日にもこうして見てた星
お別れをしてから星に付きそわれ
星がまだ始発の駅の上にある
夜遊びの星に遠慮をして帰る
盲目の恋オリオンは冴え返る
人工の星が星座を脅やかす
流れ星乙女の祈り聞いている
SFを書こうか星が語りかけ
光年の星から届くラブコール
満天の星に浄土を聞いて見る
よく光る星を母だと信じてる
七夕のロマンに酔うている男
流れ行く雛のざんげを星が聞き
星空に人間模様小さく見え
流れ星不吉なことに触れずおく
満天の星明日の戦を吉と見る
流れ星願いを言わぬうちに消え
明日逢える星があるから生きたい
願いごと逃げてしまった流れ星
夜明けまでに添いたい星もさつとある

和子
木魚
明水
天彦
泰子
正敏
倫子
婦美子
本陰棒
テルミ
宵明
景子
米朝
三男
寿美
綾珠
規不風
満津子
代志男

みなし児に父にも母にもなる星座
満天の星のリズムはくずせない
生と死の狭間信じた北斗星
鍵っ子に一番星が光りすぎ
伴せへゆっくり走る母子星
満天の星に笑われてはならぬ
星一つ流れて思案深くなる
夜空には戦に勝った星ばかり
思春期の少女は星の言葉知る
竿で星落とす男を笑えるか
星の数なかの一つでも想う
星占い明日を迷うことばかり
星空へ愛の深さを掘り下げる
星仰ぐ少女は恋を知りそめる
コスモスの落下を嗤う流れ星
負け犬の遠吠冬の星光る
意気地ない男をなげく流れ星

明星が一つ瞬いてる夜明け

島

山内静水選

星空がきれい明日へ夢を持つ
燃えつきる抵抗がある流れ星
星空に天の暗示がかいてある
降る星の下で貴女は瞞せない
流れ星ざんげ話がし度くなる
星だから仰ぎつづけるだけでいい
流れ星 星の世界を落ちこぼれ
豆の木を登って星を掴みたい

島影にボートを寄せて睦み合い
流人島暮れそれぞれの国に向く
島へ荷を一つ下ろして定期船
唄に絵にまではやされる嫁ヶ島
ひそやかに島の野菊と咲いた恋
お遍路の鈴の音島を春にする
呼べど応えぬ淡路は深い霧の中
公害を知らぬ小島に蜜柑うれ
本土とは一線画す島娘
島に来て東京弁で教えられ
噂など素通りしてる島の風
島々の灯りにロマン見え隠れ
島へ来た先生島の娘嫁にする
ハイライト浴びて上気の大八洲
勅題の島柄茶碗も一つ買い
島国のリズムで追われている暮し
観光のルートにされただけの島
語り継ぐ人あり民話の島がある
島影の墨絵の中に暮しの灯
この島を空母などには出来ませぬ

カラオケも混って島は雨を乞い
島おとめガラスの靴のゆめを見る
敵艦見ゆ遠い昔を語る島
井戸一つ島の暮しを支えてる
水平線朝日が昇る島に生き
ご先祖の墓参叶わぬ北の島
裾さへ還らぬ島の春霞
とても一途に屍となった島も春
塔一基このへんあたりは海だった

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

初歩教室

題 — 譲 —

本田恵二朗

気風だけ譲り美田は残さない

桂 子

譲り合いその間にちやっかり割り込まれ
(ゆずり合う隙をねらって坐り込み)

同

一步引く譲る心に春の彩

ま さ

(一步引き譲る心は春の彩)

同

譲られる心倍して返っていき

同

(譲られた温情倍して返さねば)

譲り合う心が築くユートピア

佳女男

(譲り合う心へ青い空が笑む)

親譲りよくもこんなに似た素質

琴 柱

(親の性サガ)そっくり譲られ照れくさい)

ふたり共譲らぬ気性は父譲り

美恵子

(負けん気の根性どつちも父ゆずり)

譲ってさゆずって心大きくする

實

(譲った心がなごむものとしり)

はほ笑んで席を譲ってほほえむの

同

(風みどり笑くばを添えて席ゆする)

話し言葉での描写は乱用せぬ方がよい。そ

れはキザになったり、舌足らずになり易い。

お先にと謙遜面で道ゆすり

一 止

(お先にどうぞと譲った下心)

財も無く譲り葉のメ飾り

同

(懸調即ち狂句ということになりそうな句)

(狂句は川柳ではない。用心——用心)

失恋し譲ってやったと見栄を切り 兼治郎

(失恋がゆずってやったと負け惜しみ)

譲り過ぎ路肩くずれた事故であり

同

(路肩がくずれてしまった譲り過ぎ)

一線を退いても譲れぬことがある

刀 水

跡取りに跡を譲ってどつと老け

同

(跡目を譲ったら白髪どつとふえ)

譲られた席はのぼのとあたたかく キミ

一步譲る素朴なあの娘に惚れている 同

(一步譲る娘の素朴さに惚れている)

譲る気のないのが優先席にいる

節 子

(譲る気は毛頭御座らぬ優先席)

こうなれば意地でも譲れぬこの一目 同

(この一目断じて譲らぬ面構え)

譲ること悟り人間丸くなる

芳 水

(譲ること悟り心の角が消え)

勝ち譲り貸しを貰って丸くいる

同

(負けて勝つ術でゆうゆう負けて勝ち)

(句意が違ってしまったが、貴句を読み返して
いるうちにこんな句が生れてしまったよ)

百姓は継がぬが田畑譲れと言う 柳五郎

譲られた席西陽がきつく差し 同

(譲られた席へ西陽がきつく過ぎる)

譲られた席へ自分を振り返り

勝 美

頑固さも父に負けない親譲り

同

(譲られた頑固さ父を上まわり)

会計を譲る気のない老母と住む

みつる

(会計簿譲る気は無し老母達者)

譲るには頼りな過ぎるすね嚙り

同

(まだ未熟まだ譲れない譲るまい)

譲られてから気持ががしゃんとする

山 久

(譲られて前向き姿勢を整える)

子の頑固父親ゆずりと妻の声

同

(子の頑固はアナタ譲りよと言われ)

娘に譲るつもり派手めの柄を選ぶ

ふ み

腕自慢料理自慢は母ゆずり

同

(ご自慢の料理の腕は母ゆずり)

政権はたらいの中で譲り受け

やすお

後輩に譲る帽子を持ってない

同

(後輩に譲る帽子を探さねば)

聴診器息子に譲り医師隠居

露 芳

(聴診器息子に譲って雨読する)

譲られた財産税務署はとくかず

同

(税務署にねらわれるほど譲られて)

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■川柳ますかつと臨時増刊号として吉備団子33集が発刊された。参加柳人は、海外もふくめて五五二人に達した。定価千五百円、編集発行人大森風来子・発行所岡山県邑久郡邑久町山手一四四五川柳岡山社。

■前田美巳代句集しずく花発行記念川柳句会が4月10日姫路市民会館において開催、きわめて盛会であった。

■第55回奈良県川柳大会が4月24日桜井市中央公民館で開かれた。主催は奈良県川柳連盟。

■島根県木次町で行なわれたむらとも観桜大会も桜花のもと盛会であった。

■奈良番傘35周年並に歌橋一麦句集松笠発行記念川柳

大会が5月5日午前10時より奈良県商工会議所(近鉄奈良駅下車すぐ)で開催される。題と選者。友情(一高)方言(恭太)足あと(寿)坂(たつお)杉(哲秋)輝く(久子)書く(つとむ)主催奈良番傘川柳社

■昭和川柳クラブ公開句会が5月3日(祝)13時より大阪府立青少年会館(森の宮西へ約五分)題/自由吟(浩一郎)泉(十歩・伸吉)底(翠公・静港子)黙(寿界・夢草)会費500円。

■川柳新京都社では創立五周年を記念して誌上大会を企画作品を募集している。

題/結ぶ(前田美巳代)予言(石森駒久夫)立つ(岸本吟一)灯(泉淳夫)雑詠(堀貴次)各題2句。投句料不要。締切7月10日、各題別紙それぞれに住所雅号明記。原稿用紙または投句箋。発表新京都9月号(31号)宛先〇〇京都市中京区姉小路通柳馬場西入 川柳新京都社。

■岩波書店では品切中だった岩波文庫「俳風柳多留」

①⑤の重版を決定4月18日に発売する。①④各350円、⑤のみ500円。5巻は24篇迄の全句索引がある。

■「川柳入門・つくり方と鑑賞」三浦三朗著が刊行された。氏は川柳研究社副幹事長、B6判26頁、価980円。全国主要書店で発売中。発行所・家の光協会。

■川柳路吟社では、第13回誌上全国川柳大会を行う。「題」緑句数3句「選者」佐藤 蒼溪(旭川川柳社)渡邊 蓮夫(川柳研究社)篠崎堅太郎(埼玉川柳社)去来川巨城

(ふあうすと川柳社)田口 麦彦(川柳噴煙社)関 水華(川柳路吟社)用紙・縦18cm・横3.5cmの白紙(句箋)に1句1枚ごとに句を書き、3句1組として、同一句を6組提出のこ(句箋は無記名のこと、封筒に干番号、住所、出句者を明記)6人選につき各組とも同一句のこと。

賞・1位・2位賞状および記念楮。3位・20位・本誌

贈呈。

採点方法・特選3点、秀逸2点、佳作1点、同点の場合には出句先着を優先とする。締切り・昭和58年7月20日発表・川柳「路」10月号。出句先・250小田原市鴨宮372-2 川柳路吟社誌上大会係。

▽同人・柳友消息△

▼浜野奇童氏(岡山県)は今回急に転勤なされる由である。

▼吉岡美房氏(藤井寺市)三月の人事異動により、柏原警察署総務課長に栄転された。

▼山内静水氏(竹原市)の末の御令嬢が三月十八日華燭の典を岡山市で挙げられた。おめでとうございます。

▽お知らせ△

▼金井文秋氏御令聞ミサオさま、3月27日逝去なされた。告別式は3月29日に御自宅で営まれ、多数の同人、柳友がお見送りに参列した。

行年70歳 謹悼。

▽句会案内△

■菜の花句会
時・5月10日(火)夕6時
場所・八尾神社境内西郷会館(近鉄八尾駅下車)
兼題・ねずみ・杭・骨・深い・トネル。

■南海電鉄川柳部
時・5月26日(木)夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂
兼題・私鉄・親子・切る

■南大阪川柳会
時・5月19日(木)夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題・細工・自然・素早い・席。

■東大阪川柳同好会
時・5月28日(土)夕6時
場所・東大阪中央公民館(近鉄永和駅前)
兼題・太陽・約束・穴・生き甲斐。

■駒つなぎ川柳会
時・5月23日(月)夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題・偶然・結論・見直し背景。

『西尾栗作品集』出版お祝いの会

本社四月旬会／4月7日・なにわ会館

一、三日来の陽気で桜は満開、ここ、なにわ会館の会場も午後六時前には大広間は溢れんばかり、各柳社からも多数お祝ひにかけつけて下さり、文字どおり立錫の余地なしの大盛會。午後七時十分開會。

□あいさつ／黒川紫香

本日、この会場始まって以来という大盛會は川柳塔を愛し、栗主幹を慕う人々の集り。ちょうど満開の桜の花のほころびのような、主幹の笑顔をご覧下さい。皆さんのご厚情に對する感謝の氣持でいっばいだろうと思われまふ。ありがとうございます。

◇河内月子さんから栗主幹に花束贈呈

□祝辭／日川協副理事長 山田良行氏

日川協を代表してお祝ひの言葉を述べさせていただきます。栗さんは私にとって良き相談相手でありまふ。主幹というのとは自分の結社のことを大事にするのは当然なんです、栗さんの場合、特に塔に對する氣持は物すごく強い。日川協の常任理事会でも時にハラハラす

ることがあります。塔のためなら死んでしまふんじゃないかと思うくらいです。塔はいい主幹を持たれたと思います。これからも、時にはブレイキ役、或いはアクセル役として川柳界のために頑張っていたきたい。

□謝辭／西尾栗

こんなに沢山来て下さるとは思つてもないことで、こんなことなら家の子郎党ひき連れ、ここへ並ばせ、ご挨拶させますのに(笑)。私、昭和六年から五十二年間、川柳をやっております。長生きするのも芸のうち、と言いますが、今日のこの喜びを迎えられたのも長くやつてたおかげで、皆さん、どうぞ、いやになったと言わずに、いつまでも川柳を続けて下さるよう。いろいろ言おうと考えていましたが、胸一ぱいで忘れてしまいました。

本当にありがとうございます。

◇ここで57年度各地柳壇賞の表彰が行われる。本間満津子さんに選者・児島与呂志氏から記念楯が贈られ、堀江正朗・芳子夫妻(島根県)

からの祝電が披露された。

□はなし／橘高薫風

本誌4月号に「川柳のしおり」と題した小文の中でも書いたことだが、主幹は昭和六年七月二十五日天神祭の宵に發会した阪大川柳会に入会し川柳を始められた。阪大川柳会というのは阪大病院の教授、助教授、講師、それに事務局の川柳愛好家の集りて麻生路郎先生の指導を仰いだ。昭和十年「大川端」という句集が発行されている。この中から初心時代の作品を幾つか紹介し、栗川柳の育った土壌というものに触れてみたい。

入会して初めての旬会で、路郎選の席題「温泉」で、いきなり第一席に入選した。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

普通なら「座る羅漢」とするところを「座り羅漢」とした非凡さ。俳句のたしなみもあったのではと想像される。

腹違い舞妓になつていると云う

若旦那女将が出ると他愛なし

あの晩の風邪よと女嬉しそう

鏡台へ西日のきつい星形にて

二十二歳にして何とオマセと言おうか(笑) 若さに似合わぬ人生経験の豊かさがうかがわれる。

留守居して失業の日を思い出し

留守番を買って出たのは外ならず

こんな字を書いてもらうに墨をすり椅子はあいたが市長の椅子だとさ



河内月子さんから花束を受ける
葉主幹のこの笑顔

眼鏡ふけばため息に似た息が出る
染め直し昔の生地を褒められる
初心時代から川柳の要諦である「穿ち」を
会得されていたのには驚くばかりだ。
今日まで路郎川柳の本流を貫かれた葉先生
を主幹にいただき、我々は共に川柳の立派な
花を咲かせていこうではありませんか。

セレモニーの間に柳太氏が書かれた主幹の
似顔絵のスケッチが即吟を添えて会場に回さ
れ、一段と和やかな雰囲気の中で兼席題の披
講が進み、開会は午後八時五十分。百四十三

名の参加であった。

(史好記)

(受付)与呂志・重人・寿子
(進行)天笑(ニカメラ)岳人
(記録)鎮彦・敏・射月芳

出席者 花村・帆船・育園・小路・狸村・

山久・鎮彦・敏・はつ総・春江・みつる・秀
果・幸太郎・美緒・洋敏・形水・柳宏子・寛
然坊・頂留子・求芽・萬的・凡九郎・雀踊子
茂雄・風童・健司・英子・寿美・恵美子・与
呂志・寿馬・弥生・儀一・栗・薫風・寿子・
爽介・照子・鬼遊・登志代・武助・操子・さ
よ子・カズエ・白光子・富志子・ひで・悦郎
喜風・紫香・潮花・勝美・千万子・あいき・
晴風・美智子・重人・アキラ・良行・三男・
正博・シマ子・滋雀・水客・トメ子・兼治郎
左久良・以兆・吉則・冬葉・雅風・景子・笛
生・寿・春蘭・満津子・道子・浩一郎・柳仲
郁栄・節子・蕉露・慶三・幸生・千代三・酔
々・千寿子・光代・太茂津・綾珠・幸・一麦
武雄・みつ子・右近・律子・やよい・弥山人
たず子・絹子・よし津・房子・和子・史好・
楓楽・度・萬楽・規不風・幸代・恭太・凡子
花梢・たつお・翠公・恒明・白水・古都路・
千梢・勝晴・反省・英千子・和友・泰子・天
笑・月子・勝・智子・久子・一三三・吸江・
蟻郎・湖風・いさむ・美房・柳太・夕花・吐
来・岳人・白兔・射月芳・小雅子・万彩郎・
原島健次

席題「ステッキ」 田中秀果選

紳士録の中でステッキ突いている
ステッキに明治のかけしがみつつき
もつ飛べぬ父ステッキを買いにゆく
遠来の客ステッキで城を指し
年金のあるステッキを信じよう
ステッキへああ老兵となりにけり
ステッキの先に都が見渡せる
ステッキも旅の心になつて
緑日の香具師ステッキで線を引く
ステッキに五重の塔を教えられ
ステッキで指図する様板につき
この頃の野犬ステッキでは逃げぬ
ステッキへ善意の席をゆずられる
ステッキに亡父の思い出話である
ステッキが似合う主幹のハンチング
ステッキにチャップリンの貌ういてくる
ステッキを曳きするように行く野人
ステッキ替わりに粋な女連れ
ステッキの先から老いが丸くなる
ステッキを小粋に春の男役
ステッキをいつてポツクリ寺へいく
医者へ行くステッキ花は七分咲
ステッキをついて焼香の止めに立ち
ステッキを振って雀の譜をつくる
英国という顔でつくステッキで
地球儀を回ってきたというステッキ
盲人の目がステッキの先にある

智子 蕉露 悦郎 和友 反省 雀踊子 湖風 水客 光代 幸生 幸太郎 帆船 たつお さよ子 史好 小雅子 左久良 鬼遊 滋雀 英王子 さよ子 鬼遊 規不風 栗 和友 和子

花吹雪に付つステッキは絵になろう
吉田茂のステッキは記者嫌い
別れ上手なステッキとたそがれる
師の形見竹のステッキ手に軽し
ステッキを担いで見せて蹴踏く
古い話ですとステッキとんとつき
ステッキになる道連れの歩を合わせ
ステッキの倒れた方へ来て傘寿
示談成立までステッキをつけという
文豪のステッキそばのうまい店
ステッキを忘れた駅の花だより
ステッキは花咲爺に似合わない
ステッキが要る人間に桜咲く

席題「駅弁」

中田 たつお 選

五分間停車駅弁売り切れる
駅弁のおいしい駅を知っている
シューマイを買うともう直ぐ上野着
駅弁に季節音痴もつめてある
駅弁の容器が好きで荷が増える
駅弁を黙々食べるひとり旅
寝たきりの母に駅弁買って来る
駅弁の蓋とって待つ女秘書
祭りずし食べて旅路の果を知る
お土産は鱈寿司でよい北の旅
駅弁が食べたくなると旅にでる
駅弁の蓋からつづく戦中派
駅弁は一つで足りるフルムーン
駅弁の骨が刺さった一人旅

爽 介 恭 太 恵 美 子 い さ む 幸 生 醉 々 滋 雀 三 男 恭 太 雀 踊 子 醉 々 秀 果 浩 一 郎 雀 踊 子 千 代 三 千 梢 泰 子 良 行 三 男 秀 果 山 久 健 司 山 久 冬 葉 柳 伸 恭 太



各地柳壇賞の表彰を受ける

本間満津子さん
右は兄島与呂志氏

ハネムーン先ず駅弁に走らされ
駅弁へ夫走らすフルムーン
駅弁は後に回して栓を抜く
駅弁を隅からつづく一人旅
駅弁の梅干しにある負け戦
駅弁の中味段々痩せてくる
釜めしへホームを駆けていく幹事
駅弁に安らぎがある一人旅
駅弁もおもしろかったと北の旅
駅弁を聞くとき話こぼれだす
駅弁うましスケッチ帳に実りあり
万歳のかげで駅弁差し入れる
駅弁へ手錠の重い護送犯
駅弁を紳士の顔が買いそびれ
駅弁にその地其の地の顔がある

千 万 子 寿 翠 公 た づ 子 岳 人 帆 船 幸 生 郁 榮 笛 生 道 子 い さ む 律 子 滋 雀 幸 生 健 司 勝 美

兼題「波」

内海 幸生 選

時刻表この駅弁で昼にする
駅ごとに駅弁があり情けあり
駅弁にお茶忘れない母が居る
駅弁のやさしさに会う独り旅
鱈すしを手につけての日本海
旅はひとりの駅弁の紅生薑
駅弁の手を止め車窓陽が沈む
駅弁もつらい別れを知っている
駅弁へ故郷の風が近くなる
夫婦ではない駅弁を二つ買う
駅弁の箸が重たい都落ち

人生の波かも男賭けて見る
玉碎の島波のりのハイティン
魔船へ波は静かに打ち寄せる
灯台守今日は眠れぬ波の音
女曰く波の音をきいてますの
飛びこみの目に荒い波ちさい波
心電図ゆつくりえがく春の波
中心は静かになっている波紋
春の波女ざかりを掻きむしる
人間の馬鹿さを笑う波の私語
金山の哀話を佐渡の波に聞く
先頭を歩き波風もろに受け
オホーツクの波怒り節しか知らず
激情を抑えかねる波である
妻の名を捨てる女が越える浪
潮満ちて母の世帯が米洗う

幸 生 健 司 冬 葉 夕 花 み つ 子 爽 介 萬 的 寿 雀 踊 子 恵 美 子 た つ お 操 子 恭 太 和 子 弥 生 栗 鬼 遊 絹 子 柳 宏 子 秀 果 白 光 子 吸 江 楓 楽 は つ 絵 帆 船 勝 一 麦

人波に逆らう歩幅大きくす
情報の波に漂う男たち

波の私語島の女も海へ出る

あまいな笑いを防波堤とする

波越えて孤児の哀しみ寄せてくる

テトラポットどけどけと波が吠え

波頭切つて男の意地があり

男波より女波が恐い市民権

海女の恋波に揺られて物思い

海峡の波はおしやべりが過ぎる

破け散る怒濤自殺をやめにする

クライマックス波の音が遠くなる

旗降ろす日も故里の波の音

波超えて波の怖さを知っている

母だけで波除けられぬ中学生

横波に憎しみがある夜の海

まだ胸に未練が残る波の音

絵葉書の波の高さを裏切れぬ

海捨てた男が聞いた波の音

潮どきがあると知らぬ波の上

日本海金波銀波の陽が上る

波の背に乗る道行きのめおと雛

引き潮の見事女を置き去りに

波の音青木繁の絵の中に

波一つまた一つ越すわらべ唄

兼題「摘み草」 宮西弥生選

水客

天笑

笛生

楓楽

郁榮

あいき

反省

鬼遊

覚然坊

白兎

寿

和子

吐来

吐来

与呂志

健司

雀踊子

岳人

紫香

吐来

栗

酔々

寿

恵美子

幸生

絹子

浩一郎

摘み草が翺べぬ女を慰める

クロバー摘むと希望の鐘が鳴る

過去形で書く摘み草に母がいる

摘み草で過疎をたのしむ風の中

摘み草の男は忘れられている

つくしの子すくすく自閉症はない

摘み草の腰をのせば揚雲雀

摘み草に科学する子も混つて

草を摘む太郎と花子になって摘む

腰痛い年齢ばかりが草を摘む

つみ草にきつく当っている悩み

摘み草がとっても好きな人嫌い

摘み草に積木くずしをふと思ひ

摘み草のだれも明日を考へぬ

もう一人生もうと思つて摘む

摘み草の紅野仏と分ち合う

摘み草の匂い絵本の中にある

地球儀に摘み草の場が狭ますぎる

摘み草に遠い記憶がつかぬ

スミレ摘む少女飛行雲となる

摘み草の故郷に水車の音がある

いとしきについ摘みましたすみれ草

ボク山に摘む草があり風葬よ

摘み草の土手を転げる夏蜜柑

聞き役にまわる風あり土筆つむ

摘み草を持つと聞こえるわらべ唄

摘み草に夢になった水たまり

摘み草に行つた花子が帰らない

翠公

柳伸

いさむ

和友

与呂志

絹子

栗

ひで

度

求芽

千子

武雄

和友

智子

爽介

寿馬

酔々

規不風

雀踊子

花梢

雀踊子

あいき

白兎

秀果

水客

柳伸

健司

萬勝

摘み草に飽いたら蝶を追いはじめ

じわじわと効いてきました除草剤

摘み草へ重い図鑑を持ち歩く

摘み草の少女が春の絵の中に

摘み草がいつか合唱隊となり

草を摘む親子をすこし誤解する

レンゲ繋いで少女は愛を受け入れる

摘み草に都会育ちの子を誘う

れんげ摘みまじし大和に昔のままの風

摘み草をする手に凶器握らせぬ

摘み草の頃の仲間がライバルに

兼題「お互い」 磯野いさむ選

お互いに腹さぐり合う兜町

お互いに春の切符を買っている

お互いに飯面をつけてもつれあい

馬の足前と後に徹し切り

もみ消しへ互いにかばい合う手錠

梳るたが互いの旅をかばい合う

お互いの腹芸土壇場でばれる

お互いの核が気になりつつ平和

開病のお互い励まし合いながら

神様が互いの嘘を見抜かれて

フルムーンもうお互いを底い合う

同宿と知る丹前の土産店

加害者のくらしも思う示談金

貸し借りは互いにある真珠婚

お互いに我慢忘れた家裁

ヤジロベエお互い弱い人間で

紫香

寿

英子

雀踊子

幸太郎

健司

寿

恵美子

萬の

英子

弥生

みつる

寿子

凡子

滋雀

律子

太茂津

蕉露

天笑

笛生

冬葉

智子

一麦

たつお

勝

柳伸

重人

お互いに苦手にが手のあるさだめ
 お互いにしし喰つて来た旅仲間
 お互いに旬のものなど届く距離
 お互いに潤れたいずみを無駄に汲み
 お互いに知れては困る額の裏
 お互いに一言多くすきま風
 お互いに海千山千だと思ふ
 言ひ分はお互いにある共犯者
 お互いに同じ傷なら見せもする
 お互いに吉田茂の話題もつ
 お互いに地球の上に住んでいる
 お互いの皺にがまんの色を見る
 異越同舟手のうちは見せられぬ
 お互いの心が通う糸電話
 お互いの出世に邪魔な美女がいる
 お互いに堪忍袋満パイで
 お互いに死角で出した赤い舌
 お互いに親はなくとも結ばれる
 お互いに大人の恋として別れ
 五十と四十過去は問わずに結ばれる
 おたがいを信じ軍手の穴を干す
 お互いを信じ貧しき道をゆく
 百人と握手お互いたてまえで
 お互いに名刺の裏をよんでいる
 お互いが童貞でない処女でない
 かばい合う二人と知っていた判事
 みとめ合いながら互いにかけるワナ

勝美 射月芳 はつ絵 度 節子 千万里 恒明 鬼遊 久子 恵美子 健司 みつ子 白兔 たず子 萬葉 英子 楓葉 覚然坊 形水 恭太 秀果 千代三 アキラ 春江 寿 萬葉 いさむ

旅人の舌へ地酒の夜がくる
 その土地の心も描いて来た画囊
 旅人の郵便貯金の額ふえる
 旅人へ帰心が動く除夜の鐘
 旅人の背をたたくは風ばかり
 旅人として木蓮の寺に寄る
 無人駅自分をみつめ降りた旅
 旅人を悲しくさせるお立酒
 旅人の顔にしてゆく時刻表
 旅人は関西なまりの人とだけ
 旅人の背が絵になる冬木立
 旅人となる一枚の切符買つ
 旅人に見せてはならぬタムの底
 ふつうの娘になりたく北の旅選ぶ
 旅人に情けはいらぬ雨おんな
 宿下駄で旅人ひとり帰らない
 この人とならば歩幅の揃う旅
 キヤラパンの旅はラクタの背で眠り
 旅人よ風にたすくことなけれ
 生々流転われ浮草としての旅
 華やかな旅人となるブッシュマン
 旅に出て妻の白髪がよく目立ち
 旅人に無駄な握手をする候補
 旅人の里旅人の子を育て
 旅人よ素朴に踊れ郡上節
 旅人は胸に位牌を抱いている
 バスポート三十階でねる不安
 旅人から来た絵ハカキは秋の彩
 旅人にここも選挙の宣伝車

緑良 どんたく 敏 潮花 水客 酔々 滋雀 郁榮 幸生 笛生 小雅子 雀踊子 英子 萬的 柳伸 太茂津 吸江 白光子 岳人 二三 寿美 柳宏子 射月芳 英子 節子 帆船 千万子 千万子 一麦

旅人へ母の匂いの日吉館
 拓本をとる旅人に春が冷え
 クーボンの旅のひとりの考古学
 旅人に美人ばかりの国がある
 旅人が残していった辞世の句
 怪しからん旅人になる春の夢
 旅先で苦勞語はよしましう
 旅人に親しみを待つ車井戸
 旅人に今日発売の週刊紙
 旅人が風の匂いを手記にする
 旅人となつても習慣守る朝
 旅人のころでのお箸頂かれ
 道連れになつた出合いの妻竜宿
 旅人に物を書かせる強い雨
 常識を詰めた袍で旅続く
 花道を行く旅人の速い足
 旅人に少しいるかは馴れすぎる
 名乗らない女が旅の連れになる
 きぬぎぬの朝となつた旅の人
 祝電拜受―日本川柳協会・番傘川柳本社・
 電波新聞社(永田新登・白百合川柳会・川柳
 塔松江・高知川柳社・寝屋川川柳会・川柳塔
 唐津・新宮吟社一同・西宮北口川柳会・東野
 大八・藤村重純・酒井路也・前田美己代・河
 村日満・岡村久志良・尼緑之助・藤井明朗・
 堀江正朗・芳子・嘉数兆代賀・八木千代・樹
 みどり・大矢十郎・林瑞枝・小野克枝・久家
 代仕男・山根峰雪・石垣花子・赤川菊野・柳
 原秀子
 (清記・楓葉)

和子 いさむ 一麦 重人 和子 武雄 千万子 千代三 萬葉 悦郎 綾珠 左久良 右近 晴風 鎮彦 爽介 栞勝

老也柳壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。

(整理・香川醉々)

川柳塔まつえ

恒松 叮紅報

スピーチの内容さすが苦勞人
スピーチの長さ破局は句わせぬ
スピーチの裏で眼鏡を拭いた父
蓄ふくらむと掏摸の目生きてくる
蓄がかたいが日程変えられず
暖冬の蓄あわてるもどり寒
演出はわが家のタクト妻が振る
演出家するどく人の機微をつく
天皇の演出帽子を振って足り
風見鶏の背に角影という演出家
指切りの感触故郷のワラベ唄
指先が器用で暮らしに落ちつけず
節くれた指勲章を欲しがらぬ
ひまあれば指に体操させておく
働いた指です母の太い指
落ちこぼれ底う教師の優しい目
底うから正義のペンに暴かれる
底い合いながら年輪かみしめる
寒さ底う牡丹の菰にある風情
左手で右手を底う愛もある

舞 登美也 芳 枝 孤呂二 鶴 丸 与根一 きみえ 満江 軒太楼 通 兎 愚 童 正 朗 多 賀 子 三 和 寿美子 みどり 由 郎 芳 子 秀 子 叮 紅

山長川柳会

那須 鎮彦報

古里の話がはずむ飲み仲間
卒業式まずは恩師の墓まいり
大空を流れる雲は何想う
曲り道粉雪ちらり恋の華
グランドの交じわるの中に輪が出来る
ユニホーム着て強そうなツラがまえ
まだ若い母の白髪が目立つなり
ふところがよくなり喧嘩したくなり
百七つぼん悩一つ残るなり
頑固者一歩たりとも引きはせぬ
尻が痛い泣く父さんが可哀そう
おひなさまパパと一緒に寝ています
苦勞したねと夫のやさしい眼
いかにもおいしいセロリをひとかぶり
宍道湖のうみに一隻しじみ採り
悲しさを一つ残した除夜の鐘
松の間に西陽を浴びてしのぶ妻
小便が風に負けてるふがいなさ
川柳大阪 田中 笑風報
やとこさ覚えた演歌もつすたれ
賽銭の幾倍程の願いかけ
七彩のはずれで描く老いの虹
高齢化社会へ大きくなる活字
健康のため寒風の中歩いてる
はは染めて五十女の歩気談
抜け出した髪を吹雪がさらつて
新薬の即効性にある不安
流行におくれないぞと風邪を引き
正直に言ったところが消えた記事
まめに出了た鬼よ寒さに風邪引くな

真由美 一 美 治 代 山口 忠 和 子 嘉 道 安 弘 朝 雄 久 弥 真 琴 恵 子 昇 桂 守 保 治 鎮 彦 鎮 雅 集 和 世 貴 麿 君 枝 德 松 みつる 司 花 醉 司 比呂志 比呂志 キミ

人間像覗いて金は手を離れ
木枯しよ下戸の寒さが判るかい
反骨のまだ書き残しある余白
聴診器痛む急所で立ち止り
腹芸の腹を心配してる妻
霜踏んだ靴にフアイトの声を聞く
責任の重さスシンと肩にのる
喉元で怒り押さえてる拳
嫁ぐ日の心理を日記に刻んどく
挫折した心理に友情温かい
親と子の心理一つに對話する
大物は人の心理をうまく聞き
喉元が過ぎてそれからが勝負
喉元へ迫る刃は待ったなし
川柳後楽 井上柳五郎報
久し振リ鍛を握ってまめが出る
久し振リですなと無心になつて来る
久し振リ昔の味にめぐり逢い
久し振りに出会うマドンナ白い髪
演出の人が影絵にポーズつけ
親馬鹿が影絵のようにつきまとい
恥ずかしい影絵に映る今日の嘘
先代の影絵が生きたる古のれん
雄大な眺めに腰がしゃんと伸び
雄大な足跡顕彰碑が語り
雄大な理想を都会の灯に消され
渡り鳥彼岸を境に北南
お彼岸のお供え電話でももらい
彼岸から絵具も明るい色となり
川柳化粧槽 植村客遊子報
両替機札の表裏を知っている
紅 月

蜀詩牙 重 人 与呂志 喜 醉 笑 風 洛 醉 眉 水 道 子 鉄 心 二 天 坊 嘉 孝 天 平 本 蔭 樺 秋 夫 和 月 青 銅 草 風 博 友 玉 水 恒 洋 柳 五 郎 隆 佐 加 恵 哲 郎 元 一 一 照 路 紅 月

表から見れば分らぬ左前庭のある住居夢見て団地の灯人生の表動章ばかり見え長続きする友情に欲がない女房がことわり僕が表書く庭の梅数鶯のたまの宿百薬の長を医者が飲まさない手鏡に表も裏も写して見大漁旗風雪に耐え帰ってき居酒屋のいつもの席にあるぬくみ禁解かれ飲む一杯のうまい酒出稼ぎへ雪掻き妻の仕事とし酔いざめの水にうつりし母の愛脱衣籠さらの下着が入れてあり

菜の花句会

高杉

鬼遊報

秋月 岳詩 越山 実男 永樂 大鷹 白李 礎石 悲子 伊江坊 秋信 客遊子 美乙女 美つる シマ子 昭子 勝美 優 右近 綾珠 喜風 幸生 三男 柳伸 春蘭 弥生 凡九郎 冬葉

お水とり済むと春だというせりふ
パチンコの釘と不仲で負けつけ
歯こたえのあるこんにやくがある大和
人事課のリストに首が載せてある
パチンコ屋出るまでおかずがきまらない
生れつき葱で主役になれませぬ

酔々 頂留子 雀踊子 射月芳 度 鬼遊

よろこびの言葉

57年度各地柳壇賞

本間 満津子



情報は耳からだけの生活でございいますので、こんな句が出来ました。思いが

けませず結構な賞を戴くことが出来まして有難うございます。

このような仕合せは、あの人もあの人も居てと、感謝の気もちでいっぱいでございます。いつも援け励まし見守って下さる方々が我がこのように喜んで下さいますので、日頃のご恩の万分の一でもお返しさせていただいたのではないかと存じまして嬉しゅうございます。ほんとうに有難うございました。

パチンコに燃えて目覚める職がない仕事場に僕の首桶おいてある叱るのに長いせりふとなりけり葱坊主今日は陸軍記念日だ敵坊の首を洗えば白髪なり

うみなり川柳会 小林由多香報

悦郎 柳宏子 蕉風 蕉露

反対のための反対何がある父ひとり反対家の風かわき反対の反対持論など持たず何事そ議長が反対派に回り雄びなの運命決める鑑別士正月もすまぬに雛のコマーシャル餌となる運命は知らず雛の声茶柱に今日の縁起をかつく朝眠れない夜を不吉な胸さわぎジンスクスをかつぎ今年の運だめし突張りの人生ジンスクスなど持たぬ茶柱の立った日ジンスクス信じよう寝ころんだままでお帰りの倦怠期七転びころび転んで角がとれ村議選血の濃いさから転はせる転んでは起き人生の旅はるか転がった一円銭には見えてくれず宝くじもしやの夢をかけて買う病床でかなわぬ夢を抱きつつ桜咲く夢見疲れた北の海地球儀を回せば夢に涯が無い踏絵踏み夢も見ないですむ平和

川柳たけはら

森井

舊居報

オニはそとるみかオニになりましたまえまわりてつぼうだいすきよ

五成はるみ 五成あきみ

インヘーゲームつてふしきなおもしろさ小一 方昭
 いもうとのオニはわらってにけました 小二 純平
 ふじ山はいつも頭に雪がある 小三 美保
 雪のなす正月すこし物たらず 小三 重貴子
 新学期みんなささない休みばけ 小五 恵子
 駄目だった作りたかった雪だるま 小五 千恵子
 潮風が呼んでる明日は魚つり 小五 仁昭
 土曜日の晩息抜きのテレビ見る 中一 紀
 女子だけのバレンタインも楽しみ 高一 愛
 北風をまともに絵になるはおかむり 静水
 嫁ぐ娘に教え足りないことばかり 房夫
 王将の死角で歩と歩にらみ合い 節夫
 慶弔の父の代理が増えてくる 蘭幸
 自己嫌悪やさしい言葉避けている 令子
 絵になりたくて降って来た春の雪 鈍舟
 人恋し裏町の灯が温かい 秀水
 春は確かに手のひらの陽の温み 笑子
 雪が舞うこたつではかどる毛糸針 淑子
 たらふくと食べてつめのだけをほめ 比呂子
 満点でないから親しみ湧いてくる 一路
 父としてトッパにはのぼる縄梯子 菁居
 ライバルにだけはゆずれぬものがあり 貞子
 難聴へ風がささやく春風が シゲコ
川柳翠洋会 **山根いつを報**
 減る日は甘い空気を吸いに出る 泰子
 花の縁皇太子さん先導で 綾子
 信心の古い坂道を助け合い 兼治郎
 浮き上る海水が吸いきる胸一杯 風童
 荷を曳いてナニワの坂で今に見ろ いつを
 本堂から読経降り来る坂参道 素秋
 坂道を越せば菜の花見えそう みつ子

坂道のロマン霧笛を遠くする
 豆腐屋のラッパが響く記憶の隅
大原川柳会 **白岩 文衛報**
 給料日財布ヘラヘラ笑うてる
 春一番財布の中もひとあはれ
 母へみな財布あすけて山の父
 娘のくれた財布へ春がつめてある
 時代の差しみじみ思う亡母おもう
 その差ぐらい流れる汗で埋めておく
 出るところへ出て学差につき当り
 差をつけた隣りの屋根の鬼がわら
 評点をつけたねば教師生根られず
 風見鶏こんどはどこの風に向く
 還暦へ耳から枯れてくる私
 花作りあれこれ土に話しかけ
 バス待つ間歩けば小さな春に会う
 夢二の絵かけて老母も若ういる
 手や足を撫でて湯舟に生きる欲
 笑い合うだけで夫婦の話すむ
 耐えること時には馬鹿の顔になる
 孫の顔見れば財布が口あける
 この財布打出の小鎚ではないぞ
 月末の財布が僕を睨みつけ
 貧乏神が僕の財布にしがみつ
 買ってから財布の私語が耳につき
 二次会へ誘う財布を別に持ち
 春財布贈る心に賭けをして
南海電鉄川柳部 **広井すえお報**
 新空港まらぬままに又選挙
 新空港国際平和都市にする
 新空港大阪市民に遠い足
 景子
 酔々
 巴子
 敏子
 みさえ
 たけよ
 春子
 正巳
 寛平
 文恵
 美代子
 朝代
 辰江
 やよい
 寿恵子
 はるみ
 耕花
 理恵
 正子
 妻子
 いちむ
 克巳
 元江
 天信
 美佐子
 信江
 東雲
 雅風

新空港喜ぶひとの村八分
 新空港会社こそって期待をし
 新空港出て長者が又ふえる
 子約などもつてのほかどことわれ
 子約までしたのに欠航いたします
 子約席揃いの弁当置いてある
 墓地を買い子約夫婦に秋の風
 乗り越してワマンカンカーは知らぬ顔
 ワマンカンカーいつかりと乗過ぎる
 ワマンカンカーの声は事務的に
 親切なワマンカンカーは待つてくれ
 気の毒な思ふ時ありワマンカンカー
 ワマンカンカーの女性に助けられ
 子約して来て待たされる美容院
 政党がヤンヤと騒ぐ新空港
南大阪川柳会 **中川 滋雀報**
 相性がいいとは許し合うころ
 線らしい相性を持つやしろべえ
 良縁に相性だけがひつかり
 相性は気にせなんだモンベ妻
 素晴らしい相性子には恵まれず
 相性が良くても好きにはなれぬ人
 相性はどうあれこの手離さない
 タデ喰う虫もと言う相性かも知れぬ
 勢いをためて一揆の旗にする
 紅一点男の視線はねかえす
 勢いが余つて本音すべらせる
 酔った勢いで鬼の首取つて来る
 勢いをそがれてからは続くすれ
 勢いに心を配る花鉢
 思いみな言ういきおいを酒に借る
 凡次
 圭子
 とし
 山久
 圭水
 すえ
 悦郎
 春蘭
 百梅
 恒珠
 勝明
 花仔
 遊川
 儀一
 美房
 浩一郎
 智信
 善信
 喜風
 頂留子
 雅風
 凡九郎
 雀踊子
 醉々
 勝々
 千梢
 綾珠
 洋子
 一二三

神妙な顔で叱言は聞いてない
 足元の罫に気付かぬ上の空
 悲しさがあれだけわかる上の空
 上の空の空ある方へ肩を入れ
 風花を顔にデートの上の空
 レター来てそれから入試上の空
 上の空少女は恋して恋に酔う
 身に余る衣でエビ天かしこまり
 甘えびに誘われ越路の雪を踏む
 伊勢えびのひげは大事に扱われ
 簞竹の易者の似合うえびのひげ
 欲得を捨てると惜しいものがない
 惜敗の涙は明日に賭けている
 拾円が足りなくなった赤電話
 過ぎてしまえば惜しい事はかり想う
 一番違い惜しい所で選にもれ
 ハワイ川柳ウイロー社 市岡
 亡き父に似た禿具合年五十
 禿隠す髪に白髪北叟笑み
 あの人も年齢には勝てぬ頭はけ
 照れ乍ら禿げた頭の汗をふく
 にんまりと笑って禿げた頭なで
 久し振りに挨拶よりも禿ながめ
 気をつけて手入れする程禿がふえ
 クラス会互の禿を笑い合い
 社長級禿げた頭で回り椅子
 若禿は親父ゆずりと恨み言
 禿頭撫でて我が年繰ってみる
 見つめてる顔ではなくて禿頭
 挨拶はこんなに禿けたと笑って
 禿頭撫でる手付きも味が出来

滋 雀 文 秋 鎮 彦 儀 郎 覺 然 坊 壽 美 柳 宏 子 弘 生 蘭 慶 三 楓 樂 千 代 三 柳 仲 節 子 春 蘭 妙 子 黃 塵 玉 泉 歌 子 女 健 著 生 梨花 女 万 里 步 天 心 嗣 榮 拜 山 千 代 女 沙 京 十 吉

禿と金二つ光らず楽隠居
 光頭に貫禄ついて押しがきき
 禿げてるが心地良い靴今日も履き
 禿けたなあ互いに見比へ苦笑する
 貫禄が出来たと禿も賞められる
 禿薬良かれ悪しかれ買ひ求め
 悪人はないと禿頭自画自讃
 噫無情かした禿を風あばき
 禿かくす気持ちには櫛に念を入れ
 一本も粗末に出来ぬ禿頭
 禿具合番付つくって張る虚勢
 公害余剰山までも禿にする
 川柳ねやわ 高田
 財産に近所の人情加えとく
 空間と時間がクロスして僕
 天井へ届いてうれし肩車
 旅カバン現金そつと嫁優し
 日本海を湖にする恐ろしさ
 込み入った話天井低い部屋
 正論に違ひはないが角がある
 子の育ち天井低く見えてくる
 歯の痛い鬼義理人情を考へる
 水増しの軍費天井無い怖さ
 ふる里で母の手づくりある夜長
 風花へ湯豆腐にする市場籠
 ふと鬼がうつる或日の三面鏡
 定年でゆつくり鬼の面を脱ぐ
 天国へ片道切符だけ貯金
 天井から民話が聞こえて来る魔家
 天井を土足が通る文化住宅
 おみくじを結んで春が楚楚と来る

三十四 高 原 子 虹 宵 張 賀 紅 溪 公 女 雪 女 カロ 女 香 夢 秀 山 三 石 晚 舟 柳 步 垂 純 か す み 真 砂 光 夫 鉦 平 光 子 満 津 子 英 王 子 晴 風 山 久 シマ 子 右 近 一 途 亜 也 子 琴 音 あ い き 冬 葉

黙っているとだんだん枯木になってくる
 止ったらずしすねての夫婦独楽
 偽つた哀れ中流アルジョアジ
 岸和田川柳会 植 山 武 助 報
 大海へ心の悩み捨てにくる
 出店の灯消えて目刺しの香が残る
 振袖を着るからコンタクトにしよう
 燃えつきたフアイト男に悔いはない
 フアイトで行けと再婚子が乗気
 又言葉一つ覚えて孫婦る
 おとつちゃんの中を捜すパチンコ屋
 ふるさとを出る背に母の眼が痛い
 心ない言葉を背中て聞く落日
 言葉継ぐ子の頼母しい広い背
 さよ子
 万引きの客にも開く自動ドア
 札束の強さに真実崩れそう
 吉報へ入歯が落ちるほど笑い
 亡母の声聞こえ掃除機とめてみる
 ほろ酔いの契り重たくなつてくる
 爪楊子くわえた口から嘘が洩れ
 おしゃべりが喋らぬから不気味
 下心ありそうあくびばかりして
 勲章をつけると馬に乗りたがり
 冬の絵を見てから咳が止まらない
 弥 生 射 月 芳 生 健 一 丸 子 幽 谷 布 堂 静 子 堂 子 水 香 紫 風 薫 照 江 幸 代 佳 生 武 助 由 高 武 助 幸 子 ひ で

佳句地10選 (前月号から)

田 中 笑 風 選

金さんは背中の桜見せて幕

過去秘めたわびしい老いの背の墨

母さんの背中の味も知らず孤児

回り椅子背中に敵の目を感じ

修羅に耐え居る母の丸い背

生き抜いた苦勞を語る父の背

過疎守る母の背が丸くなる

勝山双葉川柳會

言いつつとりの闇を深くする

絶対よゲンマンする子の瞳がきれい

もう来ないひとの湯呑みが棚にある

忘れないう日の夕焼空の色

一人ずつ見れば大差は無いんだが

女ひとり風の強さに背を向ける

ふりむかずひとりで渡る丸木橋

子の闘病支える級友たちがいる

絶対に出けぬ片道切符もつ

絶対という字は自分にだけ使う

絶対を押してはならぬ核ボタン

支え合う絆を愛ということに

ひとり言他人に聞かれた恥ずかしさ

置いてひとりでなかったと気付く

想い出を秘めた湯呑みが捨てられず

待ち合せのひとりが来ない気のあせり

京都塔の会

松川

杜的報

杜的

世界人

ゆるる

春 榮

射月芳

甘 平

白光子

操 子

節子報

楓 楽

頂留子

柳 伸

智 慧

秋 子

千 里

好 子

洋 子

寿 美

芙佐女

喜美子

智 子

藤 子

ハル子

田鶴子

妙 子

節 子

杜的報

杜的

求 芽

芳 子

紫 香

涙のあと消してコンバクトを閉じる

信じきる鉄にまかせ晴着裁つ

忘却のきれ間きれ間に陽が当る

煮こりの好きな女の国訛り

明日にでも行くぞ狙いは別にあり

群千鳥夕日をうけて海渡る

餌をやって孤独を鳥に救われる

巢立ちした雛の温みが手に残る

書道塾雑巾筆ふく役もする

雑巾をまだ前一生汚れ役

雑巾をまだまだ達者な祖母が縫う

薄水バリバリ踏んで朝の道

残り火の無口な女の薄水

左遷地の寒さに馴れた薄水

薄水きのうの梅は散ったまま

川柳しんぐう

腕白を覚悟亥年に男の子

退くことを知らぬ亥の子は親ゆすり

亥の年へ抱負は老いを忘れさせ

我が家では亥も子も酉も嫁いいこ

いのしの勢い借りたい片想い

迷ってる客に予算を聞く採み手

お役所の予算はきつちり割り切れる

予算まだ少し残ってお茶を飲む

予算など立たぬ日銭で春を待つ

膝に手を置いて時から予算消え

黒潮に妥協の文字はない流れ

黒潮へ夕陽が落ちてゆく平和

黒潮に懸けて肩書欲しがらぬ

黒潮にひかれてリターン海育ち

美 穂

明 代

孝 江

紅 陽

水 客

笛 珠

飛 鳥

春 江

巨 詩

麗 水

白 李

三 求

和 友

白 漢

潮 花

川 上

溪水報

ふ 太

勇 太

すみれ

八千代

富 子

三千代

与呂志

三 男

司 郎

大 輪

雀 踊

英 子

昌 子

訪ね行く丁度昼時遠回り

後一分丁度校しやのまがり角

ラーメン屋上度きたのに通り過ぎ

四捨五入すれば丁度になる予算

ゆきたけも丁度で母の形見分け

吉川柳會

語らない過去伝説の人とする

語らねど互いにわかる血の絆

老う母の昔を語る時無邪気

語りつく民話少しずつ曲がる

耶馬川の謎をハニワの目語る

囲炉裏火を焚けば母の言う自在鉤

長々と語らせ腹は決めている

語るのは止めてしばらく傍観者

痴話喧嘩語るに落ちることばかり

髪黒く初声高く生れ出る

昔々髪は女のいのちとも

髪染めてバリツとしてよと孫は言う

惜しい髪今日も枕についている

二度までも結って嫁いだ高島田

大卒もいてバチンコ屋ようはやり

仏壇にやつと卒業させました

東大を出るとたいいらな道があり

農をつぐ子の卒業が嬉しい日

懸命に余白を生きる老いの惑

暖冬で高い油が余りだし

余人就職の門狭くする

二日酔昨夜の余韻付けが来る

つらの皮余って皺の顔淋し

人生の余白は趣味ときめて老い

正 樹 生

小四ひろし

十 郎

青 柳

律 風

紫 泉

秋 女

石花菜

独 歩

弘 朗

さ と る

壽 満 湖

菩 句

真 山

康 子

か つ み

観 洋

笑 王

民 子

と め 子

し づ 江

御 前

秋 水

碧 人

寿 朗

松 女

千 秋

無精髭老母も生やしてよく喋り
ひげ面をこすりあやして尚泣かれ
三年目女房子が出来髭も出来

Y・F・C川柳会

人見

翠記報

又一つ齡を重ねて初鏡

絹子

丹念に賀状見直す五日過ぎ

よし津

初詣で先ずは鎮守の神様に

翠記

柳友の賀状手描きの温かさ

たず子

こわいほど静かなビルの三ヶ日

節子

戦友の家族に遭った初詣で

忍

松の内浄机筆硯ありどころ

幸太郎

初恋の今では賀状の友となる

房子

元旦や我れ泰山の如く座す

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

雅号ぶっちゃけばなし

(208)

たけお



若宮武雄

わかみや

美谷上好きな御餅も断つ若さ
のんべえも鏡開きは食うしるこ
正月の神は酒より餅が好き
餅粥に母の味みる里帰り
鏡餅処分に困る餅離れ
確実に育つ子がいる稚煮餅
冷蔵庫小出しにされている小餅
餅つきを親も楽しむ保育園
三方はおまけバックの鏡餅
紅一点七福神に彩添える
七福神不沈空母に背を向ける
七福神めぐりすまして心足る
船に乗り集団出稼ぎ七福神
七福神喧嘩する日もあるだろう

あいき
律子
滋啓
弥山人
千代子
湖風
かずを
白屯
文秋
喜風
度
綾京
良京
雀踊子

ある日、川柳の「せ」も知らない私
に、当時は余り親しくなかった太茂津
さんから「同封の句箋に何かを書いて送り返せ」とい
う封書が届いたのである。その強引さへ「そのうちに
やめたるぞ」という反撥(?)もあつたから、当時
は雅号なんて考えてみることもなかった。

それが不思議と、三年、五年と川柳を続けているう
ちに、やはり人並に雅号をもつてみたいと思つと何処
かで「今更、雅号をつけんならんはどの川柳家なのか」
と言う声があるのである。以上は、いまだに実名を雅
号にしている無精弁解の辞でもある。
しかし、その十一年余り経った今、川柳での「武雄」
は、一般社会の中の若宮武雄とは、何んとなく違った
響きをもってきた、と自負している。

七福神が部屋の空気を春にする
我が家には六男一女の七福神
キヤバレーで名刺渡しした身の不覚
肩書が取れて名刺もほつとする
独立の名刺男に燃えるもの

富田林富柳会

藤田

泰子報

綿帽子相手好みに染ります
待つ方も相手信じているホーム
目にもえぬ相手にいつも果し状
千人針作る時代が来ぬように
相手罵って冬の風に逢う
黄電話百田分のラブコール
電話口でだんだん逢いたい人となる
話中むこうも掛けていた電話
ベテン師の電話きれいな音で鳴る
赤電話途中で切れたまま別れ
いつまでも若くないよと針の穴
図太さが針の筵に座つてる
この世でも地獄極楽針の山
針刺せば空気が洩れそうな兎のほつぺ
すかたせん女毒針持っていた

にた川柳会

西村

早苗報

助けてと深夜飛び込む交番所
モーターも満員御礼春うらら
霧開気へ話すチャンスを見失い
何もせず今日も暮れたか掘炬燵
不況など知らぬ母娘の晴着摸る
風呂で歌えば万更でないしやがれ声
灯が一つむかえ深夜の無人駅
酔うても心は鍵は外さない
骨のない人間が押すめくら判

悦郎
柳宏子
慶三
三四
信治
美緒
維久子
岳人
慶子
泰子
花梢
美佐子
美代
天笑
正信
和弘
為之助
きぬ
柳太
登美也
独仙
孝華
龜甲
多賀子
幸一
花子
きみえ
栄

料亭はひま止り木に風憩う
相傘の腰から下も添うている
二月二十日今年もシヤネルの花リボン
平凡に生きている目覚し明日へ巻く
黄の旗にきれる程に春あらし
待つだけの女に春が早すぎる
身に余る光榮なぞと嘘を言い
生唾を飲んで鍵穴のぞきこみ
悲しみの解る羅漢の目と出逢う
素顔だったので気がつかず

堺川柳会

河内

天笑報

何事もプラスにしているバイタリティ
旅先の樹氷に過去がよみがえる
春らしい日さしに人はさからわず
ワンマンと言われ会社を守り抜き
当然のような顔して取るチップ
人間と樹氷が対話する蔵王
ほんのりと酒がプラスの花の下
健康体プラス美貌であつたなら
プラスだけ信じてつづける冬の花
冬の罪消して樹氷は輝きぬ
樹氷折る音鮮やかに未成年
樹氷から一つのロマン甦える
白鳥の湖へ演技をする樹氷
やわらかな日ざし三月春はそこ
春の芽が樹氷とてれこに顔を出し
新入社春の日ざしも暖かく
ふる里を捨てた男にある樹氷
年金は老後へプラス愚痴言わぬ
当然が理屈に合わぬ時もある
独身のプラスそろそろこのかたり

夢 裕 酔 景 子 三 和 寿 美 子 弘 朗 雄 々 雀 踊 子 早 苗 金 太 伸 子 与 呂 志 美 乙 女 邦 晴 甘 平 花 仔 キ ミ 柳 伸 素 成 夢 葉 冬 園 育 蘭 春 馬 静 金 三 郎 山 久 幸 太 郎 墮 駄

遠回りしたから逢えた温い風
早寝して明日の生活へプラスする
ガキ大将と仲良しになりプラスかも
暴君も東北弁を持て余し
暴君が不発爆弾持ち帰る
暴君の破れた太鼓をまだ鳴らし
暴君は回転椅子で物足らず
暴君に苦手な女ひとり居る
暴君もある日無常をふと感じ
北国のなまけを樹氷からもらう
炭焼きのけむり見つめている樹氷
暴君はおしやれな髭を持っている
愛妾の目には暴君頼母しい
暴君が女の爪を切っている
駒つなぎ川柳会
計算はきつちり出来てある度胸
B面がひとり歩き出す人氣
嫌われた言葉の口にする熱意
氷雨降る弔辞はきれいだばかり
集団を抜けて度胸とめぐるあう
熱意だけでは無理だととる四浪目
セールの熱意信じぬことにする
先生の熱意父兄も折れて来る
口下手の熱意的を突いてくる
人氣だけはあがるサッパリタイガース
又一つ明日香の人氣連子窓
銅像は空を睨んでブーム去る
人氣出て売れて友達減ってゆき
税務署に目をつけられている人氣
風の連れてきた人氣風と共に去り
先はしる人氣に芸のもつれ足

笑 痴 月 子 東 雲 千 万 子 鈴 代 紀 美 女 喜 醉 元 紀 夢 遊 逸 郎 天 笑 柳 宏 子 薰 風 天 笑 醉 々 雀 踊 子 史 好 美 房 雅 潔 萬 樂 律 子 萬 的 善 信 弘 生 柳 宏 子 浩 一 郎 頂 留 子

人氣がほしい人氣がほしいと唄います
無造作に掴んでおまけと言う露店
血税を大臣無造作に使う
無造作に花盗人は枝を折る
無造作に書いたハガキが採用され
無造作に足組むおんなガムを噛む
無造作の言葉の中に光るもの
無造作に打つても攻守兼ねた石
サラサラと無造作に描く線が生き
無造作に別れる話猫が聞き
無造作に別れないと言う易者
五本の指が無造作に友を撰る
無造作さそこがスキよと言われたぜ
無造作な請判からの気の疲れ
無造作に寝ころぶ芝生春の風
無造作に見せて女に隙がない
無造作な男が知っているなさけ
無造作に犬を連れて今日を生きた髪
無造作に束ねて今日来た団地
無造作な石一つにも禪がある
無造作に活けていのちを失わず
サインだけ上手に書いて人氣なし
川柳わかやま
一粒の勢い大地を持ち上げる
勢いの中でゆっくり歩きたい
徐々に徐々に軍靴勢い増してくる
ジョンカラの勢い冬山満ちてくる
雑草の勢い挫折なく知らぬ
背な凜と今日のいくさの束ね髪
髪型を変える女の自己顕示
人形の髪を洗うて娘の無口

智 子 覚 然 坊 規 不 風 美 乙 女 信 義 千 代 三 花 仔 邦 晴 文 秋 重 人 信 治 鎮 彦 凡 九 郎 小 路 悅 郎 柳 伸 子 白 兔 甘 平 鬼 遊 美 幸 一 二 三 悟 郎 堀 端 三 男 報 紀 久 子 狂 虎 緑 良 幸 和 子 三 男 白 光 子

冗談と聞いてよいのか九官鳥

く
に
の

臥す妻のメモに従う市場籠

春枝

この人のまごころ女賭けてみる

かすみ

お茶会が始まってすぐシビレ切れ
始球式ボールのとどくことは稀
始めてのデートに妹つれてくる
大吉を始めてひいた初詣り

年始めお金出す人入れる人
半分ずつ半分にある平等感
嘘半分その半分に騙される

半分ずつやで今も亡母の声する
星空へ祈り初出の靴磨く
釣竿を磨く釣場に行けぬ父

銀の匙磨き別れの刻が来る
何もかも磨いて明日の糧にする
磨く玉持つ倅その余生の賦

ホーナスは餅代という年を越し
永年の女系を変える柏餅
暖冬でもうかびて来た鏡餅

南米も雄煮で祝う日本人
餅焼くや夫婦の月日遙かなり
餅を搞く秋田おばこを夢で抱く

鏡餅ヒビ割れ出来て初春が行く
お雑煮はやっぱり母の味を真似
百までも生きさるつもりを灸をすえ

百人の友刎頭の友ならず
百面相出店に並ぶ人生図
百姓を捨てる夜汽車に地図を持つ

煩惱を雪に清めた百八つ
百人一首めばえた恋が触れあつて
百科辞典に私の過去が書いてない

結局は見るだけに白い百貨店
百花繚乱どこかに白い馬がいる
死なれたら困る女房に小言いう

美香都
墮駄

きよ子
貞子

弘生
みつ子

喜代子
幽香

佳秋
伊升

月子
春子

千世子
右近

笑女
はつ絵

牧郎
伊三郎

美代子
光子

半歩
薫風

キミ
三笑子

ゆきを
宏香

紫香
いわゑ

水客
潮花

ストレス解消に靴を光らせる
米櫃の中は男に覗かせぬ
素うとんで別れ話にならずすみ

走るほかなかつた母のひとり言
別々の趣味もち両方妬んでいる
福笹の大きい方を撰っている

先輩の好きな匂いを覚えとく
人形で終った生にも自負がある
職安を出てまっ直に目刺し焼く

尼崎いくしま川柳会 黒川
ともかくも拇印ですんだ指を拭く
止り木のビール飲む顔にある翳り

しぐれ来る菊の終りの私語を聞く
初夢を炬燵の中で話し合う
炬燵から孫のわるさをにらみつけ

花札が炬燵の横に落ちている
退屈をさせぬ女がいる炬燵
こたつの中で男は嘘を編みはじめ

手相見のオッサンなんて出世せぬ
荒れた手に今日の充実感がさる
ふるさとに戻ると飯面はがさる

励ましの年賀に触れる老いの春
年の暮盡園からも来る便り
描きあげた画布に男の彩を足す

作業着で送金をする暮の局
年金は据置らしい冬ごもり
手相など一向気にしなせぬ私

寡婦の手へ晩蓮ですと如才なし
町の死角で手相見灯をととす
金貯まる手相の女房を持て余し

仁王さまの手相を静かに語り合う

天笑
智子

水声
晴子

満津子
満津子

道子
年子

紫香報
泰

定人
千子

春子
かね子

中石
伊升

かすみ
晴子

保蔵
ハツエ

紫香
静江

かす子
晃美

美代子
牧郎

すえ
佳秋

玉子
伊三郎

郁榮

柳友会復刊10周年記念

全国誌上大会募集

課題「男と女」(二題十人選・三句)

選者 田中好啓・磯野いさむ・野村圭佑
長谷川鮮山・渡辺蓮夫・藤島茶六

菅原一宇・宮本紗光・越郷黙朗・
賀波沢黙六

【募集要項】

◇投句料 千円(三句一組、何組でも可)
未発表句に限る。

◇原稿用紙半載に住所、氏名、雅号明記

◇切 昭和58年5月末消印

◇発表 昭和58年9月号

◇投句先 東京都文京区小石川5-30-1
全国誌上大会係 鈴木甘平宛

電話 03-8113-0541

化粧ではかくせぬ疲れみしてしまつ

ふくよかな掌にみる相のおだやかさ

猪にどこがめでたいばたん鍋

成人式迎えてうれし車椅子

祖母自慢のおせちに孫らふりむかず

ハワイ川柳ウイロー社 市岡 暁舟報

憧れているから遠く座をしめる

騒がれる程に憧れ強くなり

憧れた彼女のえくぼ眼に残り

美しき憧れ満ちし若き頃

年子 千代女
君子 幸子
貞子 美紀子
玉泉 三十四
高原子 秀山

こんな人憧れたのか同窓会
ふと思う憧れた人いま何処
憧れの古里懐し母の唄

憧れた人呆気なく嫁つちまい
憧れを洗えば矢張り恋でした
憧れた楽園矢張り寝て食べず

ハワイ行き憧れの島夜に虹
憧れて好きだと言えぬ若い頃
青春の夢憧れの的となり

憧れた都会で田舎の良さを知り
憧れの夢は千里を駆けめぐり
ババの次孫の憧れスパーマン

憧れて待った甲斐あり同窓会
憧れて待っているから情熱さけ出し
憧れて来ては見たけど東京砂漠

憧れて待つ街の灯へ雨が降る
憧れていますと強い電話口
憧れの昔の思い出淡くなり

冬ぬくさ憧れてくる老夫婦
憧れの古里知らぬ顔ばかり
富田林富柳会

先生を囲んで話す同窓会
不合格泣く泣く親も泣き
啄木の詩集を撫でる泣きはくろ

梅桜春のリズムのミュージック
掌に土の温もりのせてみる
喧嘩して最後の手だと泣き落し

恋をして生活のリズム狂わされ
もう泣かぬ散のふたが濡れるから
お別れのぬくい言葉を楯とする

花梢

十吉

虹宵

カリコ

三里石

万里歩

香夢心

天心

失名

桐山

歌子

雪女

うれしきで泣ける涙の甘いこと
けつないな夫婦リズムはどこ合う
日本一の顔を囲んだダルマの眼

羽んでいる女のリズム捉めない
ぬくもりを感じる人と心地良く
平凡なリズム狂わす魔女が来る

炬燵から隠居気のない返事する
早然が草木にもあり桜咲く
口下手が縁談まとめた日の手柄

財布布なはたいて気楽なジョッピング
毎度バスで出会う女の名を知らず
学歴と身長で振る惜しい縁

人間の弱い本音を托す絵馬
婿を買う金を娘も貯め始む
バスツアー年金女性で席埋まる

趣味の会こもライバルだけが寄り
それそれに愛を授けて神疲れ
故郷で死にたがった父の骨

募金箱小銭ですませぬ顔が立ち
さくら二号私の恋もキャッチする
信じ合う温くも言葉など要らぬ

炎えつきたグラスの底にあった思慕
引き返す決断山男が光り
振り上げた手がおろせない及び腰

千鳥足星の流れにふと気付き
城北川柳会
野呂

インデアンは信用しない星条旗
係が来て笑い薬を置いて行き
木蓮が芽を吹きました春の音

冬いちご今年も私は満たされぬ

美代

柳太

維久子

美房

為之助

泰子

早苗

登美也

独仙

孝華

きみえ

幾星霜終ても壁画は人を魅す
降る様な星に抱かれて山の里
思春期の少女は星の言葉知る

降る星の下であなたを囁せない
ジントス信じ勝たねば刺らぬ髭
沈丁花のつぼみ二月を追って居る

戻り寒老いの仕事もはかどらず
黒柿の髭にやさしく吻まれ
ビルの影農村にまで伸びて来る

髭の兄やさしく強く雄々しくて
三分髭髭も気になる程に癒え
権威からアクセサリーになった髭

雪山よ髭のあいつにケルン積む
髭髭をいじり見上げる膝の孫
髭髭下昔言うたら不敬罪

髭髭の鐘撞が孫に恐れられ
銀色の髭を伸ばして居る余生
金策に星だけ灯りつけてくれ

逃げ切れぬ心の隅に星一つ
割勘も髭の手前で多く出す
不精髭生やし二浪に來ない春

ボスターに口髭書いていたずらっ子
もう星にロマンは追えぬ齡と知る
今日も又背筋の寒い記事ばかり

先輩に恩をかえした白い星
信号の上に出て居たオリオン座
通夜の上で一人張り切る次期課長

老人会星影のワルツ皆唄い
紙の雛木の菱餅に桃の花
梅の香よ星冴ゆる夜の薄化粧

満津子

千世子

新一郎

右近

道子

松太郎

英王子

炬斎

笑風

三和

すみれ

静子

千世子

新一郎

右近

道子

松太郎

英王子

炬斎

笑風

三和

すみれ

静子

本社六月句会

日時 六月七日(火) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

おはなし

兼題

「だんご」

「見込み」

「鈍い」

「嘘」

席題

二題 当日発表

各題三句以内厳守

会費 五百円

宮口笛生

板尾岳人選

高杉鬼遊選

阿萬萬的選

黒川紫香選

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

7月の兼題

「いけにえ」
「ボタ」

「貫転」
「く向」

題

「夜市川柳」募集

「徹夜」 選者 橘高薫風

(句箋に一句ずつ、三句以内)

締切 5月20日

初年度最終会

「主役」 選者 西尾 葉

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九-一

河内天笑方 堺川柳会

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 葉選

水煙抄(10句) 黒川 紫香選

愛染帖(3句) 橘高 薫風選

課題吟(各題5句以内)

「自信」 山本 規不風選

「愛」 八木 千代選

「誘う」 吉岡 美房選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りまず。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 葉選

水煙抄(10句) 黒川 紫香選

愛染帖(3句) 橘高 薫風選

課題吟(各題5句以内)

「コース」 柳楽 鶴丸選

「夢」 岩田 美代選

「竹」 古谷 節夫選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。

★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

5月の常任理事会は2日(月)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十八年四月二十五日印刷

昭和五十八年五月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

大阪市阿倍野区三好町二一〇-一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話(二)六九一六九一四番

振替口座大阪・三三三六八番

川柳塔社

編集後記

☆句評リレーは好評だが、しばらくお休みを頂いて先月号から「白選百句」を掲載している。さしあたり、

ペーラン諸家と編集部の中

堅作家にお願いし、原稿は続々と到着しているので、

初心の方は熟読玩味して作句の指針にして頂きたい。

☆私は胃半分肺半分の身障者と云える体だが成形手術後、肺結核は全快、三人の

子供をもうけた。長女の名は章子、命の恩人の肺臓外科の権威、武田義章博士の

一字を頂戴して命名した。次女は幸で、生まれた時、

路郎先生が「わしの名をあげよう。路（みち）と名付け

たら」と仰言って下さったが「路は蹴し過ぎるので娘

には不向き」と思われます。本名の幸二郎の一字を下さ

い」と申し上げた。妻は、「梅幸さんの幸ですか」と

大賛成、尾上梅幸の大のファンだったことが大いに幸

いして即座に決まったのである。長男は充。次男には

実と付ける予定であった。

妻が子宮外妊娠で流産、開腹手術を受けたが、果たして男の子だった。以来子供

は出来ず、充実は夢で終わってしまった。

☆「雅号ぶっちゃけばなし」

同人の方は写真と共に編集部へお寄せ下さい。（薫）

☆山形県に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基に

して、殊に清閑の地なりと芭蕉は、『奥の細道』に記

している。閑さや岩にしみ

石寺に於いてである。

☆西川景子さんの話、立石寺にみちのく旅行で立寄っ

たときのこと。どこのお寺でもそうだが、本堂の前に

大香炉があり、線香の煙がただよっている。早速その

煙に触れた手で、頭や胸をさすりはじめた。小学生の一

団がやって来て、「おばさん、伺してるの」と尋ね

る。「このお線香の煙にふれた手で、頭や体を撫でる

と、頭はよくなるし、体も丈夫になるのよ」と教え

る。さあ大変、児童達は早

速、お線香をフウフウ吹き

はじめ、灰神楽がたつても

かまわず煙に懸命に触れ

て、頭を擦すり出す。後から来た若い女の先生が、児

童にその訳を聞く。こんどは先生と一緒にフウフウ。

☆女の先生、こんな風習を知らなかったらしい。考え

てみると、土俗信仰とか、風習とか、このようにして

伝播していくのだろう。これこそ、仏さまとのスキン

シップなのであろう。

▼本社宛の送金には、現金書留、郵便振替、手渡し等

いろいろの方法で、同人費や誌代を納めてもらっている。句会等でお会い出来る

方は別として、地方の方々には書留か振替かの方法によ

るしかなく、これがなかなか厄介なのである。それ

だけに領収のお礼には、おだいを込めて手書きで差し

上げている。金額にもよるが現金書留であれば最低四

一〇〇円の郵便料が要る。郵便振替であれば一〇〇円以

下の料金で、用紙で違うが

下の方か又は裏面に通信欄があり、簡単な通信もでき

る様になっているので甚だ便利である。しかし書留も

振替も郵便局まで出向いてからわなくてはならないの

が恐縮である。振替用紙の通信欄に、誌代六ヶ月分と

か同人費一ヶ月分とか明細

記入のある分には間違いないが、何も書いてないものが半数以上ある。書

いてなくとも振込人名によ

って大よその見当はつくが書いて下さるにしたこと

はない。四月になったから高校生です。十五歳になり

ます。お小使いの中からです。で半年分お送り致します。

今後ともよろしくお願いします。こんな通信記事の払込を頂いた。き

☆樋口一峯さんが亡くなった。早や一年経った。この四月二十九日、二周忌が来る。

一峯さんと云えば「何げなくいっしょに洗濯してあげる」の句で昭和四十四年度

川柳塔賞準優秀作の栄誉に輝いたこともあるが、その

名を記憶している人は、もう少いだろう。

☆僕が一峯さんと出会ったのは昭和三十五年羽曳野病院で、その時の強烈な印象は未だに忘れがたい。イガ

栗頭くたびれた目、風呂敷包み一つで病室に入ってきた姿を見て、とっさに

「刑務所から来たんかいな」と思ったくらいだ。その夜

ベッドの傍で刀の錆を弄びながら香具師の裏話を聞か

せてくれた。とにかく僕なんかには想像もつかぬ苦勞の人生は、体を張って生き

ているといったところがあった。今思うと横井庄一的

知識や人生哲学だったが、実にいろんなことを一峯さんから教わった。教わりつ

た。そして忽然と逝ってしまった。

☆お線香をあげに行き、奥さんから見せてもらった彼の晩年の写真は、僕の好きなアメリカの性格俳優ジャック・バランスにそっくり

であった。

この夏、おいしさひとりにじめ……………

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾカ店
近鉄(アベノ・土六・奈良・東大阪・京都各店)
サナ・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
[国鉄大阪駅店]
大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警 察 庁 ・ 警 視 庁
全 国 府 県 警 察
大 阪 府 警 察 本 部
講 道 館 ・ 御 指 定